78-69
1200501293251

78-69

戸澤姑射
淺野馮雲 共譯

文學士
戸澤姑射
譯

沙翁全集

第五卷

王アリ

發兌
大日本圖書株式會社
明治四十年三版

大正
2. 3. 12
購求

一言

沙翁全集第五卷を刊行するに當り、譯者は江湖の識者諸君、殊に新聞雜誌に批評の筆を執らるゝ評家諸氏が、本集に對し毎回同情ある評言を公にせられ、懇切なる敎誡と奬勵の辭とを與へられたるを謝す。蓋し此種の事業たる諸君の贊助に待つ所大なるは、今更喋々を要せざればなり。譯者は又讀者諸君が眞摯なる研究的態度に謝する所なかる可からず。若し研究的態度を以てするにあらざれば換言すれば只だ錆閑の具に供せむとならば、沙翁全集購讀の如きは、頭をも胸をも痛めざる講談落語の筆記にだも、或は劣る所あるべければなり。

回顧すれば昨秋本集第一卷を發刊して以來茲に一年、此過ぐる一年間

に五卷を刊行し得たるは、略ぼ譯者等が豫期にかなへり。後の一年間に於ても、之に劣らざるの數を刊行し得むとは譯者等が密かに期する所なり。只だ憾むらくは下根淺才、所謂瓜の蔓に茄子の生らざることを、然れども せめては出來得る限りの改良を施し、瓜は瓜なりに其最上品を江湖の市場に提供するを力むるを以て庶幾くは譯者が任務と爲さむ。

明治三十九年九月

本篇の譯者

リア王の悲劇解說

(一) 刊行の年月
(二) 書下の年月
(三) 材料の出處
(四) 梗概
(五) 重なる人物の性格
(六) 此劇に對する著名なる評家の言
(七) 該譯稿に就ての注意

(一) 刊行の年月

此脚本の初めて刊行せられたるは、一、六、〇、八年、にして、同年内に二種の刻本を出せり。出版者は同一人にして、所謂第一クヲート版第二クヲート版是なり。然れども第二クヲート版は、只だ第一クヲート版の校正を嚴密にし、印刷を鮮明にしたるに止まり、肯て異なれる原本に依りたるにあらず。されば第一第二のクヲート本は、其實同一版なりと見るも大なる差支を見ずと云へり。而して此クヲート版は、果して作者、若くはそが書下されたる一座の承認を受けたる上の出版なるや否やは、長へに解決すべからざる疑問なるが、恐らくはさる承認を受けたるにはあらざるべし。即ち作者若くは興行權所有者の干知する出版にはあらざるならむ。

一六二三年の沙翁全集、即ち第一フヲリオ版は、確實なる原本に依れりと稱するものなるが、該全集中に採錄せられたる「リア王」を、右のクヲート

版と比較するに、文字の相違せる點甚だ多く、且つクヲート版に存して、フヲリオ版に全く存せざる文句約三百行あり、又フヲリオに存して、クヲートに存せざる文句約百十行あり。而して此等は何れも沙翁の筆なるべきは、古來の學者の少しも疑を挿まざる所なりといふ。されば「クヲート版」と「フヲリオ版」とは、其原本の出處を異にせるは、略ぼ明かなるが、何れが書下し當時の原本にして、何れが作者若くは他人の斧削を經たる修正本なるべきか、將た一方に存せずして、他方に存する文句は、後に附け加へたるものなるべきか、或は後に省きたるものなるべきか、是れ亦た決し難き疑問と知るべし。但し現今世に行はるゝ所の正本（アルスト）は、大抵兩版の脫文を悉く併せたるものなり、本譯篇の如き亦然り。

(二) 書下の年月

前記の第一及び第二クヲート版の表紙には、過ぐる降誕節(クリスマス)セント、ステフハン祭日の夜(十二月廿六日)國王陛下の天覽に供へたる赴を記せり。然るに此版は、何れも一六〇八年の發行なるは既に云へるが如し。而して十二月廿六日に興行したるものを、年内に發行せむことは、印刷術の幼稚なる當時に在つて、及びもつかぬ事なれば、こゝに所謂セント、ステフハン祭日の夜は、一六〇八年以前ならざるべからず。果然當時の新刊書籍登録簿中、一六〇七年十一月廿六日の條にナサニエル、バッター(第一第二クヲート版の發行者)なるもの、沙翁作脚本「リア王」の登録をなし、前年のセントステフハンス祭日の夜、陛下の天覽に供へたるものなるよしを記したり。此登録に依つて、所謂十

二月廿六日は、一六〇六年なるを知ることを得、故に此劇の書下されたるは、一六〇六年十二月以後なることとなし。

さて又右の書籍登録簿中、一六〇三年三月十六日の條にハアスチットト著「奇怪なる羅馬教の欺瞞云々」と稱する一書の登録あり。此書中には種々の惡魔の名稱を列擧しありしが、「リア王」第三幕エッヂャー佯狂の條に、彼が白中明かに此書中より引用せる惡魔の名稱數多を含めり。之に依つて「リア王」の書下されたるは、一六〇三年三月以前なることとなし。

此の如く兩極端は全然何等の疑をも挿む能はざる程明瞭なり。然れども其兩極端の間約四年あり、此四年の中何れの年月を以て書下しの年月となすべきかに就きては古來異說多し。然らば何れの說が尤も優勢なるべきかと云ふに、近來は一六〇六年說を以て尤も優勢と認むべきが如し、

其理由の重なるものは天覽に供するといへる如き場合は、新作の脚本を用ふるが至當なるべく、又當時さる風習なりければといふにあり。

若し此說を正しとすれば、此劇の書下されし時、沙翁は年齡方さに四十三才（數へ年）既にハムレット、オセロを作して、悲劇上の手腕益す圓熟せるの時なりとす。

（三）材料の出處

リア王及び其三人の王女に就きての物語は、其起源甚だ遠く、恐らくアングロ、サキソン以前の、ケルト人種の間に起り、口碑としてエールスの山間に傳りしものならむと云へり。而して之が記錄の尤も古きものは、彼のモンマウスのヂエオフレイが英國史（ヒストリア・ブリトナム）中の一節なり（一一三五年頃の作にして拉典語にて書かれたるも）。之に次ぎては、アングロ、ノルマン人ウェースが佛文の物語（一一五五年頃の作）、又初めて英文にて記されたるは、十三世紀の初期に現れたるレーヤモンが長篇の詩中に於てとす。之に次いでは十三世紀の末、若くは十四世紀の初に現れたる、ロバート、オブ、グロスターが韻文の野史、殆んど半世紀の後に出でたるロバート、マンニングが史詩、スペンサーが有名なる「フェーリー、クヰーン」中の一節、最後に一五七七年發行のホリンシェッドが史譚等なり。此外散文若くは韻文にて綴りたる史談にして、此物語を載せたるもの數種あり、何れも其結構大同小異なり。又此外既に一五九四年に、書籍登錄簿中に登錄せられたる、エドワード、ホワイトなる者の發行に係る、作者不明「リア王の史劇」ありたり。又一六〇五年にも、ジョン、ライトなる者の發賣に係り、同じく作者不明なる「リア王の史劇」てふ一書の登錄せられたる

ものあり。但しこは前のホワイト發行のものと同一物ならむと云へり。

右の中沙翁が重に根據としたるものは、ホリンシエッドが史譚なるべしとは、多くの評家の一致する所なり。然れども更に直接なる扮本は、寧ろ從來行はれ來りたるリア王劇ならむとは、又勢力ある一說なり。但し沙翁は、此劇に於ては、少しも原本に拘泥せず、チエオフレー以下の諸書の長を取り短を棄て、更に己が空想を以て練り直し、全く新なるリア物語を創作せるの觀あり。而して是れ即ち沙翁が扮本とせるものゝ何れなるかに就き、諸說紛々たる所以なり。從前の物語は其終局何れも悲劇的ならず。リアは佛國に赴き、佛王及びコルデリアの擁護を得、兵力を以て首尾克く本國に還り、再び王位に即き、幸福なる晩年を送るを得たる由を云へり。之に悲劇的終結を與へたるは實に沙翁を以て始めとなす。

沙翁は又此劇に於て、從前より行はれたるリア物語のみを以て其筋となさず、更に之に加ふるに、グロスター伯父子に關する物語を以てし、此相似て而かも其趣を異にせる正副二條の物語を混合し、之を打つて一丸となし、渾然たる一條の哀史を作りたり。而して此グロスター父子の物語は、サア、フヰリップ、シドテイが「アルカヂア」中の一話を、人物の名を換へ、又多少の修正を加へて採用したるなりと云ふは、動かすべからざる確說なるに似たり。

(四) 梗概

領土の分配

プリテイン國王リア、在位既に數十年、齡方さに八旬を超えたれども位を讓るべき世子なし、乃ち國を三人の王女に分配せむと

す。此時第一王女ゴチリルは、既に嫁してアルバニー公爵夫人たり。又第二王女レガンは、同じく嫁してコーンウヲール公爵夫人たり。獨り第三王女コルデリアのみ未だ嫁せず、當時フランス王幷にブルガンデイ公より結婚の申込あり、此二人最終の返答を得むが爲めに、恰かも宮中に來り滯在するに會す。さて三王女への配分は、既に內定せるにも拘らず、リアは之を披露する前に、三王女が父に對する愛情の淺深を探らむとの、寧ろ愚にもつかぬ考を起し、三王女を召して告げて曰く、此度の領國分配は、汝等が父に對する愛情の度に依つて多少を決すべし、故に汝等各殘る所なく、父に對する心のたけを、今茲に言明せよと。ゴチリル及びレガンの二人は元來毒婦なり、父に對する愛情などは兎の毛の露程もあるべき理なし、然かも巧言令色を以て、父を思ふ孝心の、此上もなく深き由を、寧ろ聞苦しきまで

に、こつこく飾り立てゝ言上に及べば、リアは愚かにもこを信じて大に喜び、王國の三分の一宛を二人に與ふ。次にコルデリアは、彼が最愛の女にして日頃至つて孝心深く萬づ心ざまを優れて美はしかりければ、此度こそ二人の姉にも優りて、嘸や父を喜ばすべき大々的美辭を呈するならむと思ひきや、彼女は日頃二人の姉の心ざまを知れるが故に、今此仰々しき諛辭を聞きて苦々しさに堪へず、却つて日頃の優しさにも似ず、妾は只だ父に對して子たる義務を盡すに過ぎず、豈に他あらむやと、そつけなく云ひ放つに、リアは大に怒りて憤りの餘り、彼女に與ふべき筈の配分を、二人の姉、幷に其夫に分與し、最早父にもあらず子にもあらず、未來永劫親子の緣を切りしぞとの宣言あり。而してこれより以後、リアは只だ國王の稱號を留むるのみにて、實際の王權及び凡ての內帑は、之を二人の婿に讓り、己れは

一百人の武官を召抱え、之に冊かれて一月毎に、交る〳〵二人が館に赴き滯在し、以て幾くもなき餘命を送らむと披露せり。此時リアが大忠臣ケント[8]の伯爵は進み出て、コルデリアの爲めに辨解し、是非共此綸言を撤回せしめむとし一命を賭して諫諍せしかども、遂に其効なく、却つてリアの怒を增し、五日の猶豫を以て國外追放の刑に處せられたり。此時宮中に滯在せるフランス王及びブルガンディ公は、導かれて此場に入來りしが、ブルガンディ公は、コルデリア父の不興を受け、今は身につく配分もなき由を知り、さる條件にては、娶りて夫人と爲すこと能はざる由を云ひて手を引けり。然るにフランス王はコルデリア勘當の原因は、只だ阿諛の辭を述ぶること能はざりしに在るを知り、乃ち曰く、棄てられて愈よ其美を增し、身につく財寶を失ひて却ていや貴きは彼女なり。彼女其者こそは、何者にも代へ難き寶にてあれ。予は今程彼女に對する戀愛の焰の熾となれりし事あらず。乃ちコルデリアは予が申受けて、全フランス國の王妃となすべしと、嘯て其まゝコルデリアの手を取り、相携へて本國に歸還せり。

かくてリアは約の如く、當夜より直ちにゴネリルが許、即ちアルバニー公の居城に赴き、一百人の武官を侍從として滯在せしが、未だ約定の一ケ月も經過せざる中、否な未だ二週間にもならざるに、ゴネリルは早くも倦厭の心を生じ、武官共が亂暴狼藉を口實として、父への待遇を等閑にし、父の顏を見ては態と面を蔽め、或は病に托して父の前に出るとを拒み、己が家臣等にも嚴命して、成るべく疎末の待遇を肯てせしめなど、あるまじき行爲度々に及びたり。

ケント及び　こゝに又ケントは、王命背き難く、本國を立ち去る振して、密

道化の忠義

かに服裝を變じ、一賤奴に身を窶して、アルバニー公が居城に忍び入り、リアに面謁して、己を召使の奴僕と爲し賜はらむことを乞ひしに、王は其朴訥なる言語態度を嘉して、早速其願を聞屆けたり。折しも王は武官を引連れ、狩場より還御早々の事なりしが、ゴネリルが寵愛の執事オスワルドなる卑劣漢、王の前に出で無禮の言動を爲せしにケント之を不快に思ひ、其場に蹴倒して散々に辱めたるを見、王は此新參の家來が勇氣に感じ入り、これよりして無二の寵幸を與ふるに至れり。蓋し王位と共に凡ての味方凡ての頼みを失ひたるリアが、此世に於ける唯一の味方と頼みとは、今や追放せる此ケントと、從前より召使ひたる道化坊主との二人を有するのみなるに至りしなり。序ながら此道化は他の劇に於ては餘り重要ならざる役を演じ、大體の筋には何等の關係もなきが常なれど、「リア王」の場合には、大に其趣を異にし、彼が皮肉なる諧謔の中に、「リア」が二人の姉娘に國を讓り、コルデリアを勘當したるを諷しつゝも、決してリアが身邊を去らず、只管其慰藉に力め、少しも己が勞を辭せざる所、誠にケントに次ぐ大忠臣と云ひ得べき程なり。又沙翁は此道化の諧謔を藉りて、リアが悲慘なる身心の狀態を活寫し、讀者に與ふる印象を一層明瞭ならしめたる、例の大手腕の程敬服の外なし。だゞ諧謔の語たる其意は譯すべくして其味は容易に傳ふべくもあらず。之が爲め本譯に於ては此寧ろ痛快なる道化が白は、其効力の大に減少せられたるべきは譯者の遺憾に堪へざる所なり。

リア、アルバニ一邸を退去す

それはさて置き、リアは娘の待遇の甚だ冷淡に、疲勞せる老軀を狩倉よりもたらし歸りつる此夕にも未だ晩餐の

準備もなく、執事は無禮を肯てして憚らず、ゴネリルは出迎ひもせざる等閑の擧動に憤激し、ゴネリルを呼出して之を詰問するに、ゴネリルは豫て期したる事なれば、こゝぞとばかりに武官共の亂暴狼藉を並べ立て、今は此まゝには棄て置き難し、以後は彼等の數を半數に減ずるにあらざれば父上の御宿は致し難しと斷言す。リア初めはよもやと思ひしがゴネリルの云ふ所冗談にもあらず嘯文句にもあらず、實際の要求なるを知るや、怒心頭より起り、彼女が言行の一致せざるを責め、忘恩背德を罵り、更に激烈なる呪咀の言を爲し、此上は一日も此館に逗留することなかるべし。今より直ちに妹レガンが居城に赴かむと高言し、早速馬の用意を命じ、一百人の武官を率ゐてアルバニー公が居城を出てたり。去らむとするに莅み、何事をも知らぬアルバニー公はリアを推留め憤激の因由を尋ね問ひしが、

リアは耳にも入れず、振り放つて出て行けり。元來アルバニー公はゴネリルの毒惡に似ず、至つて明德の君主なれば、ゴネリルが父王虐遇の一條には少しも預り知ることなきなり。さればリアの退去後ゴネリルに向ひ其不孝を責めて假借する所なかりき。

さてもリアは城門の外に出て、先づ今より赴くべき由をレガン方即ちコーンウヲール邸に報知し置くの要ありとなし、草々に一書を認め、之を新參の侍臣ケントに托し、大急ぎにて一足先に彼處へ赴き交附すべきを命じたり。之と同時にゴネリルも豫てレガンと打合せ置きたる事なれば、同じく一書を認め、彼の執事オスワルドに托してコーンウヲール邸へと急がせたり。話變りて、コーンウヲール邸にては其夜リアよりの書面にて、リアの一行程なく到着すべき由を知り、驚き居る所へ、間もなくゴネリル

よりの一書到着、披見すればアルバニー邸にての始終の樣子を述べたる上、如何にもして武官の數を減ぜしめむとの提議に添へて、此書面一覽次第、リアの未だ到着せざるに先だち、他處に赴き不在と稱せよとの勸言あり、更に精しき樣子はゴチリル自身間もなく來り會して談合すべしとあり。レガンは直ちに此勸言に從ひ、夫コーンウヲール公をも誘ひ、共々に程遠からぬグロスター伯が居城へ赴き、俄かの押懸客となれり。此騷ぎにリアが使者ケントゴチリルが使者オスワルドへの返事も即座に與ふることを能はず。何れグロスター邸に落つきたる上の事と、其由兩使者に告げ、兩使者は右返書受取の爲め後よりグロスター邸へ來るべき由命ぜられたり。

抑もグロスター伯とは何者ぞ、彼はリアの舊臣にて、既に高齢の老人なるが、二人の男兒あり、長はエッヂャーとて嫡子、次はエドワードとて庶子なり。然るにエドワードは無類の惡漢にして、且つ美男子なりたゞ庶子なるが爲め、領土家產を相續すること能はざるを遺憾とし、乃ち奸智を以て父を欺き、エッヂャーを陷れ、己れ之に代らむとの野望を起し、贋手紙を以て父を欺き、エッヂャーこそは父を殺して一日も早く其財產を相續せむとの陰謀を企てたりと讒言し、一方には兄のエッヂャーに向ひ、父上には卿に對し、何等か誤解する所ありて、甚く憤激せられたれば、卿を見付次第譯もなく刃に訴へむとはせらるべければ、暫く潛伏せられよと欺きて、父に會合することなからしめ、父の嫌疑益す深く頻りにエッヂャーの在家を搜索して止まざるに及び、又巧みに欺きてエッヂャーを遁逃せしめ、其時己れは刃を以てわざと腕に傷け血を出し、

グロスター父子の關係

今しも兄のエッヂャー再び尋ね來り、又父殺害の陰謀に加入せむことを勸めしが、斷然拒絶するに及び、怒つてかく斬りつけながら逃げ失せたりと稱す。父グロスターはかくと聞きて大に怒り、此上はコーンウヨール公に願ひ、國内到る處の港々に關を据ゑても、彼が行衛を尋ね出し、嚴刑に處せむといきまき騷ぐ處へ、折しも來り合はせしは則ち押懸客のコーンウヨール公並に夫人レガンなり。二人も此顚末を聞いて眞實と思ひ、グロスターの身の上を憫み、不孝者エッヂャーを尋ね出す爲めには、如何なる方法を取るも、苦しからずと告げ、更にエドマントに對しては大に其孝心を賞し、改めてコーンウヨール公が直參の臣下に取立つる由を言明せり。

リア王の門前拂ひ

程なく先の兩使者ケント並にオスワルドは別々にグロスター邸の門前迄來りしが、端なくも二人此處にて邂逅し數回の

問答の後、ケントは否應なしにオスワルドを引出し、決鬪に及ばむとせしに、卑怯者のオスワルドは大聲を發して助けを呼びしかば、邸内よりは先づエドマンド、續いてグロスター、公爵夫妻等出來り、二人を認めて爭鬪の理由を訊問せし所、ケントが返答の不遜なるを惡み、公爵夫妻の命令にてグロスターが諫むるをも聽かず、あはれ父王よりの使者なる此ケントを足械（あしかせ）に懸け、其儘門前に曝し置きて一同歸館せり。さて間もなくの事なりき、リアは彼の道化と一人の紳士とを伴ひ、レガンの後を追うて、グロスター邸へと尋ね至りしが門前にて我が使者たるケントが足械に懸けられ居るを見て大に驚き、レガン等の所爲と聞いて更に大に怪みつゝ、さて公爵夫妻を呼出して面會し、今宵俄かにゴネリルの許を辭し、レガンの許へ來り投じたる一伍一什を物語り、ゴネリルの不孝不義を鳴らすに、豈に圖

らむや、レガンは父王に同情を寄すべしと思ひきや、却て姉の肩を持ち、父の心得違なるよしを說き、殊に今夜は豫ての約束の日にもあらず、謂はゞ旅行先にて父上接待の準備もなければ、これより姉君の許へ立還り、今迄の不心得を謝せよと告ぐ。リアいかで斯かる勸告に從はむ、押問答の最中ゴチリルも來り會せり。此に於て姉妹口を揃へて父を攻擊し、武官の數を減じ〳〵て、半數より其又半數、更に進んで十人に減じ五人に減じ、果ては一人をも召抱え置くに於ては、父王の御宿は何れに於ても斷然拒絶すべき由を廣言せり。コーンウヨール公將たアルバニー公の溫良に似ず、凶猛無比の暴主なれば、姉妹に力を協せて王を非難せり。此に至つてリアは憤怒の頂點に達し、折しも夜既に深く、暴風雨將さに至らむとする空模樣なりしにも拘らず、かゝる不孝娘の賓客たらむよりは、野天に白頭を曝すの

優れるに若かずとなし、其まゝ其處を立出で、足械より放たれたるケントと及び道化等を携へしのみにて、行くべき當もなき闇中に突進せり。風はざわ〳〵と木の葉を騷がし、雷鳴電閃遠く至らむとして空合尋常ならざるに、此邊り一面の荒野にて、グロスター邸を除いては、數里四方が間立寄るべき藪蔭もなし。

ドーバー落

間もなく暴風雨は襲ひ至れり。ケントと一紳士とは道を失して、吹いて此天地を滅却せよ、一新せよと呼廻はりつゝ、頭には一片の布をも戴かず、騎り來りたる馬をさへ何時の間にか乘り棄てたり。かくて胸中の暴風雨を外界のそれと戰はしつゝ狂ひ狂ひて狂ひ廻れる中、彼のケントはいかにしてか佛國なるコルデリア、密かに軍を率ゐてドーバー港へ上

陸せし由の報道を得、即ちコリデリア宛の一書を認めて之を一紳士に托し、ドーバーへ向け直ちに發向せしめたる上、諸方を搜索して漸うリアに邂逅せり。さて告げて曰く今夜の此暴風雨には、熊狼も穴に隱れ、闇を愛する動物なりとも恐れて逃れ潛むべし。ましてかよわき人間の到底堪え得る所にあらず、幸ひ今途中にて一軒のさゝやかなる小舍を見出し置きたり。せめて彼處へ導きまゐらせ、其處にて一夜を過ごさせ申さむと。此時リアは心氣少しく混亂して發狂の氣味あり。澁々ながらケントに案内させて件の小舍に至り、先づ道化をして中に入らしめしに、彼は忽ち怪物ありくゝと叫びながら出來れり。此怪物こそは、よく見れば物狂ひの非人にして、身には腰の周りに一枚の襤褸を纏ひしのみ、見るも哀れの狀態なるに、リアは一見して同情の念につまされ、汝も娘に家藏を讓つて此の有樣に成下りしかとて、又も不孝娘を呪咀して止まず。さても此非人とは何者ぞ、これぞ彼の父グロスターが嫌疑を受けたる嫡子エッヂャーにて、無實の罪故身の置き處なく、暫く逮捕の耻辱を逃れて、時節を待たむと、さてこそかゝる非人の姿に身を窶し、佯狂の身となり人目を眩まし居るなりけり。然るに此時松明振照らして此場に尋ね至れる者あり、見ればグロスターの老伯なるが、餘りの御痛はしさに、わざ〳〵御行衛を尋ね、密かに御身を暖むべき火と進らすべき供御のある處へ御案内申さむとて來りたりと。一行と共に非人姿のエッヂャーをも伴ひ、或る百姓家へと案内せり。グロスターは素より此非人が己が尋ねる我子なりとは思ひも懸けざりしなり。かくてグロスターは又何物をか求むる爲めとて、暫く此處を出行きしが、間もなく還り來りて云ふリア王殺逆の陰謀を企つる者あり、此處は

危險なれば今より直ちにドーバーの港へ落しまゐらせむ。其爲め乘輿を命じたりとて數人の家來をさへ添へ、急ぎ一行を送り出せり。

グロスターが忠義立及び失明

さてグロスターが此場に臨んで、かくリア王に對し忠義立する理由を述べむに、元來彼はリア王の忠臣には相違なきも、ケントの精忠には素より比すべくもあらず、且つ其精神ケントの如く明快果斷ならず、之が爲め初めは惡しと知りつゝもレガン等の爲すがまゝに任せ、王の難儀を外處に見なしたりしが、其折しもコルデリアリア王を王位に復せしめむ爲め、兵を率ゐて早くもドーバーに上陸せりとの內報を得、さては此まゝレガン等の命にのみ從ひ居べきにあらずとて、密かに庶子エドマンドを呼び此赴を告げ、我はこれより王の御行衛を尋ね介抱しまゐらせむ間、若し公爵夫妻グロスターはと問はゞ不快にてと

く就寢せりと答へよと命じ、さて前述の如く松明振立てゝ出行きしなるが、かくと聞きたるエドマンドは內心大に喜び今こそ父の忠義をコーンウヲール公夫妻に賣り己れの立身出世を圖るべきなりと爲し、父が出行くを見るや否や、直ちに公爵の前に至り巨細の情況を告訴せしに、公爵の怒り常ならず、汝グロスター此復讐には汝が一命を取らむといきまきつゝ、即座にエドマンドを以て父の後を相續せしめ新グロスター公と爲せり。さて直ちに人を派しグロスターが行衛を尋ねしめしに、グロスターは首尾克くリア一行を逃れしめたる所を捕へられ、曳かれて公爵夫妻が面前に引据ゑられたり。

公爵夫妻は憫むべき此老人を有合ふ椅子に縛りつけ、公爵自ら脚を上げて彼が一眼を蹈潰せり。之にも飽かで更に殘る一眼を抉らむとせしに、

公爵が家臣の一人見兼ねて之を諫爭し、遂に己れも斬られて即死せしが、其時公爵にも不治の重傷を負はせたり。然れども公爵は少しもひるまず、グロスターが殘れる一眼を抉出して、遂に之を門外に追放せり。これより先エドワードは、公爵夫妻の好意(?)にて、父が慘酷なる處刑を眼前に見むは忍びざる所なるべしとて、ゴネリルを護送してアルバニー公が居城へと赴かしめたれば、彼は此場には居合はせざりしなり。而してゴネリルがエドマンドに對する不義の戀は此時よりぞ始まりける。レガン將た此美少年に對して一方ならぬ戀慕の情を催しけるこそ淺ましけれ。

兩軍決戰、リア、コルデリア生擒せらる

さてもリア王は、グロスターが計らひにて、ケント等に護送せられ、ドーバーへと落ち延びぬ。俄盲目のグロスターは己が門前より追拂はれ、あやめも別かず吟行ふ中、エッヂヤーに邂逅ひて之に案内せられ、同じくドーバーへと赴き、其處なる海岸の斷崖より身を投じて自殺を圖りしが果さず。尙ほ我子を案内として生死の間に彷徨す。但し此案内者が我子なりとは夢にも知らざるなり。かゝる間にコーンウヨール公は先の負傷にて死し、後にはレガン、エドマンドと情を通じ、授くるに兵馬の權を以てし、心進まぬアルバニー公及びゴネリル等と力を合せ、急ぎ兵を徵し軍を整ひ、以て佛の侵入軍を迎ひ討てり。是より先佛軍方にては、佛王はコルデリアと一將とを留めて兵を率ゐしめ、己は事情ありて歸國せしが、未だ兩軍相衝突せざりける中、コルデリアとリアと邂逅して悲慘の對面あり。然れどもリアは狂亂して前後の辨別明かならず、コルデリア深く之を嘆き醫療を盡して介抱する中、いつか戰鬪は開始せられたり。其結果として佛軍は敗北し、リア、コルデリア等エドマンドの手

にて生擒せられ捕虜となれり。勝ち誇りたるエドマンドは、乃ち二人の捕虜を幽閉し、密かに其部下に命じてコルデリアを殺さしめ、以て後日の安全を圖らむとせり。時に戰勝を祝し、併せて後事を談ずる爲めにや、アルバニー公、ゴネリル及びレガン等來り會せしが、其席上アルバニー公はエドマンドに向ひ、予は大逆罪を以て汝を逮捕すべしと云ひ出せり。公は更に辭を勵まして曰く、汝若し此儀に對し異存あらば喇叭を吹いて軍中に求めよ、必ず汝が大逆を證せむ爲めに、單騎汝と渡り合ひ、刃に依て正邪を決せむとするの勇士あらむと。エドマンドもさるもの此場合に逃げ足もならず。さらばとて喇叭を吹いて軍中を尋ぬるに、果して躍り出でたる一勇士あり。エドマンドが大逆の數々を擧げたる上、雙方立上りて刃を闘はせしが、やがてエドマンドを斬り倒せり。エドマンド、是に於て伏しながら大逆の次第を懺悔し、さて汝は何者ぞと姓名を問ふに及びて驚きぬ。是れ則ち微服したる義兄エッヂャーにてありけるなり。

エッヂャーが苦衷

エッヂャーは如何にして今かゝる場合に出て來りしや、手短かに其次第を記述せむに、彼は盲目の父を伴ひ彷徨する中ゴネリルが佞臣オスワルドに邂逅せしに、オスワルドは懸賞のつきたるグロスターが白髪首をせしめむものと、斬つて懸る所を變裝のエッヂャー父に仇なすまれ者ござんなれと、却てオスワルドを斬殺し、さて其懷中を探り見るに、ゴネリルよりエドワードに宛てたる艶書あり、封推切つて讀下せば、夫アルバニー公を殺害し、晴れて夫婦たらむとの陰謀を記したり。こは容易ならざる陰謀なりと思ふにつけても、今更憎きは義弟のエドワードなり、一人の兄を此有樣に零落せしめ、父をさへかゝる悲酸の境遇に

陷れしめ、今又更に不義の密通を肯てし、明君の聞えある、アルバニー公を暗殺せむとは惡みても餘りあり。此上は豫め此赴を公に密告し置くの必要ありとなし、乃ち密かにアルバニー公に彼書面を示し、更にエドワードの罪狀を證せむ爲めには、某何時にても罷り出つべければ、喇叭を吹いて御召あれと告げ置きつ、さてこそ戰爭も一先づ英軍の勝利に歸したる此日を以て、アルバニー公が右の如くには計らひしなりけり。

終結

大惡漢エドマンドは此の如くにして倒れぬ。かゝる間にレガンは先刻より姉ゴネリルの爲めに毒を與へられ頻りに不快を訴へ居しが遂に空しくなりぬ其ゴネリルさへエドマンドが罪狀の發覺につれて身の置處なくて自ら生害に及びぬ。かくと聞きたるエドマンドは、虫の息ながら、さては三人諸共に結婚の塲に登らむとてこれも程なくみまかりぬ。みまかる前コルデリアを殺害すべき旨一人の部下に命じ置きたる次第を白狀せしにエッヂャーは急ぎ二人の捕虜を幽したる塲所に馳せつけしが、時既に遲れぬ。コルデリアは縊られて既に死し、狂亂のリアは其屍骸を懷いて悲嘆に暮れ、怨恨憤慨交も至りしが、遂に憤死の慘を見るに至れり。

さて然らば彼のグロスターは如何にか成りし。彼はエッヂャーが喇叭の召に應じて出づる時、若し誤つてエドマンドが爲めに殺さるゝこともあらば、これが永の訣ならむと思ふより、初めて父に向ひ己が何物なるやを告げ、今迄艱難辛苦の一伍一什、さては今よりかく〳〵の次第にて、決鬪の塲に上る赴を明かせしに、さらてだに弱り果てたるグロスターは感憤の餘りこれも其塲に空しくなれりしなりけり。

是に於て、今は生殘れる者僅に、アルバニー公、ケント伯及びエッヂャーの三人あるのみ、此三人泣の涙にて此等の死者を葬り、英國の王位には、アルバニー公が遂に上せられむとして此悲劇は終りぬ。

(五) 重なる人物の性格

リア王

沙翁が創造せる人物中の難物の一なり。先づ彼が此劇に現れたる時は、既に八十才の高齢にして、其壯年時代は如何なりけむ、單にゴネリル、レガンが白中に短慮一徹氣の變り易き方なりし由を云へるあるのみ。其治世は如何なりけむ知る由もなし。而して彼は舞臺に上り早々不可解の行爲を爲せり。即ち三人の娘に領國を分配せむとする其方法として、父に對する愛情の深淺を口頭を以て表現せしめむとせし如

き、眞面目なるか洒落(しゃれ)なるか、隨分不思議なる擧動といふの外なし。眞面目にしては餘りに馬鹿々々しく、洒落にしては其結果が餘りに殺風景なり。これに就きては、古來批評家の間に種々の議論のある事なり。或は此時既に半ば發狂し居りしならんといふものあれど、沙翁は初めより狂者として取扱ひしとも思はれず。さればとて常識全き人間とも思はれず、兎も角知力に何等か人並外れたる點ありしには相違なし。思ふに積る年齢の結果と、性來の心の傾向とが、境遇と相合して此の如き不思議の性格を作りしといふを以て穩當の所見と爲すべし。されど彼は其知力の人並外れたる如く、又老人としては人並外れたる勇氣と變り易きされど強き意志とを有せり。其最愛のコルデリアを勘當して、ケントが一命にかけての諫諍をも耳に入れざる如き、又グロスター邸を脱出して、暗夜暴風雨の中に突

進するが如き、何れか大なる勇氣と強き意志とを表明せざりける。之を單に老の一徹、若くは老人の冷水と見るは餘りに淺薄に過ぎたらずや。第三幕、暴風雨の中を暴れ廻りてよりは、全然狂者となり了んぬ。されど其狂暴の中、無意識に過去の記憶を取留もなき譫語の中にほのめかして、二人の娘が大逆を讀者の胸に印象し、現在の彼が身の上の如何に哀れなるかを思はしむる所、譫語ならでは却つてかゝる感動を惹起されざるべし。ドーバー附近の地にコルデリアと會せる時の如き、狂亂の中一條の正氣の混ずるありて、あはれを引くこと多し。而かも吾人をして坐ろに英雄の末路を思はしむるは、彼の大なる勇氣と意志との、自然の嵐人情の嵐に、遂に吹折られたるを認むればならむか。

所詮狂者は不可解なり、リア王將た此理に漏るゝことなし。但し彼は所謂發狂以前より既に不可解の人物なりき、矛盾多き性格なりき、愚なるが如く狂なるが如く不具なるが如き性格なりき。然るにも拘らず、全躰に於て吾人はリアの大なる人物深刻なる性格なるを認めざる能はず。常人の手にしてかゝる矛盾あるかゝる不可解の人物を描きたらば、思ふに何等の性格をも爲さぬならむ、然れども沙翁がリアは慥かに一種の性格なり、實に大なる性格なり。是に於てか普通人の作ならば、只だ矛盾なり不可解なりとして棄てらるべきを、沙翁がリアは古來評家が其刀の利鈍を試すべき解剖臺として用ゐらるゝなり。

コルデリア　凄く恐ろしき此物語の中に、心身の苦痛煩悶を描きたる書面のリア中に、神女の如き優にやさしき一女性の現れ出づるをコルデリアとす。されど吾人は、いかにも天使の雲間に現れたるを只一目仰ぎ見た

るが如く、慥かに天使來れりとは認るものから、其容貌風采の詳細を問はるれば、忽ち辭窮して答ふること能はざるべきが如く、コルデリアの性格に至つても、只だ其暖かさを感ずるのみにて巨細の性狀に就いては、之を理解すること決して爾かく容易にあらず。譬へば黑雲の後に一點の星光閃めくよと見る間に、忽ち暗中に沒し去るが如く、何人も此性格の美にして優なるを感ずべきも其印象たる深大なれども精確ならず。試みに批評家若くは一般讀者に向ひて、コルデリアの如何なる人物なるやを問へ。彼等は萬口一齊に、其美はしく描かれたるを答ふるならむ。然れども巨細の點に至つては異說紛々たること、沙翁が性格中此右に出づる者尠なし、是即ち此性格は、極めて簡潔に描寫せられ、且つ其舞臺の上に留まること甚だ短ければ、觀察は只管其容貌の觀察にのみ忙はしく、其內部の心的狀態

に至つては觀察の餘祐を留めざる所以の證なり。

右は沙翁劇女性の研究者として有名なるジェームソン夫人がコルデリアを評せし言の一節なるが、げに此劇を一讀したる時、吾人がコルデリアに對する所感は誠に此の如くならむ。夫人は更に所謂「巨細の點」に就き說明すらく、蓋しコルデリアが大體の性格は、人間行爲の二大原理、即ち眞實を愛するの情及び義務の觀念を基礎として成立するが如し。但し此等のものも之を抽象的に露骨に表現せば、寧ろ冷酷なる感を與ふるなるべし。故に沙翁は之を包むに女性特有の貴重なる美質、即ち銳敏なる感情と楚々として人を動かす底の愛情とを以てしたり云々。誠に彼女が人となりは其眞實を愛し虛僞を憎むと同時に、義務てふ觀念の著しく發達せるを見む。然れども是れ其內面に存在する精髓にして、外部は常に溫乎たる

容顔長なへの春風を湛へ、萬事に優美なる感想を寄するらしきやさしの婦人なり。ジエームソン夫人は、更に彼女が他の優美なる性質を列擧せる上、彼女をして彼女たらしむる性行上の特質を擧げて曰く、生來の寡言、内氣の性分、沈靜なる擧止風采、及び凡ての感想凡ての言語凡ての擧動に一貫せる謙讓の風、此等は常に彼女が外部の表情に依つて彼女が内部の感情を悉く吐露せしめざらしめたり云々と。而して夫人は最後に一括して曰く、若しコルデリアが地上の何者にか似通へりとせば、そは伊太利の古畫に於ける聖母（マドンナ）の圖なるべし。神々しき聖母の肖像が、人間界と全く相絶たざる所以は、其子たる基德に對する母の愛若くは母の悲みにあり。同樣に若しコルデリアにして父に對する孝心、被りたる災害、苦痛及び涙等を以て此地上の人情と相關することなかりせば、彼女は人間とも思はれぬ程神々しく、取りも直さず一個の天女となり了りしならむと。

ゴネリル及びレガン　揃へも揃へし毒婦ながら、其毒の質と度とに多少の相違あり。ゴネリルはレガンよりも所謂胴性骨太く、沈着にして、一旦決したる事は決して躊さぬ底の意志あり。レガンは姉に比すれば何處となく規摸小なるが加し、尤もグロスターの眼を抉る一段に徹すべきが如く、殘酷を好むが如き性は寧ろ姉に優れる所あらむ。然れどもレガンは父に對しての行爲を内心道がに疚しく感ずるの時あるが如く、リアがゴネリルへの呪咀の語を聞いて戰慄し、又グロスター邸の門前より父を荒野の闇中に突進せしめたる後の如き、幾分逡巡の態あるを表せり。而してゴネリルに至つては少しも其事なし。彼等姉妹がエドマンドに對する戀慕に至つては、寧ろ凄き恐ろしき感を與ふ。ダウデン氏が之を評して、彼等

の戀は彼等の惡よりも物凄しといへる、誠に適評といふの外なし。其最期に至つても、レガンは他殺にて死しゴチリルは自殺に依りしが如き、何處迄も二人の特性を發揮せりといふべし。

エドマンド　沙翁が描出したる惡漢中「オセロ」のイアゴーに次ぎ錚々たるものなり。然れども彼はイアゴーの如く、別段是ぞといふ目的もなきに惡事を働くこと、即ち惡の爲めに惡を爲すことなし。是れ其惡黨とし、てはイアゴーよりも小にして、彼程には恐ろしからざる所以なり、要するにエドマンドは何處迄も自己の立身出世を目的とし、自己の利益を目安とし、其手段として惡事を行ふものなり。故に若し彼が地位にして彼が如く逆境に立たず、グロスターが嫡子にして、おとなしく待つ中には何時かグロスター伯爵の爵位財産は其頭上に落來るものと定まり居たらむには、彼は何等の惡事をも爲さゞりしやも知れざりしなり。之を如何なる境遇に置くも必ず惡を爲すに相違なきイアゴーとは大なる相違なり。只だ惡事を決行するの手腕に至つては、彼も是も殆んど同等の程度に在りと見るを得べきか。

エッヂヤー　東洋流の孝子なり、之を二十四孝中に加ふるも、少しも其調子外れなるを覺えず。如何なる虐遇を受け、如何なる逆境に立つも、天を恨みず人を恨みず、まして父を恨めしと思ふことなく、靜かに天の時を待つといへる心懸、寧ろ意氣地なき迄なる、エドマンドとは正反對なり。

ケント及びグロスター　前者は是も東洋流否な寧ろ日本流の大忠臣にして、剛直誠忠而かも智仁勇を兼ね備ふるの豪傑なり。君を諫めては一命を惜まず、主君の難儀を聞いては、身を賤奴に落してまでも奉公の誠を

抽んづる身の覺悟、見るも心のすが〳〵しきを覺ゆ。グロスターに至つては、ケントに及ばざること甚だ遠し、彼は現在の我子を親るの明なく、主君リア王が闇中に突進するを見ても、コーンウヲール公等に對し、飽く迄之を爭ふの勇なく、コルデリア上陸の報を得るに至つて、初めて臍の緒を固むるに至れる如き、動もすれば首鼠兩端を抱けるにあらずやと思はるゝが如き欠點あり。盲目の身となりて吟行するに及びても、生死の境に立ち迷ふなど所詮此人物の大ならざるを見む。然れども兎にも角にも一命を賭してリア王をドーバーに落して以來の彼が忠義は賞讃の價あり。又其境遇のリアに似通ひたる哀れ深し。さるにも拘らず、かく相似たる境遇に流浪する二人の老人を比較すれば、狂せるリアの狂せざるグロスターよりも遙かに偉大なる樣に覺えらるゝ是非もなし。

(六) 此劇に對する著名なる評家の言

古來第一流の評家にして、此劇を以て沙翁が最大傑作なりと考ふる者一人なからず。ハズリットは之を「沙翁劇中の白眉」と稱し、シェレーは「世界中に存在する劇文學の最も完全なる標本なり」と斷じ、テン、ブリンクは「大躰より云へば沙翁が作中の最大作品なり」と讃し、現存の沙翁學者中にては、ダウデン氏は「チユートン人種の天才が作爲せる詩中の最大唯一の成功」なりと呼び、クレーグ氏は「一篇の劇としては『オセロ』を以て此上に置かむと欲す、然れども此篇中の或部分に於ては、沙翁は自己を超越して幽玄の境地に達し、あらゆる文藝の最高巔に觸れたり、從つて沙翁は此篇に於て其最大技能を發揮せり」と論ぜり。

前記のハズリットは、又此劇を評して、此劇其者若くは此劇が人心に與ふる感動を解釋せむとするは寧ろ借上の沙汰なりと迄尊崇せり。又チャールス、ラムは此劇は之を舞臺に演ずると全く不能なる由を說いて曰く、「舞臺に演ぜらるゝリアを見るは、即ち雨の夜に門外に突放たれ杖に縋りて舞臺の上を蹌踉き歩く一老翁を見るは、只だ痛ましく、見るも哀れなりとの感動の外何物をも與へず。吾人は只だ彼に屋根を與へて救助し遣りたしとの念を起すに過ぎず。而して是れ予が此劇の演ぜらるゝを見る毎に起す所感の凡てなり。所詮沙翁がリアは之を舞臺に演ずること能はざるなり。舞臺の大道具は、到底實際の暴風雨を摸する能はざるが如く、如何なる俳優もリアを摸すること能はざるなり。之に比すればミルトンのサタン若くはミケランジエロが異形の怪物を演ずる方がまだしも容易の

業ならむ。リアの大なるは其外形にあらずして其內部にあり、彼が憤怒の爆發は其恐ろしきこと火山の如く、樣々の實を藏する心てふ大海を覆して、其深き底を瞥見せしも、即ち眼前にさらけ出さるゝものは彼が心なり。此場合彼が血肉の袋たる體軀の如きは一顧の價値もなく、彼自身すら之を忘却し居れるなり。然るに舞臺に演ずる時は、吾人は其肉體上の哀れなる狀態を見るに過ぎず、如何なる科(しな)か之に相應しきものあらむ、如何なる聲も如何なる眼付も之とは相關せざるなり云々」と。

彼國の學者が如何に此劇を珍重なるかは右にて其一斑を推するを得むか。

(七) 該譯稿に就ての注意

譯者は現今行はるゝ普通の正本（テキスト）（即ち學校用の爲め特に或部分を抹殺したるものにあらざる）に含まるゝ凡ての白を譯出する覺悟なれども、中には甚だしく尾陋なる文句、若くは語呂或は同文異義を基とせる滑稽の語にして、之を除くも何等の風致を害せざるものゝ如きは、之を强ひて拙なき日本語に飜すの愚なるを思ふが故に、時に之を省略せることあり、乞ふ讀者之を諒せられむことを、然れども此の如きは素より之を九牛の一毛といふも妨なき程の少數なり。

譯者識

リア王の悲劇

登場人物

リア　ブリテイン國王
佛蘭西王
ブルガンディ公
コーンウォール公　レガンの配
アルバニー公　ゴネリルの配
ケント伯
グロスター伯
エッヂヤー　グロスター伯嫡子
エドマンド　同庶子
クラン　廷臣
オスワルド　ゴネリルが執事
老　翁　グロスター伯領内の百姓
醫官
道化坊主
隊長　エドマンドが部下
紳士　コルデリアの侍從
軍令使
コーンウォール公の從僕大勢
ゴネリル　リア王女
レガン　同
コルデリア　同
此外リア麾從の武官、役人、使者、兵士及び侍從等大勢

場所
ブリテイン國

リア王の悲劇

第一幕

第一場　ブリテイン國王宮內大廣間

ケント伯、グロスター伯及びエドマンド（グロスター伯が庶子）登場

ケント伯　國王殿下には、コーンウォール公（第二王女リガンの配）を、御寵愛あらせらるゝやうに、御見受申しましたが、

グロスター伯　いかにも從來は、其樣に御見受け申しました。然るに此度、御領國御配分の御模樣にては、何れの公爵を、取分御寵愛あるとも申されませぬ。誠に御平等なる御取捌き、どう詮義致しても、御雙方の御配分に、優劣は附けられませぬ。

ケン　これは御令息ては御座らぬか。

グロ　いかにも、某が引受け養育致せし者てムれど、我が子と申すもお耻かしさ。餘り赤面致したので、今ては却て面の皮が厚うなりました位。——此外にも一年年長な、嫡當の子息がムりますが、それとても愛しいとは思ひませぬ。此奴は少々厚顏ましく、呼びもせぬに娑婆へ出た不屆者。只だ母親がいとしらしい者てムつた故、遂我子とも認めます る次第てムる。（エドマンドに向ひ）こりや、エドマンド、其方は此殿を御見知り申すか。

エドマンド　否御見知り申しませぬ。

グロ　ケントの伯爵て入らせらるゝ。拙者が兼々御厚情に預る御方、以後は能く心得居よ。

エドマンド　何卒此後とも、御目懸けられまして下さりますやう。

ケント　イヤ某も心易く、親密に交りたい願ひ。

エドマンド　不肖ながら御厚志を辱かしめぬ樣、心懸くるてムりませう。

グロ　實は只今迄九年間、外國へ遣し置きましたが、又ぞろ出懸けさせる心算にムります。——ヤ陛下の出御てムる。

（と合圖の喇叭にて、王冠を捧げたる侍者一人、續いてリア王、アルバニー、コーンウヲールの兩公、次にゴチリル、レガン、コルデリアの三王女、及び侍者大勢登場）

リア王　グロスター卿には、佛蘭王、ブルガンディ公、御二方の御側へ伺候し、御相手を致されい。

グロ　畏りましてムりまする。

（とグロスター及びエドマンド退場）

リア　さて此間に一同へ、申聞ける一事がある。それなる地圖を此方へ遣せ。見られよ、予は王國を此通り三分致せしぞ。既や老躰の政治に携はり、心勞致すも大義なれば、齡若き者に萬事を讓り、身輕になつて彼世の旅の準備を致さむ心構ひ。いかに愛婿コーンウォール、同じくアルバニイ能く聽かれよ。後日の悶着を防がむ爲め、三人の王女への、遺產分配を、只今此席にて披露致さむ。まつたフランス王、ブルガンディ公の兩人には、乙姫コルデリアを戀望にて、久しく宮中に滯在致されしが、今日愈よ此席にて、何分の返答に及ぶべし。さて三人の王女達――今日以後、此父は王位を去り、領内の政治、國事の懸念を悉く拋たむ覺悟なるが、さてそれに就き汝等三人の中、此父を愛すること尤も深きは誰なるぞ、同じ親子の間なれど、孝心優れし者にこそ、一の賞與は許す

けれ。先づは姉姫ゴチリルより、心中を語つて見やれ。

ゴチリル　父君を思ひまつる妾の心は、詞には盡されませぬ。廣い自由な此世界にも、物を見る兩眼にも、優して大切な父上樣。何のやうに貴い物でも、例へば健やかに美しう、萬人の尊敬受け、此世樂しい一身なりとも、父君には代へられませぬ。恐らくこれ程に、父を思ふ子はあるまい、これ程に子に思はれる父も厶りますまい。ほんに此愛情の深さには、詞も聲も薄れ果てう、父上樣を思ひまつる心のたけは、先づ此樣で厶りまする。

コルデリア（旁白）此コルデリアは、ハテ、何と申上げう、心て思ひまつるばかり、口に出してはえ云ふまい。

リア　此線（地圖中に劃したる線）から此線迄、茂林沃野續きあひ、豊かなる河もあり、

廣やかな牧場もある、此狹からぬ領土をば、悉皆其方に讓るぞや。アルバニイと其方との、中に生るゝ子々孫々に、永く傳へて有つが宜い。—

—さて次に仲姫は、彼のコーンウォールが妃なる、いとしのレガンは何とてあるぞ、云うて見やれ。

レガ　妾とても姉君と、同じ枝葉に連なる身。不束ながら姉君に、少しも劣りは致さぬ存念。眞實姉君の御詞は、妾が父上を思ひ奉る、其心中を其儘に、申したやうでムりますが、少々物足らぬ處もムります、と申すは此妾は、身に泌み魂に徹つて、嬉しいと思ふ事、樂しいと思ふ事でも、目の敵と推退けて、たゞ〳〵父上にお仕へ申す其事のみを、何寄の樂みと致す事でムります。

コル　（旁白）何と申上げう詞もない、コルデリアは哀なもの、さはさりながら

舌頭より、深いは妾が心の中。

リア　おゝ其方にも子々孫々、美はしい此王國の、三分一を與ふるぞよ。廣さといへ、價値といへ、豐かさといへ、ゴ子リルが配分に劣りは致さぬ。—

—さて此上は乙の姫、末子とはいへ、親は末とも見ぬ娘。佛蘭西の葡萄（佛王なる云ふ佛國は葡萄に富む故爾云ふ）と、ブルガンデイの牛乳（ブルガンデイ公なる云ふ牛乳は同國の名產なる故爾云ふ）とが、各所望と申さるゝ。其方は姉達の配分より、一際豐かな殘り三分一を受けう爲めに、何と云やるぞ、語つて見やれ。

コル　申上げう詞もムりませぬ。

リア　詞もない。

コル　ムりませぬ。

リア　無いものからは何も出ぬぞや、云うて見やれ。

コル　殘念ながら心中を、口に出すことは出來ませねど、妾はたゞ父君を、子たる道に外れぬやう、思ひまつる斗りでムります。格段にどうかうと申すことはムりませぬ。

リア　コレ〳〵何と、コルデリア、少々詞を改めねば、配分を失すてあらうぞ。

コル　生の御恩に愛育の御大恩、其大恩の父君に、盡すべきだけを盡すが妾の義務。さればこそ、父君を愛し進らせ、尊敬し進らせ、仰には背かぬやう從順に致しまする。乍去姉君の仰せのやうに、何事も打棄てゝ、たゞ父君のみを思ひまつるが定ならば、姉君には何故夫の君を御有ちなされます。若し此身も、やがて人妻になるならば、此身の愛情心遣ひ、身に負ふ義務の半分は、契る殿御に捧げねばならぬ筈。姉君達の仰せ

のやうに、何事も打棄てゝ、父君ばかりを愛しながら、良人を有つことは、此妾には出來ぬ事でムります。

リア　それは其方の本心よりか。

コル　本心よりでムります。

リア　若い身そらで不屆な。

コル　若い身そらではムりますが、父上、眞實を僞るは好まぬ此身。

リア　宜いわ、然らば其眞實を父が唯一の遺產と致せ。大日輪の光明も、地獄の秘密、夜の闇、人間の生死を司る、天上の星も照覽あれ。予は今より其方への、親たる義務を拋ち、血緣のよしみを斷ちたるぞ。未來永刼父でもない、子でもない。今より後予が胸には、音に聞くスキジアの蠻族も、口腹の慾を充たさむ爲めに、我兒を膳に上す食人鬼も、昔し予が女

なりし、其方も差違はないぞや。

ケント　御待ち下され殿下――

リア　默れケント、逆鱗には觸れぬものぢや。予は彼女奴を秘藏に致し、彼奴が優しい介抱に、晩年を送らむ覺悟なりしぞ、――往け〳〵目通りを下れ〳〵（此の一句はコルに向ひての白）――然るを今彼女奴をば、予が胸中より勘當したれば、此上の安心立命は、だゞ墓場にこそ求むべけれ――佛蘭王を此方へ請ぜよ。誰ぞ參つたか――ブルガンディ公を御呼び申せ――コーンウォール、アルバニィの兩人には、二人の姫の配分に、更に殘る三分一を分配致せ。彼女奴には、眞實とやらいふ傲慢心を、唯一の聟金に取らして遣はす。さて又汝等兩人へは、共同に國家の政權、其外凡て王位に伴ふ權勢を讓り渡す。其上は予は汝等より扶持を致させて、

一百人の武臣を召抱え、そを引具して、一月毎に替る〳〵、兩人の居城に赴き逗留致さむ。即ち此身は、たゞ國王の位階尊號を留むるのみにて、政權は素より國家の收入、萬般の政道悉く、汝等兩人に依托致す。其證としては、これなる王冠を兩人にて分配致せ。

ケント　御待ち下され殿下、恐れながら上一人として尊敬し奉り、父とし愛し奉り、主とし從ひ奉り、一國擁護の大君として、朝夕の祈禱にも、御名を唱へぬ事もなかりしを――

リア　既や引絞つたる大弓は、其儘には收まらぬ。箭表を退いた〳〵。

ケント　某が胸の中央を、射透される迄も退かれませぬ。殿下にかゝる御狂暴の御擧動ある上は、此ケントに是程の無禮もなくてやは。殿下、是は如何なる思召にてムりまする、人君諂諛に掩はるゝ時、人臣諫諍を恐

るゝと御思召遊ばしますか。君德暗愚に傾かば、臣義直言を憚らぬ例。殿下、何卒只今の御意を御改めなされて、熟と御叡慮の後、餘りに輕々しき御沙汰を御止めなされ。某は一命を賭して奏し上げまする。乙姫君には殿下を愛し奉ること、決して人後に落ちさせは遊ばしませぬ。中盈つれば鳴る音低し、其聲大ならざる者は、心空しき者とは申されませぬ。

リア　默れケント、命が惜くば默り居らう。

ケン　某が一命は、殿下に仇爲す者共を、平らげむ爲めに捧げた命。殿下の御爲め故ならば、失ひしとて口惜しいとも思ひませぬ。

リア　目通りを下れ〳〵。

ケン　イヤ御目障りてはムりませうが、中々御前は下りますまい。御覽直

し下さりませ。

リア　アポロの神も見そなはせ——

ケン　アポロの神も見そなはせ。殿下如何に諸天諸神を證に誓はせ給ふとも、それは無益。

リア　ヤア不屆者、無禮者。

とリア佩劍に手を懸ける

アルバーン　殿下、暫く〳〵。

ケン　いや御勝手に遊ばしませ。醫師を斬つて、謝禮は病氣に御遣はしなさるも御隨意。——只今の御沙汰を御取消し遊ばされずば、某が息の根の續かむ限り、叡慮當を失へる由を、申續くるてムりませう。

リア　卑怯者よつく聽け。汝眞實君を思ふ誠忠あらばよつく聽け。予に一

旦の誓約を破らしめむとし、傲慢無禮の擧動もて、予が計らひに嘴を容るゝ不屈奴。是れ予が位予が天性の忍ぶを得ざる所なり。依つて予が權力を汝に思ひ知らせむ爲め、此處罰を命ずるぞよ。即ち今より五日の猶豫を與ふるにつき、其間に浮世の波風凌ぐ準備を致せ。さて六日目には、その忌まはしき背を、我が王國に向けて退去致せ。十日の後に至り、汝の躰軀若し予が領土内に殘り居らば、即座に汝が命はないぞ。往け、綸言は出てゝ還らぬぞよ。

ケント　左らば殿下、御暇を申上げまする。あゝ殿下かくおはす上は、自由は此土を去り、流浪流轉の世の中と、成り果つるは眼のあたり——（コルに向ひ）正當な御心を正當に仰せられたいとしの姫君を、おゝ神々も擁護あらせ給へ。——（レガニに向ひ）して姉姫達には、彼の立派な御詞を、行爲の上に

て證明させ給はむことを、蔭ながら祈りまする。さて御列座の御方々、ケント奴はかくの次第で、只今御暇を申上げまする。此上は新たなる國へ參り、今迄通りの頑固一徹の擧動を、續けまする所存でムります。さらば。

とケント退場

喇叭の音にてクロスタア再登場、フランス王、ブルガンデイ公從者大勢續いて登場

クロ　申上げます。フランス王、ブルガンデイ公の御入りでムります。

リア　先づブルガンデイ公に御尋ね申す事あり。公にはこれに在すフランス王と、不束なる末姫を御所望に及ばれしが、彼女が身に附く配分は、幾何程御所望あらせらるゝぞ。若し又御所望に叶はずば、全く御手を引かせ給ふか如何でムる。

ブル　至尊殿下、某に於いては、殿下の降し給はるべき、御配分の上を所望は致しませぬ。されぱとて、給はるべきを、御減額も成されますまい。

リア　聽かれよブルガンディ公。是迄は愛しき者にてありし故、此身とても其樣に思ひ居しが、只今姫が相場は下落致した。見られよ其處なる立姿、あの小さげな躰軀の中に、何ぞ取柄があるか。若くは父の勘當受けし外に、身に附く物もない、其裸躰が、御氣に召すとあるならば、御隨意に御引取り下されい。

ブル　何と御返答申上げて宜しいやら、

リア　氣立といへば彼の通り。新たに父の惡しみ受け、身につくものは父の勘氣、諸神を證人に親子の縁を斷たれし女、頼る友もない彼女奴をば、ハテ公には取るか棄つるか如何であるぞ。

ブル　御免下され殿下。其樣な條件では、御返答は申上げ兼ねまする。

リア　然らば御棄てなされい。彼が身につく富とては、只今申せし通りに相違ムらぬ。――（王に向ひ）フランス王にも御聞下され。自ら憎しと思ふ女をば、王妃に勧め申す如き、失當の擧動は、日來の御厚誼に對しても致されず。此上は何卒此樣な、造化自然の人情にも戻るやうな、惡き女子などには御目懸けられず、他所外の淑しい女子を、御求めなさりませい。

フランス　不思議なる事を承り申す。遂今の今迄も、父殿下が掌中の珠、御自慢の種、御老後の慰籌と、御寵愛を專にしたる姫君が、時の間に其御寵愛を失ふとは、こりや一通りならぬ、奇怪な擧動を致されたか、但しは父殿下が口癖に仰せられたる御愛情が、譯もなく俄かにさめ果てたも

のと見ゆる。乍去此姫君に、左樣な擧動のあらうとは、人力の及ばぬ奇蹟にてもあらば知らず、妄りに信ずることは、道理の許さぬ所てムる。

コル　父上樣に、推して御願がムります。――此妾は心にもない事を喋々り立てる、滑かな、すべりの善い、辯才がムりませぬ故、思ふことは口に出さぬ間に、先づ行爲に出す習ひ――其處を御推了なされて、父上樣より、妾が此度御機嫌に逆らひ、御寵愛を失ひましたも、大それた惡事惡業、不貞操い不品行、其外尾陋な過失などの爲めてはなく、無くもがなの才氣足らず、憐みを惹く眸もなく、そのため御寵愛を失ひたれど、よくぞ有たざりし辯舌をも、欠ける故てあることを、御披露なされて下さりませ。

リア　えゝ寧そ其方といふものが、此世に生れて來なむだなら、此樣な不快な、思ひは致すまいに。

フラ　さてはそれだけの理由てムつたか。心の中を云はむとして、云はずに過ごす、其つゝましい天性故、此樣な御不興を蒙りしか。ブルガンディ公には、姫君を如何なされますする。戀を離れた慾德を雜ふるは、眞の戀とは申されぬ。妃に有たせ給ふや如何に、身につく實はあらじとて、姫こそ實におはすものを。

ブル　リア殿下に申上げます。いつぞや御口づから仰せられた、御配分を御遣はし遊ばしませ。さらば早速コルデリア姫は、此某が手を取て、ブルガンディ公爵夫人とかしづきまする。

リア　イヤ配分は遣はされぬ。既に誓迄も立てたる上は、此決心は動かされぬ。

アル　然らば氣の毒ながらコルデリア姫。それ程迄に、父君の御不興を受けられては、某とても御手を取ることは叶ひませぬ。

コル　御心安う思し召せ、身につく實への戀ならば、妾とても公爵夫人には、なりたうも厶りませぬ。

フラ　おゝ美はしのコルデリア姫、財寶を失ひていや貴く、棄てられて却て光を增し、憎まるゝ程愛らしい、其淑德を持參として、御身を某所望致す。棄てたる者を拾上ぐるに、申分はよもあるまい。おゝ方々が冷やかな待遇故、我が戀のかく燃え立つとは、思へば不思議。殿下、着のみ着のまゝて御棄てなされた姫君は、某が拾ひ上げて妃と致し、美はしき全フランス國の女王とかしづきまする。水臭いブルガンディ國の公爵共が、如何なる寶を以て、代へやうなどと申されても、此尊き姫は、いかないかな渡されぬ。此上はコルデリア、さもしい心の方々に御暇を告げ、此處を去つて樂しき國へ、いざ諸共に差して參らう。

リア　フランス王には姫が手を取らるゝとな、御隨意に王妃となさるが宜い。かやうな女は女でない、顏さへ重ねて見たうもない。訣別の詞も祝福も、與へは致さぬ、此儘去れ。——いざ參らむ、ブルガンディ公。

と喇叭の音、フランス王、ゴチリル、レガン、コルデリアの外一同退場

フラ　いざ姉君達に御暇を。

コル　申し、父上樣が御鍾愛の姉君達。此コルデリアは涙ながら、御暇を申上げます。御兩方の御心は存じた妾、乍去妹の分として、彼是と今申上ぐるには忍びませぬ。只だ父君を何卒御大切に遊ばしませ。仰せられ

コルデリア「左様ならば御息災で」
フランス「左様ならば參らうコルデリア。」

た通りの孝心深き御心に、御老體を御任せ申します。とはいひながら、此のやうな、御不興を蒙らすはどのやうなよい處があらうとも父君を棄てゝ參らうとは思ひませぬに。――さらば御機嫌よう、御兩方樣。

レガ　要らざる指圖立には及ばぬわいの。

ゴネ　ふとした拍子で、其許を取つたフランス王、倦かれぬやうにしたがよいほんに其許は柔順からぬ性質、報いは覿面、爭はれぬものじやなあ。

コル　深いたくみの底に何が潜むか、時經つ中には顯はれませう。過失を包む者は耻辱に笑はれる時が來ると申します。左樣ならば御息災で。

フラン　さらば參らうコルデリア。

とフランス、コルデリア退場

ゴ子　コレ妹、お互の身に關はる事で、話したい事が澤山ある。父君には大方今夜、直ぐに御出立ある事であらう喃。

いガ　大方左樣でムりませう。そして姉君の御許へ――妾方へは翌くる月。

ゴ子　見やる通り、御老年の御移り氣。よう見屆けた事であらう。日頃は彼のコルデリアを、此上なう御寵愛遊ばしたに、譯もない事に、今日は彼の通りの御勘當。餘りといへばおろかしい。

レガ　御年のせいでムりませう。とは申すものゝ從來とても、いつも一徹な御性質。

ゴ子　分別盛りの、御壯年の折とても、御短慮なりし父上樣。まして御老年

の今は、昔ながらの御一徹に、かて〻加へて御年故の御我儘どのやうな難題を仰せらるゝか、思ひやらるゝ事てはある。

レガ　今日のケント御追放にも、劣らぬ御氣まぐれな御沙汰などは、度々出る事でムりませう。

ゴネ　まだフランス王と、御訣別の御挨拶もあることなれば、どうぞ打合せをして置きたい。彼のやうな御氣性の父上に、いつまても權力を御有たせ申して置くならば、御領土分配故、却てよい迷惑を致すは吾々。

レガ　熟と御相談申しませう。

ゴネ　此餘熱の冷めぬ中、何うか致して置かずばなるまい。

と二人退場

第二場　グロスター伯爵が居城内の一室

エドマンド（グロスターの庶子）書軸を携へて登場

エド　拙者が守護神は「自然」の女神。自然の則に從ふこそ拙者の義務。何ぞや浮世の習慣に從つて、一年餘り、遲れて生れた爲めばかりに、おめおめ兄貴に家督を遣らうや。何ぢや庶子ぢや、庶子が何卑しい。此躰ぢやとて其通り、何處に何相違のあらう。けしからぬ世間の習慣。庶子ぢや、妾腹ぢや、卑しいさもしいといふ燒印を、我等が額に捺しつくる。鼻につゐて、氣乘のせぬ本妻腹より、脂の乘つた妾腹から、却て善い子が生れるものぢや。ヤイ御曹司エッヂャア殿（異腹の兄）卿が領地は此エドマンドが申受くる。父上の御寵愛に於ては、妾腹の某も本腹の卿も變り

はない。イヤ此の本腹といふ詞の耳障り好さ。とはいふものゝ本腹殿、此書面が圖に當り、計略案の如く參るが最後、卑しいエドマンドは、本腹殿の一段上手へ座らねばならぬ。いや甘いぞ〳〵、此上は神々も、庶子黨一味に、一臂の御力を貸して下され。

（グロスタア登場）

グロ　ケントは彼の樣な御追放、フランス王は喧嘩別れ、そして殿下は、今夜出發。政權は御引渡し、定額の養老金て御滿足。是が即座の御取極めとは――やあエドマンド、何ぞ聞及うだ事はないか。

エド　是は〳〵父上樣、何もムりませぬ。

（と急がはしげに書翰を收むる）

グロ　何故其樣に遽たゞしく、其書面を取かくすぞ。

エド　イヤ何、聞及うだ御話はムりませぬ。

エド　讀んて居つたは何書付ぢや。

エド　イヤ、何てもムりませぬ。

グロ　何てもない、然らば何故其樣に、遽たゞしく懷中へは推込みしぞ。何てもない事ならば、隱すには當らぬ事どれ見せい、ハテ何てもない事てあれば、眼鏡にも及ぶまい。

エド　何卒御免なされて下さりませ。是は兄上よりの御書面て、まだ一通り拜見致しませぬが、既に披見致した所ては、父上の御覽に入れるは、少々憚りに存じまする。

グロ　其書面を出せと申すに。

エド　差上げねば御意に忤ふ、差上げても御意に忤ふ――此書中の趣は

どうやら容易ならぬ——

グロ　どれ見せい〳〵。

エド　大方兄上には、某が心中を、試して見やうとての此御手紙でムりませう。それてこそ御身の明りも立ちまする。

グロ　（書面を取て讀む）かく老人を尊崇致す習風は、吾等一生の花の時代を此世淋しく過ごさしめ候上、家督相續に及び候時は、吾等は既に老衰致し、財産も樂むに由なく候はむ、吾等は既に老人政治の壓抑に、身を縛らるゝやうの痛苦を覺え候。如何に老人なりとて、かゝる虐政を行ふ權能はなかるべく候を、畢竟默從して制する者なき故の事と存候。此義に就きては尚ほ申したき事有之、御來遊を待ち候。父上永眠の上は、遺産の半ばは永久に御許が有たるべく、御許は永久に

此兄が愛弟たるべく候はむ以上。　エッチャー

フム容易ならぬ陰謀ぢや——永眠の上は遺産を半分——えゝあの

エッチャーが、彼奴何の手で此樣なことを書き居つた、どの胸どこの腹で此樣なことをたくらみ居つた。して此書面は何時落手致した。誰が持參致した。

エド　誰も持參致したのではムりませぬ。これには妙計が盡してムります。某が居室の窓から投げ込んてムりました。

グロ　其手蹟は兄貴てあらうな。

エド　サア、これが善い事なら、兄上の手蹟てムると、誓を立ててもも申上げる處てムりますが、事柄が事柄故、某は左樣てはないと信じたうムります。

ケロ　いや彼奴の手蹟ぢや。

エド　如何にも兄上の手蹟てムりまする。乍去書中の趣は、御心にもない事てムりませう。

ケロ　此事に就きて是迄に、其方の氣を引いて見しことはなかりしか。

エド　其樣な事はムりませなんだ。たゞ兄上の御詞に、子は既に成人し、父は老衰致せる時は、父は子に萬事を任せ、子は父の財產を處理致すが當然ぢやと、口癖に仰せられたを承りました。

ケロ　おゝ不屆奴、不屆奴。書中の趣が正しくそれ。忌はしき奴、人情を缺いた、惡むべき畜生同然の奴。いや畜生にも劣つた奴。早々探し出して縛つて來い。憎みても餘りある奴ぢや、何處に居る。

エド　某はよう存じませぬが、父上御自身にて、兄上を御糺明遊ばされ、如何なる御心といふ、確かな證據の擧がる迄は、先づ〳〵御憤りを御控へなされませ。さすれば正當の筋道を御蹈みなさると申すもの。乍去兄上の御志を御糺しも遊ばさず、御無躰な御處分などをなされうなら、それこそ父上の御名譽に、大きな傷をつけ、兄君御孝行の精神をも、散々に損ねることてムりませう。某は一命を賭けても、兄君がかやうな御書面を御遣しなされたは、弟が父上への孝心を試めす爲めて、深いたくみのないことは、屹度御請合ひ申しませう。

ケロ　其方の考は確と左樣か。

エド　御異存もなくば父上には、某が兄君と、此儀に就き御面談致すを、そつと御立聞遊ばしませ。さて何れとも御耳に殘る證據を取て、それて樣子を御つき留め遊ばしませ。明日とも云はず今夜直ちに、そのやう

に取斗らひませう。

グロ　いかに彼奴ぢやとて、其樣な惡魔とも思はれぬが。

エド　そして確かに、左樣ではムりませぬ。

グロ　此樣に心から底から、愛して居る父に向つて、えゝ不屆な、エドマンド、早う彼奴を探し出して、そろ〳〵持懸けて談話を釣り出せ、兎も角も其方の知慧で、よいやうに斗らへよ。縱令何を差出しても、此疑は解かにやあ置かぬ。

エド　早速御目に懸り、樣子次第で如何やうとも斗らひませう。そして御報告せ申しませう。

グロ　此程の日食月食、何でも吉事の兆ではない。此はかう彼はあゝと、天文學は理屈をいふが、此樣な事があると、訖度地上に變事がある。戀は

冷め、友垣は崩れ、兄弟は鬩ぎ合ふ、市では一揆田舍で騷動、御所の中では謀叛人、父子の羈も切れ果てるやうな事がある。拙者が家の惡黨めも、前兆に從れて現れたのぢや。これは父へ子の謀叛、又國王殿下には、愛しい姫を憎い御處分、これは我子へ父の變心。是迄はよい事のみが續いた我等。これからは、謀叛ぢや、叛逆ぢや、不義ぢや、非道ぢや、すつたもんだの悶着に、追はれて墓場へ逃げ込む事か――エドマンド、訖度兄貴を尋ね出せよ。其方の惡いやうには致さぬ、氣をつけて斗らへよ。――思へば忠義一圖なケント殿が御追放、罪は何ぢや直言故、げに不思議な事ではある。

とグロ退場

エド　ハヽア、世の中にこれ程愚かしい事はない、不運な目に遇ふ時は、自

ら招いた事は思ひもせず、日月星辰へ禍の罪を塗りつけて、據なく惡人になり、天命で阿呆になり、盜賊も謀叛人も、皆な日月の指圖のまゝ、酒を飲むも、虛言を吐くも、姦通を致すも、皆な運星の廻り加減、何でも惡事といふ惡事を致すは、悉く神意に依るやうに心得居る。いや色好みの男が、好色心は星の故とは好い遁辭。定めて拙者が父母は、北斗七星の下でちゝくりあつて、大熊星の下で拙者が生れ、それ故拙者は此樣に、凶猛多情といふのであらう。いや阿呆らしい、たとひ拙者が生れる時、一番貞淑な星共が、天から覗いて居たればとて、此性質に變りがあらうか。彼のエッヂャーは——

エッヂャー登場

いや古風な茶番の大破綻のやうに、丁度五分もすかぬ所へ遣つて來た、（古風の嬉劇に於ては事件の發展漸う其極に達し、聽衆今や〳〵と待つ所へ、丁度大破綻の面影現るゝやうに仕組まるゝとぞ）拙者の役は悲しさうな面わくをして、物狂ひの乞食といふ見得で溜息吐息をして居るのぢや。——おゝ日食月食は騷動の兆であつたか。

エッヂャー　これエトマンド殿、何を眞面目に考へて居るのぢや。

エド　いや兄上、此間或書物で讀みました、前兆の事を考へて居りまする

エッヂャー　其樣な事で心を碎いて居るか。

エド　其書物の文句から老へれば、何でも凶事が續きまする、親子の不和、昔馴染の喧嘩いさかひ、凶年飢饉、國内の分離、天子や公卿を恐嚇したり呪詛ふたり、理由もないに疑ぐり合ひ、友達を追退け合ひ、一騷騷動離緣騷ぎ、其外何やかやの大混雜。

エッヂ　ハテ其方は、何時から易者へ弟子入致した。

エド　いやそれはさうと兄上には、何時父上にお遇ひなされました。

エッヂ　昨夜御目に懸つたまゝ。

エド　御對談をなされましたか。

エッヂ　丁度二時程。

エッヂ　御心よく御別れなされましたか。御詞の御樣子に、御立腹の御樣子を御認めはなされませぬか。

エッヂ　いや少しも。

エド　何ぞ御不興の種を、御蒔きなされた記憶は厶りませぬか。そして何卒某の御願故、御不興の冷める迄、暫らく御前へ御出でなされますな。それは〳〵きつい御立腹、兄上の御躰軀に若しもの事があつてはなりませぬ。

エッヂ　誰ぞ讒言でも致したと見える。

エド　某も左樣ではないかと思ひまする。何卒御不興がさめる迄、御謹慎なされませ。そして某が部屋に暫らく御在でなされませ。さすれば折を見て、御案内申し、父上の御詞を御聞かせ申しませう。さあ御出でなされ、これは部屋の鍵で厶ります。若し外出をなさる時は、一刀を帶して御出でなされ。

エッヂ　一刀を帶して。

エド　兄上、惡いやうには申しませぬ。帶刀で御出懸けなされませ。父上には何の樣なことを遊ばさうも知れませぬ、某は虛言を申しませぬ、現在見聞致した事を、申上ぐるので厶ります、乍去おゝ其恐ろしさ、詞に

出すは實際の萬分一てムります。何卒早く彼方へ。

エッチ　然らば、直ぐに委しい仔細を聞かせて呉りやるか。

エド　某が宜い樣に計らひます。

と エッヂャー 退場

爺はうつそり兄者は優長、極々善人にまします故、人を疑ふなどは致されぬ、其の馬鹿正直が、即ち計略の乘りの善い處。先づ前途も見えて來た。生れが卑しくて取れぬなら、知慧で田地は取て見せる。此某が狙ひをつけてたくらむ事に、何仕損じがあるものか。

と 退場

第三場　アルバニイ公が殿中の一室

ゴチリル、及びゴチリルが執事オスワルドと登場

ゴチ　父上には其許が、御召使の道化坊主を叱つたとやらて、御打擲なされしとや。

オス　左樣にムります。

ゴチ　夜晝となく父上には、妾を御苛り遊ばされ、それからそれへと因業な御舉動、殿中を騷がすばかり、最早勘忍ならぬわいな。御附の武官とても、段々醉狂が高じて來る、剩さへ父上の、たわいもない事に御叱責、狩獵から御歸りなされたなら、妾は御前へは出まい程に、不快ぢやと申上げや。其許とても、從來の追從は中止にして、大概にしたがよい。御咎めがあつたなら、罪は妾が着やうわいな。

オス　いや殿下(アリ)の御還御てムります、御獵笛の音が聞えます。

ゴネ　其許達の適宜にて、御接待にも疲れた風を致すが宜い。御咎めは願ふ所、御不滿足とあらば、妹方へ御越しなさらう。何あの妹ぢやとて、心は同一、御我儘を立てゝは居ぬ。讓つて了つた王權を、いつ迄も振舞はさうとは愚かしい御了簡。ほんに老いては小兒に還る。甘言がきゝ過ぎたら、恐嚇文句も云はねばならぬ。よう云付けた事を忘れまいぞや。

と奥にて號笛の音聞ゆる

オス　畏まりまして厶りまする。

ゴネ　そして武官共は、殊更等閑に致すがよい。その爲めどの樣な事が起らうとも、少しも氣遣な事はない。一同へも傳へて置きや。咎められた事ら好い機會にして、云ひたい事を云ふて退けたい妾の意。早速妹方へも文通して、同樣な御待遇を、致すやうに申して置かう。食事の仕度を

致してたもれ。

と二人退場

第四場　同じく殿中の書院

ケント伯、麥を下郎に囊して登場

ケント　若し此上にも語音を變へ、言葉を紛らす事が出來たら、それ故にこそ麥を寢し、此處へ入込んだ目算も、首尾克く叶ふと申すもの。今は追放の此身ながら、罪得し人の御側に居て、奴僕の用を足すならば、いとしい御主君に此身をば、忠實な奴ぞと、思はれることも出來やうか。

奥にて號笛の音　リア、武官及び侍者登場

リア　サア〳〵膳部を持て、少しも猶豫は相成らぬ。早う準備を致させい

（と従者一人此言に従ひ退場）何ぢや、其方は何者ぢや（向つていふ）

ケント　男一匹でムりまする。

リア　身分は何ぢや、何ぞ予に願ひがあるか。

ケン　いや御覧の通りの不調法者、御信任下されう御方には忠義を盡し、正直者は可愛がり、賢者とあらば默つて交はり、餘儀ない時には喧嘩も致し、神の御沙汰を恐れ慎み、魚は一切口に入れぬ（エリザ朝時代に魚か食ふは舊教徒として賤められたりとぞ）者でムりまする。

リア　そして何者ぢや。

ケン　至極の正直者で、國王殿下程の貧乏者でムりまする。

リア　天子にしては貧乏な國王、臣民として其割合に貧乏なら、其方は隨分な貧乏者ぢやな。して願と申すは。

ケン　御奉公が致したうムります。

リア　誰に奉公が致したい。

ケン　即ち貴大人に。

リア　其方予を承知の上か。

ケン　いや存じませぬが、貴大人の御顔の中に、何とやら御主と呼んで見たい物がムりまする故。

リア　其物とは何ぢや。

ケン　即ち御威嚴。

リア　して其方何が出來る。

ケン　僕奴に出來まする事は、先づ秘密は堅く守り、馬を御したり、走り使ひ、込入つた御話は、訥辯で壞して了ひ、簡單の使命なら、無作法にやつ

てのけ、其外何でも人並の者の出來る事は、出來ぬ事はムりませぬが、第一の取柄と申すは、精勤な事でムりまする。

リア　年齢は幾才ぢや

ケン　左樣でムります、唄を聞いて女に惚れる程若くもなく、又どの樣な事があらうと、女に溺れる程老耄けても居りませぬ。即ち四十八の春秋を、此背に背負つて居りまする。

リア　然らば召使つて遣す、奉公致せ。此食事が終る迄、氣に入る樣に致し居つたら、以後は側近く置いて遣はさう。ヤア食事は如何致した。道化坊主は何處ぢや。これ汝は（一人の侍者に向ひ）坊主を呼んで參れ。

と侍者一人退場

オスワルド登場

ヤア其方參つたか、我女は如何致した。

オス　アノそれは殿下——

と云ひも果てずオス退場

リア　彼奴何と申した。誰かある其阿呆奴を呼戻せ（と此命を聞きたる武官甲退場）坊主は何處へうせた。えゝ何奴も此奴も埒の明かぬ。

武官甲再登場

おゝ如何致した。獣奴は何處へ參つた。

武官　彼の申しまするには、姫君（ゴネリル）には、御不快とムりまする。

リア　然らば予が呼懸けし時、何故戻つては參らぬぞ。

武官　きつぱりと致した詞にて、御前へは參りたうもないとの返答てムりました。

リア　何、參りたうもない。

武官　殿下、如何なる次第か存じませぬが、某が愚考には、どうやら殿下への御待遇が、從前とは變つた樣子。公爵にも姫君にも、まつた家來共一統の取なし振にも、これ迄の親切が消え失せて、いかう等閑な所が見えまする。

リア　ハテ、けしからぬ。

武　若し此推量が違ひましたら、何卒御容赦下さりませ。只だ某は少しにても、殿下御冷遇を受けさせ給ふと思ふ時は、義默すべきにあらざる故、申し上げましてムりまする。

リア　いや其の詞を聞いて思ひ出てた、予も疑ふ事がある。いかう等閑なる待遇振と、此程目に留まりし事のあるを、いや〳〵予がひがみてあらうわざとの無禮にては、よもあるまいと思うたが、尙ほ一考致して見やう。それにしても彼の坊主は如何致した。此二日ばかり影も見せぬ。

武　末姫君が、佛蘭西へ御立ち遊ばされてより、彼の坊主めは、いかうしほたれて居りまする。

リア　最早それは云うて呉れるな、予もよう認めて居るぞ ―― 其方は彼方へ參つて、用談がある、參れと姫に申して呉りやれ（と侍者乙退場）―― 又其方は坊主を此處へ連れて參れ

（と侍者丙退場）

オスワルド再登場

おゝ參つたか其方。此方へ參れ。コリヤ、其方は予を誰ぢやと心得居る。

オス　誰あらう、某がお仕へ申す妃の御ン父と。

リア　「妃の御ン父」。えゝ無禮者。犬畜生。

オス　某は左樣なものではムりませぬ。何卒御免下さりませ。

リア　何ぢや予が面を見返すか、此不屆者めが。

とリア、オスを打擲する

オス　御打擲を受ける覺えはムりませぬ。

ケン　蹴られる覺えもないと申すか、卑怯者、弱虫奴が。

とケン、オスの腰を蹴て倒す

リア　忝ないぞ奴。其方は忠勤者ぢや、可愛がつて遣らすぞ。

ケン　コラ立てヤイ、出て失せう、君臣の禮を敎へて遣るわ、サア退いた退いた。尙躰軀の尺が取りたけりや（最一度蹴倒されたくは）殘つて居れ。さもなくは

出て失せう。心なしな奴ではある。そらッ

とオスを場外に押出す

リア　さて〳〵うい奴、嬉しいぞ、それ褒美を遣はす。

とケントに金錢を與へる

道化坊主登場

道坊　愚拙も此人を家來に持ちたい（道化坊は原語にて愚人と稱す、其愚人が家來に持ちたいとは即ちケントを汝も愚人なりとの意）モシ、此の冠物を進ぜませうか。（道化の帽は即ち愚人の徽象なりの謎）

リア　これ〳〵其方は如何致した、達者であつたか。

道　サア〳〵此冠物を取つた〳〵、これが卿には一番似合ふ。

ケン　そりや何ういふ譯ぢや。

道　ハテ、世に棄てられた御方に附くは、賢い人とは云はれまいいやさ卿は、何の樣な風の吹廻しにも、笑顔を見せて居られるかさもなくば卿は早速追出されうサア〳〵此冠物を取つて置きや。ハテ此御方は二人の娘御を勘當して、末の娘御にいや〳〵ながら御跡を讓られた氣紛れ者。其御方に奉公するからは、此冠物を着けずばなるまい――申し、賴む御方（リアに向ひて云ひ）愚拙も二人の娘と、此冠物を二個欲しうムりました。

リア　何故ぢや。

道　たとひ家藏はみんな讓つても、愚人の記號が二通り、手元に殘つて居りましたらうに。（愚なるかな讓せしは二重になり）乍去愚拙のを一個殿下へ進ぜまする。尙一つは姫君達から御申受けなされませ。

リア　氣を付けて物を申せ。鞭があるぞよ。

道　げに、阿諛な雌犬は、座敷の上で、ぬく〳〵と臭いものを放つてもお搆ひないが、忠義な大犬は鞭たれる習ひ、逃げずばならぬ。

リア　えゝ此身に取つて苦々しい其詞。

道　殿下面白い唄を一つ御敎へ申しませうか。

リア　敎へて呉りやれ。

道　然らば御聞成され、賴む御方。

見せるな有りつ丈、語るな底まで、貸すな手一杯、馬に乘るなら歩ける中、聞いた話は半分に積もれ、賭事は內場に見込め、酒と女郎にや逃げるが勝。さてこそ十を二つて二十の上に、融通の利く身とはなれ。

ケン　何の、たわいもない。

道　如何な知慧者も禮物がなうては、碌な知慧は貸さぬもの、卿とても禮物を遣されぬではないか。乍去頼む御方、たわいもないに御用はムりませぬか。

リア　ない〳〵、たわいなしを幾つ集むればとてたわいがあらう。無いものが有るやうにはならぬものぢや。

道　（ケントに向ひ）卿からよう申して下され、殿下の御領地とても其通り、無い土地から收穫はないと。殿下には愚人の詞を御用ゐなさらぬ。

リア　苦々しい愚人ではある。

道　ホー頼む御方には、苦い愚人と甘い愚人の差別を御存じてムりますかな。

リア　いや知らぬ、教へて呉りやれ。

道　御領地を棄てよとは誰が云うた、云うた御方はこちや知らぬ、假に殿下をそれと見て、さて愚拙と並んで見れば、苦い甘いは直ぐ見える。甘い愚人はこれ此處に、苦い愚人はそれ其處に。

リア　然らば其方、予を愚人に致す氣ぢやな。

道　生れながら御有ちなされた、其外の御名號は、御棄てなされたではムりませぬか。

ケン　いやこればかりは、全くの愚人ではムりませぬ。

道　いかにも愚拙ばかりが愚人でない、上つ方が、愚拙ばかりに愚人を御許しなされませぬ。愚拙が愚人を獨占に致しますると、お役人方が

是非裾分をとせがみまする。御婦人方とても其通り、愚拙ばかりに愚人を御許し遊ばされず、分前をと仰せられる。（當時專賣權の許可を得るには要路の人々に部割をしなければならぬ習慣ありしを諷刺するなり）モシ頼うだ御方、雞卵を一つ愚拙に下し置かれうならば、愚拙は王冠を二つ献上致しまする。

リア　二つの王冠とは何の事ぢや。

道　ハテ雞卵を眞ン中で二つに割り、中味を食へば、後に殘るは二つの王冠（卵殼を意味す。リアが王冠を二つに割つて、アルバニイ、コーンオールに分與せしを諷す）――頼む御方が正物の王冠を眞二つにして、雙方共他人に御譲りなされたは、馬の脚を汚すが惜しさに、馬を背負つて泥路を渡ると申すもの。ハテむざ〳〵金の王冠を棄てるとは、禿げた御頭顱の其中には、餘り御智慧がないと見える。いやかく申す愚拙が詞を、愚人の囈語などゝ吐す奴は、それこそ撻ちのめしても飽足りない奴。

今年や愚人の因果番、賢い御方の間が抜けて、智慧の遣り場も御存じない、お蔭で愚人が不繁昌、

リア　其方は何時の間に色々の唄を稽古致した。

道　是は頼うだ御方が、姫御前達を母君と御頼みなされてから、稽古致しましてムります。ハテ貴下樣が、鞭を姫達の御手に御渡しなされ、元の孩兒に御還りなされた時

喜び涙に暮れたは御二人、
悲し涙に暮れたは愚拙。
彼程の王樣がたわいもない、
愚人に交つてやんちや遊び。

申し我君、何卒虚言の師匠を取て、虚言の稽古を致させて給はるやう御願に厶りまする愚拙は虚言吐く術が習ひたうてなりませぬ。

リア　虚言など申したら打擲致すぞ。

道　さて〳〵貴下様御親子は、何うして此様に御違ひ遊ばすやら、姫君達は眞實を申せば御打擲なさると仰有る。然るに貴下様は、虚言を申せば御打擲遊ばすと仰有る。そして時には默つて居るとて御打擲を受けまする。いや道化にはなりたうないものとは申しても我君の様にも成りたうは厶りませぬ。貴下様は御腹の右左から、知慧といふものを取つて了つて、中央には殘るものもないあはれさ。ヤヽ、其片割の一つがそこへ御出なされた。

ゴチリル登場

リア　ヤイ女。如何致した。額に寄せた其皺は何と致した。近頃は餘り澁面が過ぎるやうぢや。

道　姫君の御澁面などは、御氣にも留めぬ其昔は、我君にも天晴男であらせられたが、あゝ今は何たる見すぼらしさ。我々風情にも劣る御身の上。ハテ愚拙は愚人ながらこれでも男。貴下様は乍恐男の數の中にも六つかしい——（ゴチリルに向ひ）ハイ〳〵默りまするて厶りませう。どうやら默り居らうと命せらるゝやうな御顏色。叱々。

唄「實も皮も留めぬ御身の味氣なさ——（古き諷刺歌の一節なるべし）

おゝこゝに豆を捩いた莢殿が居らせられた。（と指す）

ゴチ　父上、年中無禮講の道化を始め、御從者の誰彼が、忍ぶに忍ばれぬ亂酒亂行、騷々しい喧嘩いさかひの片時止む時も厶りませぬ。寧そ父上

に申上げ、御取締りを願はうかとも思ひましたが、今宵の御詞御擧動から思ひ直せば、これは父上御承知の上、却て御勸め遊ばすのでがなムりませう、若し左樣ならば忌々しき御心得違、恐れながら宮中靜謐の爲めには、御處分をも致さねばなりませぬ。父上に對し斯樣な擧動を、平時ならば人の咎め世の謗りもムりませうが、致方なき今日の仕誼、道理と見ぬ者もムりますまい。

道　いかにも〳〵、我君

唄「鷲が養ひ上げた郭公、
恩に甘へて假親の
首をあんぐりちよんぎつた。
げに〳〵油が盡きれば燈心は棄てられる。お蔭で我等は眞暗々々。

リア　ヤイ其許はそれでも予が女か。

ゴ子　コレ申し、知慮分別に御不足のない御身。ちと御嗜み遊ばして、今日此頃の變り果てた御行跡を、お改めなされませ。

道　車が馬を曳くも時世時節と御存じないか。

リア　えゝ我ながら我身が疑はしい。此身はよもリアではあるまいがやうに歩み、かやうに語るはリアであらうかえゝ兩眼も當にはならぬ。知力が衰へたか、分別が鈍つたか、眠てか覺めてか覺束ない。いや〳〵迚も覺めては居まい。此身は抑も誰であらうぞ。

道　即ちリア王の影法師で。

リア　（道化の詞を聞かずに）知りたいものぢや。身に纏ふ此衣服や、心覺えをたどつて見れば、此身即ちリア王にて、二人の女を有つ筈ながら、苟くもリア

王が生の女に、此樣な待遇は受けもせず。

道　影法師なればこそ、姫君達の御心のまゝ。

リア　其許の名は何と申す

ゴネ　その御詞からが、今日此頃の狂語戲謔、何卒妾の申上げる意味をば、惡しからず思召せ。御年の上をも少しは御考へなされて、ちと御嗜みなさらずばなりますまい。百人の御附の武官は、揃へも揃つて亂暴者狼籍者、遠慮もない身の擧動。殿上は恰ら茶屋小屋同然、これがどうまあ嚴然とした、帝王の住家と見えませうぞ。宮中の汚れ辱しめ故、是は處分を致しまする。就きましては妾の御願ひ、武官の數を減し、たゞ御年ばひに相應はしい其身の程をも又父上の御身の程をも、辨へる老人共を、殘す事に致したうムります。

リア　ちえゝ無念。物共馬に鞍を置け、武官共を呼集めよ。見下げ果てた不孝者、最早汝の世話にはならぬ、まだ外にも女がある。

ゴネ　父上には妾の家來を御打擲、御附添の狂漢原は、上役人を奴僕扱ひ。

アルバニイ登場

リア　後悔先に立たざる悲しさ、おゝアルバニーも參つたな、是は卿の圖らひか、包まず申せ——ヤイ〳〵馬を用意致せ、えゝ恩知らずの薄情女、これが我子ぢやと思へば、鬼とも夜叉とも譬へやうなく淺ましい。

アル　何卒其樣におせきなさらず

リア　（ゴネに向ひ）汝夜叉、よい加減の事を申すな、武官共は撰りに撰つた武道の達人、守るべき義理を確と守り、身の名譽は墜さじと、些細の事にも心を碎く小心者ぢやわ。おゝはかなき過失故、予が腹の虫に住所を變

へさせ、永年の愛みを一朝に失つて、苦い憎惡を受けたなれど、想へば
あのコルデリアはいとしの者、彼女に比ぶれば、汝の心の恐ろしさ。そ
れにつけても我ながら、彼の樣な愚かしい意（コルデリアを惡しと思ひし）を容れ、賢
い分別を追出した、これ此門（腦髓を指す）が恨めしいわい。

と自ら其頭を打ちつゝ

アル　いざ參らう、者共。

リア　何故其樣に御心を騷がせらるゝか、某に於ては一向に存じませぬ
が、少しも御意に背いた覺えはムりませぬ。

アル　さうであらう〳〵。――えゝ造化の女神も心あらば、何卒此女奴に
子といふものを惠ませ給ふな。此奴が胎内の子種を枯らし、彼の腐つ
た躰軀から、子寶といふ芽のふかぬやうに致して呉れたい。さもなく

ば生れ損ひの執物者、絶えず母に苦勞をかける子を生んで、それ故生
若い額の上に皺を刻み、落つる涙で頰に溝を掘つた上、母たる者の恩
も惠も難有いとも思はれず、さてこそ恩知らぬ子を有つた苦みは、毒
蛇の牙にも優るといふを知らせたい。いざ〳〵さらば。

とリア半分行きかゝる

アル　さて〳〵解しかぬる此場の樣子。

ゴチ　其仔細を聞かうなどゝは要らざる御詮義。たゞ老耄た御心に任せ
て置くが宜いわいな。

リア再び戻り來て

リア　何ぢや、一時に五十人の武官を減す。それも半月足らずの中に。

アル　ても何事でムりまするな。

リア　話して聽かさう――（ゴ子に向ひ）えゝ無念な、汝故に此躰軀が、此樣に顔、くぞや制へて制へ切れぬ此熱涙も、たゞ汝故とは思ふも口惜し。ちえゝ不屆女、汝が身中に殘る隈なく、此父が呪咀の毒の泌み渡れ。えゝうるさい眼ぢや泣くか〳〵泣いて見よ、抉り取つて濕れたまゝ肥料にする。えゝこれ程迄とは思はなんだ〳〵。いや宜い〳〵、最一人優しい孝行な女がある。汝の親不孝を話したなら、定めて其の狒面を、引掻かずには居られまい。ヤイ〳〵汝はな、此父が一生王位を棄てたと思ふてあらうが、今に見よ又々元の姿に立還つて、汝を驚かして呉れるぞよ。

ゴ子　あれを御覽なされましたか。

とリア、ゲント及び侍者退場

アル　コレ、ゴチリル、其許愛しいは愛しいが、見遁しならぬ父君への今の擧動――

ゴ子　其樣な事聞きたうない――オスワルドは何處にぢや

（道化に向ひ）おゝ其方愚人とは名ばかり大惡人、御主人の後を御慕ひ申せ。

道　なら〳〵リアの君、リアの君、ちと御待ちなされ、御同道申し上げませう。

唄「こんな娘とこん〳〵狐、愚拙の頭巾を繩に代へ、盜つて殺して棄てたら宜かろ、それ〳〵狐ぢや追つてけ〳〵

と道退場

ゴ子　イヤ、妾は父上に、御諫言を申上げたばかりて厶りますぞへ、百人の武官をば、軍扮裝て附けて置くは險呑至極。どのやうな夢に浮かされ、

どのやうな風聞に惑はされ、どのやうな不平があり、さて我々に厭氣がさすとも、直樣武力を楯にして、老の氣隨を推透さうなら、我々が生死さへも、只父上の御心任せでムりますぞへ――コリヤ、オスワルド

アル　それは案じ過ごしてあらうぞ。

ゴ子　安心に過ぎるよりは優りませう、杞憂の種は絶えず刈取り、杞憂せぬが妾の願ひ。父上の御心はよう存じて居ります此身。父上の御詞は妹方へ報告せまする。若しそれでも妹が、妾の詞を聽入れず、百人の武官を附け置くなりや――

オスワルド登場

オス　おゝオスワルド、妹方への書面は最早出來致したか。

出來致しましてムります。

ゴ子　そんなら早う從者を連れ、早馬で急いで往きや。そして妹に逢うたなら、妾が心配の箇條を具さに陳べ、其許が意見も加へ、よう合點をさせて給もれ。さらば早う往つて早う歸るを待つて居るぞや。

とオス退場

はて我夫、優長な爲され方を、咎めるてはなけれども、恐れながらそれは、溫厚とお褒め申すよりも、知慧のないと申し上げたうムりますぞへ、

アル　其許の眼に何れ程の明があるかは知らぬが、なまじひ慾をかわいて、却て無慾に似たる擧動を致すは間々ある事ぢや。

ゴ子　否それは――

アル　よい〳〵、結局を見やうぞ。

と二人退場

第五場　同じく門前の廣場

リア、ケント、道化登場

リア　其方は此書面を携へ、一足先へグロースター（コーンチール公の住地）へ參れ。但し女には書中の趣につき、問はれる事の外、一切語り聞かすてないぞ、そして精々急がぬと、汝よりも予が先に着くてあらうぞ。

ケント　いや御書面を御渡し申す迄は、少しも休む事ではムりませぬ。

と　ケント退場

道　ちと伺ひたい事がムります。腦髓と申すものが踵にあつたら、滅多な處へ足は向けますまいが、其代り凍傷にかゝる患がムりませうな。

リア　當り前ぢやわ。

道　イヤ御安心なされませぢやと申して腦髓のない貴君の一德には、御知慧に上靴を穿かせる世話も入りませぬ。

リア　ハッハッハッハッ

道　いや最一人の姫君は、訖度父君を御親切に御待遇なさるてムりませう。柚と橙が似たる如く、此なる君と彼なる君とは、いかう似て在せども、其處には又其處がムりまする。

リア　何の樣であらうぞ。

道　ハテ、柚は其味柚に似たるが如く、二の姫も一姫の樣な酸ばい味が致しませう。貴君樣には、一體鼻と申す物は、何故顏の眞中にあるか、其理由を御存じてムりまするか。

リア　いゝや存ぜぬ。

道　それは兩眼を鼻の兩側に安置し、鼻にて嗅き出せぬものは、眼で見付出さう爲めてムりまする。

リア　あゝ予はコルデリアに濟まぬ事を致した——

道　牡蠣は何故其殼を作るか、御存じでムりまするか。

リア　いや存ぜぬ。

道　愚拙とても存じませぬ。乍去蝸牛の殼ある理由は存じて居りまする。

リア　如何なる理由ぢや。

道　ハテ首を仕舞う爲めてムります女達に讓つて了つて、自分の角は鞘なしに、曝して置かう爲めてはムりませぬ。

リア　えゝ父たることを忘れたいがやうな恩愛の深い父親に——ヤア馬の用意は宜いか。

道　御家來の驢馬共が、只今御馬の周りに騷いて居りまする。それはさうと七曜星は、七個に限る其理由には、善い理由がムりまする。

リア　八個はない故であらう。

道　實に〳〵御意の通り。我君には愚人にお成遊ばさるれば、結構な愚人にお成なされまする。

リア　理が非でも再び王位を取戻したい——えゝ恩知らずの夜叉女。

道　乍去若し我君が愚拙に召使はるゝ愚人なら、早う齡を取り過ぎた罰と致して、一棒を喰はせずには置きませぬものを。

リア　そは又何故ぢや

道　賢しこくもならずに、齢ばかり取るは、不法でムりまする。

リア　おゝ、心がむか〳〵致す、何卒逆づる此胸を鎮めたい、發狂は致したうない。

一紳士登場

紳　どうぢや、馬の準備は宜いか。

リア　宜しうムりまする

然らば、ソレ參れ。

と一同退場

第二幕

第一場　グロスター伯爵居城内の庭前

エドマンド及ビ廷臣クラン登場、兩人出合頭

エド　これは〳〵クラン殿。

クラ　おゝエドマンド殿、某は只今御父君に御意を得て、コーンヲールの公爵並に公爵夫人レガン姫、今宵御館へ御來臨あらせらるべき旨、御報知せ申して參りました。

エド　それは又如何なる次第で。

クラ　某とても存じませぬが、貴殿には世間の風聞を御聞なされたか、尤も風聞と申しても、耳に口の秘密でムる。

エド　いや少しも聞きませぬが、そは又如何樣な風聞て。

クラ　貴殿には、コーンヲール並にアルバニー兩公爵の御中に、近頃戰端の開かるべきとやうの、噂を御聞き込はなされませぬか。

エド　いや少しも。

クラ　ハテ、然らば、いつか御耳に入るてムらう。いや御免あれ、おさらば。

（クラウン退場）

エド　何ぢや、公爵が今宵御來臨ある、是は益す面白い。此上もない幸福、思ふ坪へ嵌つて來るといふものぢや。さて親爺殿には、兄者を捕へる爲めとて、見張の番人を置かれた樣子、こゝは一つ手柔かに纖巧かい細工をせずばなるまい。何卒運よく、そして手捷く片つけたい。申し兄上、一言申上度い事がムります。お來なされ、兄上。

（エドガヤー登場）

モシ、父上が貴兄の御出入を御覗ひなされまする。早く此處をお逃げなされ。御在家を告口致した者がムる樣子。幸ひの此闇夜。して兄上にはコーンヲールの公爵に、何か御蔭口でも御きゝなされた事はムりませぬか。公爵には此夜陰に遽たゞしう、夫人御同道にて此處へ御來臨あるとの事。如何でムります、アルバニー公と鎬を削る、コーンヲールの殿に對し、何か仰せられた事がムりませぬか。ようお考へなされませ。

エド　いや一言たりとも、左樣な事は申さぬが。

エド　ヤ、父上が御出の樣子。御免あれ、某は見せ懸ばかりに、一刀を拔きまする。貴君もお拔きなされて、見事斬り合はせる躰をなされませ。（と一段聲）

（高くし）ヤア、從順しく父上の前へ御出あれ、誰か有る燈火を持て、（低くし又聲を）お逃げなされ兄上（張上げ又聲を）松明を持て、松明を、（低くし又聲を）左樣ならば御機嫌よう。

とエッヂャー退場

どり、や、少々血を出して置いて（少し傷けると自ら腕を）天晴苦戰の躰に見せて呉れうか。醉どれた色男が、女への心中立に、腕の血を絞るといふは能くある事ぢや（當時情婦の健康を祝するため盃ぐるる風習ありしとぞ）——（上げと聲を）父上父上樣、それお留めなされ、誰ぞ居らぬか。

グロスター及び家來共松明を持ち登場

グロ　ヤア、エドマンド、不孝者は何處へ失せた。

エド　此の暗闇に拔刀を翳し、何か呪文を唱へながら、月に祈請を籠めら

れてゞムりました。

グロ　して何處へ失せた。

エド　御覽あれ、某は此通り傷を負ひました。

グロ　不孝者は何處へ參つた。

エド　から彼方へ御逃げなされました。如何致しても兄上には——

グロ　それ追つ懸けよ、後を追へ（二三家來の退場）——「如何致しても兄上には」——して何ぢや。

エド　父上弑虐の密謀を、某承引仕らず、却て親を弑する者は、天罰立ろに至るは必定、まつた親子を繫ぐ恩受の羈と申すは、斷つに斷たれぬ因緣深きものなる由を申せしに、結句御陰謀の妨害と見て取つたか、用意の拔刀で躍り懸り、柄も通れの不意討ちに、不覺や此腕をかすられ

ました。乍去義我に在りと思へば、忽ち座る某が膽たましひ、いざゝ相手と奮ひ起つに恐れをなしてか、さては某が叫き聲に驚いてか、取る物も取りあへず、遽たゞしげに逃げ失せましてムりまする。

ケロ　何處迄も逃げるが宜い。此國内に居る限りは引捉へずには置かれぬ奴。引捉らへたら首にする。此父が主と頼む公爵には、今夜此處へ御來臨の筈なれば、御許可を受けたる上、國中へ布令を出し、彼の親殺しの不孝者めを引捕へ、訴へ出づる者には褒美を遣はし、又庇ひ立を致す者は、死罪に處する赴を披露致す。

エド　御聞き下され、御隠謀を思ひ留らせうと致しても、中々以て動かし難き御決心。然らば某訴人致すと申せしに、恐ろしや兄上の御詞、生れ損ひ素寒貧。此兄が反對側を張る上は、縱令汝が何を云はうと、汝の身

につく何の徳何の値打のあらうとも思はぬ世間が、いかて汝の詞を信用へむ。よしや汝が拙者の書面を見せびらかすとも、此兄が知らぬといつたら、それを眞實と思ふ者のあるべきか。それこそ却て、汝が惡むべき陰謀と思はせるは拙者の手の中。即ち拙者を無き者にして、後を横領せむとの作略て、其樣な虚言も吐くと、世間が思はぬと思うたなら、それは餘り世間を見縊り過ごすと申すもの。

ケロ　いや手硬い惡黨ぢや。彼の書面も覺えがないと吐かす氣かえゝ拙者の子てはない。

此時奥にて喇叭の聲聞ゆる

アレ、あれは公爵が御來臨の喇叭、ても何用あつての御來臨やら——兎も角も公爵に御願ひ申し、港々に關を据ゑ、彼の不孝者を逃がしは

せぬ。又肖像を國内に配り、彼奴が顔付を廣く人民に知らして呉れむ。さて其方は孝行者、拙者が所領は、何れ其方に相續致さする事に計らはうぞ。

コーンヤア、グロスター卿、參り早々不思議の噂を聞くものぢやなあ。

コーンヲール、レガン及ビ家來共登場

レガン　其噂が事實なら、何の樣な罰を加へても、腹がいようとは思はれぬ。コレ何とぢやグロスタア卿。

グロ　おゝ夫人、某が胸は張裂くる計りでムりまする。

レガ　妾の父君リア王が、敎父をして名を命けた、彼のエッヂヤーが卿をば、殺害なさむ陰謀とは。

グロ　おゝ夫人、夫人お耳に入れるもお耻しうムりまする。

レガ　してエッヂヤーには、此程父上に御從き申す、彼の噪がしい武官共に、立交りなどは致さぬか。

エド　夫人、如何にも彼の武官共の同類でムりました。

レガ　さればこそ、惡人に化るも不思議はない。土地財寶を横領して、金錢を湯水と使ひたさ、老いたる父を殺せよと、煽かしたも彼等の所業。先刻姉上よりの御文にても、彼等が樣子は委細判明る。それ故彼等を引具して父上の御臨御あるも、妾は殿中に居ぬやうにと、わざ〳〵の御心付。

コール　予とても殿中には居らぬ所存――時にエドマンド、其許は父に對し、通れ孝行を盡されたとの事感心致す。

エド　イヤナニ、子たる義務を果したのみてムりまする。

グロ　此なるエドマンドが彼奴の陰謀を見露はしましてムりまする。又彼奴を引捉へむと致して、御覽の通りの傷を負ひましてムりまする。

コー　して追手の者は向けられしか。

グロ　向けましてムりまする。

コー　引つ捕へたら後日の爲め、存分に處分を致すがよい。此儀に就ては、予が名義で勝手な計らひ苦しうないぞ。又エドマンド義は、今日今夜天晴の孝心を現はしたれば、以後は予が臣下と致す。箇樣に誠ある臣下こそ、我等が尤も望む所。何を措いても先づ取るべきは其方ぢや。

エド　何事も及ばずながら、たゞ忠義を專一にお仕へ申すてムりませう。

グロ　悴に代り某より御禮を申上げまする。

コー　さて今夜、かく其許がり尋ね參りし理由と申すは——

レガ　此やうに時でもない時、夜道を縫うて參りしは、グロスター殿、よく〳〵の理由あればこそ、夫につき其許の意見が尋ねたい。と申すは父君と姉上と、雙方から御文が參り、御二方の中に、縺れ上がつた御不和の御報告。其返事を差立てるに、殿中からでは都合が惡く、それ故雙方の使者を待たせて置いて、わざ〳〵尋ね參りし次第。其許の心勞も推察すれど、暫く胸の苦患を忍び、差迫つた我等の大事に、善い知慧を貸してたもれや。

グロ　畏まりましてムりまする。折角の御光來身に餘る光榮に存じまする。

と一同退場

第二場　グロスター伯居城城門前

ケント及びオスツルド別々に登場

オス　モシ〳〵其處を行かるゝ御方、卿は若しや此御邸の――

ケン　いかにも。

オス　然らば、馬は何れへ繋いて宜しうムるな。

ケン　溝の中へでも繋ぐが宜い。

オス　いや不敏と思つて、何卒教へて下され。

ケン　いや不敏とも思はぬ。

オス　ハテ、然らば卿に用はない。

ケン　用がないも太々しい。

オス　卿は何故其樣に身共に向ひ、つけ〳〵と云はるゝぞ。一向見知らぬ仁のやうぢやが。

ケン　下郎、己や汝を見知つて居るぞ。

オス　然らば身共を何と思はしやる。

ケン　惡黨、無賴漢、殘肴荒しの奉公人、卑劣、傲慢、淺薄な、小祿な、貧乏な、仕着の外を着た事のない、薄汚ない毛足袋（當時の襪は大抵絹な用ゐ毛糸の襪な穿つは貧者のみなりき、蓋し當時の衣服は膝より下に達せず膝以下を襪を以て掩ふのみなれば也）を穿く極道者、膽の小さい、刀の恐い臆病者、生れ損なひの、虚榮の、馬鹿丁寧の輕薄者、葛籠一つが財產の悉皆な無宿者、淫賣宿の亭主が相應の卑怯者、惡黨、乞食、臆病者、誘拐者を混合て出來た男、定めて母は素性怪しい夜鷹であらう。かう數へ擧げた條々に相違があるなどゝ吐かして見い、びい〳〵する迄打ちのめ

すぞ。

オス　さて〳〵、知りも知られもせぬ、赤の他人を捉まへて罵詈悪口、何と恐ろしい人ではある。

ケン　何ぢや知らぬなどゝは厚顔しい奴君の御前で、此拙者が汝を蹴轉がし、打擲してからまだ二日とも經たぬわやい。サア抜刀け〳〵、夜とはいへ月が明るい。溝の中へ斬込んで、水の中から月見をさせう（と自一刀を抜き）サア抜いた、生れ損ねの虚飾家奴、抜いた〳〵。

オス　えゝ寄るな〳〵、身共は卿に用はない。

ケン　ヤイ抜け悪黨。コレ汝はな、殿下の御爲めにならぬ書面を持つて參つたな。姫の味方を致して、父王殿下を苦めうと致し居る。サア抜け悪黨、抜かずば汝の脛を一拂ひぢや。サア抜いた、此方へ來い。

オス　人殺し〳〵。

ケン　サア打て下郎、サア立て悪黨、撃たぬか虚飾者。（とケン、オスを打つ）

オス　出合へ人々、人殺し〳〵。（エドマンド抜劍にて登場）

エド　何ぢや、何事ぢや。

ケン　コレ二才殿、要らざる留立て致さば卿が相手ぢや。試合の方法を教へて進ぜうか。（と兩人を引別くる）

（コーンヲール、レガン、グロスター及び家來共登場）

グロ　ヤア物々しい刃物三味何事ぢや。

コー　命が欲くば靜かに致せ、最一度擊つなら擊つて見よ、命はないぞ。サア何うぢや。

レガ　ヤヤ、これは姉君と父上よりの御使者ぢや。

コー　兩人の喧嘩は何故ぢや。

オス　御前樣某は息も絶々でムりまする。

ケン　フム、天晴勇氣の程を見せた故無理もない。ええ、臆病者、汝は造物主の作つた人間ではよもあるまい、仕立屋に作られた人間ぢやな。（即ち人間の衣裳を着けたる斗り、人形のやうな奴の意）

コー　さて〳〵其方は奇妙なことを申す奴ぢや、仕立屋が人間を作ると申すか。

ケン　いかにも仕立屋が作りまする。乍去此不細工、如何な新前の彫刻師

でも、此樣な不細工は致しませぬ。

コー　いや餘事は暫く、喧嘩の原因は何事ぢや。

オス　我君此老耄奴は、白い鬚にめんじて、命を預けて遣しましたが——

ケン　ヤイ〳〵極道者——我君、御前樣の御許可さへあらば、某は此極道者を、石臼の中へ踏み落とし、搗て粉にして便所の壁を塗りまするが——白い鬚にめんじてとは、よう云つた犬侍。

コー　ヤイ靜かに致せ無禮者。遠慮と申すことを存ぜぬか。

ケン　存じては居りまするが、腹の立つ時は格別でムりまする。

コー　何故其方は立腹致すぞ。

ケン　斯樣な仁義の道をも知らぬ輩が、一刀を手挿み居る故でムります。斯樣な巧言令色の徒が、親子の中の、切つても切れぬ貴い繩を鼠のや

うに噛み切りまする、又は主君の心に湧く、善からぬ意を煽ぎ立て、情の火に油を差し、冷たい胸に氷を添へなど、何でも主君の心の風向次第で、御意のまゝに口をきゝ、何の事はない犬同然、從いてゆくと申す事の外は知らぬ奴。えゝ其青ざめ顔は何の樣だ。何ぢや其苦笑は、拙者を愚者との意ぢやな。

コー　コリヤ、其方は發狂致したか、老耄。

グロ　何故の爭ひなるぞ、それを申せ、

ケン　此某と斯樣な惡黨程、性の合はぬものはムりまするまい。

コー　彼を惡黨とは何故ぢや、彼が何ぞ惡事を致したか。

ケン　彼の面附が氣に入りませぬ。

コー　左樣な事を申すなら、予を始め茲に居並ぶ面々の顔付も、大方汝の氣には入るまい。

ケン　正直を申すが某の持前。夫故申しまするが、實に見渡す所、歴々方の御顔揃ひ、御立派は御立派だかこれよりも立派な御顔揃を見た事もある某。

コー　ハハー、此奴は無遠慮を褒められたので、態と疎雜な口をきゝ、心にもない無禮を致すのぢやな。正直朴訥な心に追從も云はれず、眞相を云ふばかりなどゝ世間が承知致せばそれでも宜いが、さもなくば無遠慮の報ひは遁れられまい。斯樣な輩は阿諛諂佞を事と致し、維命維從ふ佞臣原より、其無遠慮の中に却て十倍廿倍の詐術と、憎むべき野心を藏し居ると申すもの。

ケン　然らば眞當詐りなし、日神フェーバスが額の上に輝く篠の鬢かとば

かり、後光の差す公爵殿下の御許を被り――

コー　それは何の口上ぢや。

ケン　御前樣の御嫌ひ遊ばすに依て、詞を改めましたのでムりまする。某は諂らひが不得手、然るに無遠慮な詞を以て、殿下を欺かうと致したは慥に惡黨、其樣な者には某も成り度うはムりませぬ。よしや殿下の御機嫌が直つて、再び其樣な者に立還れとの御詞があらうとも、某はいやでムりまする。

コー　（オスに向ひ）然らば其方は彼に何無禮を加へしぞ。

オス　某は何無禮をも加へませぬ。遂此程の事でムりましたが、彼が主と頼む國王殿下には、何か御思違ひを遊ばされ、某を御打擲なされましたが。其時此者が出しやばり出て、殿下へ諂諛の意か、某を後へに瞠と蹴倒しました上、伏し居る者に向ひ、惡口雜言、さも强さうな空威張り。我から負けて居る者に勝誇つて、殿下の御賞賛を被りましたが、其勝利に味を占めてか、只今此處にて、又ぞろ某に向つて刃物三味。

ケン　いやアジャックスも三舍を避くる呢きやう（トロイ戰爭の時アジャックスは味方の牛羊を敵と誤り其多數を殺しながら尙ほ其誤りを知らず大敵を敗りし由を誇りたる故事）

コー　ヤア誰かある足械を持て（ケンに向ひ）頑固爺、毫碌爺、ちと行儀を躾けて遣らす。

ケン　いや物事の稽古には、ちと齡を取過ぎた某、足械御取寄せ平に御無用。其上某は、國王殿下の御使者でムる。其御使者を足械に懸けては、第一殿下への御不敬、まつた殿下の御威德を、餘りに御輕しめなさると申すものでムりませうが。

コー　足械を持てッ、今より明日正午の刻迄、否應云はさず懸けて置け。

レガ　正午の刻まで、はて寧そ夜分迄、そして終夜打棄つて置くが宜いわいな、

ケン　これ姫君、よしや此某が、御父君の犬なりとも、其樣な御取扱は成りますまい。

レガ　いや犬にも劣る惡黨ぢやに依て、其樣に致すのぢや。

コー　これも姉君より御申越の、狼籍者に相違あるまい、早よう足械を持ていッ。

と從者共足械を運び來る

グロ　申し、某の御願てムりますこればかりは御思召留まるやう願ひ上げまする。實に此者の無禮は尤むべきてムりますれど、それは國王殿

下に於て、御詰責あらせられませう。足械の義は、下司下郎の竊盜、又は其外一通りの惡戲を、懲す爲めの道具てムりますれば、國王に於かせられても、大事の御使者が、左樣に賤しい責道具に懸けられて、其儘引留め置かれるを御覽なされたなら、よも御機嫌を損ぜぬ事はムりますまい。

コー　國王への辨解は予が致す。

レガ　姉君の御召使の御家來が、眼の前で蹈まれたり蹴られたりを見た時の、姉君の御心は、それどころてはあるまいが――サア〳〵早う懸けやいのう。

さらば我君參りませう

とケント足械に懸けらるゝ

とグロ、ケンの外一同退場

グロ　いや氣の毒な事ぢやな。公爵の御意て致方もない。一旦かうと云ひ出したら、留めても留まらぬ御氣性は人も知る通り。乍去身共より尙ほ熟と御願ひ申して見やう。

ケン　いや何卒願つて下さるな。某は終夜寢ずに歩つて參つて疲勞致した。暫時此儘休息致し、後は鼻唄て過ごしませう。いや兎角善人は運命の惡いもの、おさらば。

グロ　アヽこれは公爵が御無理ぢや。あヽ國王の思召が思ひやられる。

とグロ退場

ケン　さても國王殿下には「天國を出て日南暖」と申す諺通り、却て惡い處へ御出なされた。（此諺は其起原不詳なれども幸福より不幸に遷るを意味す）それにつけても此書面

を讀んで見たい、下界の燈火と頼む日輪が早う上ればよい。此樣な災難の時には、不思議の神助もある習ひ、何でも此書はコルデリア姫が、拙者が此樣に身を窶して、さすらふる趣を、神業て聞き出され、さて遣されたものてあらう。おヽ疲れ果てた我が兩眼、早う閉ぢよ、此有樣を見たうもない。運命の女神もおさらば、乍去最一度笑顔を此方へ向け、車を早う廻して呉りやれ。

とケン眠り入る

第三場　森林中

エッヂヤー登場

エッヂ　えヽ淺ましや此身を罪人呼ばり。幸ひ大木の罅隙に潜んて追手は

「ええ、淺ましやこの身を罪人呼ばはりする大木の
舗瞰に潜んで道手は逃れたが……」

逃れたが、何處の港へも手が廻り、何處の浦にも見張を置いて、鵜の目鷹の目此の身を捕へやうとは情ない。乍去逃れるだけは逃れう所存。又人目を眩ます爲め、貧苦にやつれた乞食共が、人間を棄てゝ獸に近い、哀れみぢめな風躰に身を窶し、芥を顏に塗り、纏縷を腰に纏ひ、髮の毛をくゞらかし、裸躰を露出して、雨風に曝さう覺悟。さては彼の、ペッレヘムの風顚院から出るといふ、麻痺れた腕に針や串、釘や刺を刺透して、たけり狂ふ、狂人の例もあれば、此身も左樣な淺ましい業躰を裝うて、あやしき賤が伏屋、貧しき村里、羊小屋、磨臼小屋と彷徨ひて、或時は狂人のすなる呪ひの聲、或時は神に捧ぐる祈禱を誦し、一椀の惠を乞ひつゝ行かむ。あゝ今よりは哀れの狂人、哀れの非人、狂人非人としてこそ生存ふれ、今迄のエッヂャーは早やこれ迄。

第四場　グロースター伯居城の前

ケント足械に懸けられしまゝ曝され居る處へ、リア、道化及紳士一人と退場

登場

リア　兩人（コーンヲール及び其妃レガン）ながら、左樣に俄かに他出致すとは不思議千萬。そして此方より差出した使者（ケント）を還さぬとは。

紳　某の承りました所では、遂昨夜迄も、御兩人ながら、御他出の御思召は、無かりしとの事でムりまする。

ケン　申し、我君々々。

リア　ヤア其方であつたか。斯樣な耻辱を見せられながら、さもたのしさ

うな其樣子。

ケン　たのしい事がムりませうや。

道　ハハア、これは酷い物を穿かせられた。馬は口で繫がれ犬と熊は頸、猿は腰、そして人間は脚で繫がられるか。それとも人間は脚が我儘になり過ぎると、かう木の襪を穿くものか。

リア　予が使者たる其方の身分にも遠慮せず、此樣な處分を致したは何者ぢや。

ケン　誰あらう、姫君御夫婦でムりまする。

リア　いや左樣ではあるまい。

ケン　いや左樣でムりまする。

リア　左樣ではなからうと申すに。

ケン　左樣でムると申しまするに。

リア　否や〳〵、彼等が斯樣な事は致すまい。

ケン　いや爲されました。

リア　誓つて左樣な事は。

ケン　誓つて左樣でムりまする。

リア　彼等が左樣な事を致さうや。彼等には致されもせず、致さうとも致すまい。醉興でもなく此樣な狼籍をひろぐならそれは殺人罪にも優る大罪さゝ成るべく手短かに、予の使者たる其方が、いかなれば斯樣な憂目を見るか、見せらるゝか。其仔細を語つて聞かせよ。

ケン　かやうでムります御聞き下され。某は我君の御書面を、殿中にて差上ました時、折つたる膝を伸すや否、ゴネリル姫よりの御使者一人、大

汗になつて息も絶々、姫よりの御傳言を述べ立てながら、某へ遠慮も致さず、持參の御書面を差上げました。然るに御兩所樣には、それを其場で御披見あり、俄かに御家來を召寄せ、大急ぎで御馬に召し、某には從いて參れ、御返書を渡すに付き、待居れと冷淡な御詞のまゝ、此處へ御任駕なさました。さて某は御詞に從ひ、丁度此處迄參りし時、彼の姫君の御使者に出遇ひましたが、其御使者故にこそ、某へ冷かな御待遇剰さへ其男は、遂昨日殿下へ御無禮を申上げた不屆奴。それかれ分別よりも血の氣の多い此某、遂一刀を引拔きました。然るに彼奴卑怯にも、高聲を立てゝ助け呼はり、遂コーンウォールの御婿君並に姫君の御目に留まり、御兩所の御捌きにて、御覽の通りの御處刑を受けまして厶りまする。

道　さて〳〵雁の飛び方が其樣では、まだ〳〵春にはなりさうもない。

（第二の姫さへ其樣な狀態にては、リアは未だ滿足すべき境遇には逢し難しとの意）

纏縷を着た父親は、
子さへ見還る眼を有たず。
財布の重い父親は、
皆な孝行な子ばつかり。
さて〳〵薄情な運の神、
貧乏人へは顏も向けず。

リア　おゝ胸にさし來るは癪病か、えゝ悲しがせき上げる、下れ〳〵。して

ケン　伯爵の居城、即ち此邸中に。

リア　其方共は從て參るてないぞ、此處に待ち居れ。

とリア退場

紳　（向ひに）其許には、眞實今云はれた通り、其上には何不調法もないのぢやな。

ケン　ないとも〳〵。したが國王殿下には、何故碌々御供も召連れず御出なされた。

道　判り切つた事を問はるゝ、それてこそ桎梏に懸けられても申分はあるまい。

ケン　とは又何故ぢや。

道　冬になれば食餌のないものぢやといふ事は、蟻に聞いても知れる事ぢや。鼻て嗅きつけて、金の香のする處へ、寄つてたかる輩はな、落魄

たと見た時には、盲人てなけりや從て居ぬ。よしや盲人ても、落魄れた臭氣の嗅ぎ分けられぬ者は、二十人に一人もあるまい。大きな車が山から轉げ始まつたら、早く手を放さぬと、一緒に落ちて頸を折られる。それとは反對に、大頭が山を上り始めたなら、確かり握まつて一緒に引摺上げて貰ふが德用乍去是は愚人の勸言利根な人からもつと善い勸言を受けたなら、これは愚拙へ還して下され。どうて愚人の勸言故、眞當な人間に、守つて貰はうとは思はぬわさ。

金が欲しさの御奉公、

外觀ばかりの忠臣は、

雨が降るとて逃仕度、

嵐になつたら隨德寺。隨德寺とは七合のるや

それでも愚人で此方や殘る。
勝手に逃げよえせ賢者、
逃げる惡徒がまことは愚人、
殘る愚人が却て善人。

ケン　其歌は何處で習つた。

道　足械の上で……おつと違つた。

リア、グロスターを伴ひ再登場

リア　何ぢや對面を拒むと申すか。病氣ぢや疲勞致した。徹夜の旅行を致したと。みな虚構ぢや、畢竟此父を邪魔者に致すのぢや。もつと善い辯解を聞いて參れ。

グロ　殿下、公爵の一徹な御氣質は、兼て御承知の通りてムりまする。一旦

かうと仰せられた事は、少しも御曲げはなさりませぬ。

リア　ちえゝ人畜生、餓鬼、地獄。一徹とは何たる氣質ぢや。コレ、グロスター、グロスター、予はコーンヲール公爵並に其妻と面談が致したい。

グロ　いかにも其通りに、某より申上げましてムりまする。

リア　申上げた、それは予が詞を確と了解致した上でか。

グロ　御意の通りにムりまする。

リア　即ちコーンヲールには、國王が面談致したい。又女レガンには、慈父が面談致したい、膝下に伺候致せと命じたのぢや。其許は此通りに申聞けたか。忌はしや一徹ぢや、一徹の公爵ぢや。其一徹な公爵奴に申せ——いや先づ此度は控えやう。眞實所勞てあるやも知れぬ。病氣故には如何なる義務をも怠る習ひ。五躰に常ならぬ所あれば、精神亦之に

伴うて、日常の自己と異なるは、人間の常ぢやに由て、予も承知致すと致さう。想へば予も一層一徹な氣質故、精神常ならぬ病人を、健やかな者と思ひ違ひ、計らず心得違ひを致した。とは申せえゝ口惜しやあれを見よ、（と傍見ながら）如何なれば彼なる者を、彼の樣に致せしぞ。此一事から推量致せば、兩人が此處への轉住は的切り計畧。サゝ、彼なる家來を還せ〳〵。其許は夫妻の者に、予が面會致したいと、改めて申して參れ。そして兩人共此處へ參り、予が申す事を聽聞致せと申聞けよ。それても聽かずば、寢所の外て大鼓を打ち、眠氣を覺して呉れると申ずが宜い。

グロ　何卒して某は、御雙方の御仲を、よしなに繕いたい所存てムります る。

リア　あゝ我が胸の中、せき來る情、緒の切なさは。おゝ此の暴れ狂ふ情、緒を鎭めたい。

とグロ退場

道　然らば殿下、生きたまゝ、鍋の中へ入れた鰻が暴廻るので、棒の端で鰻頭を叩きながら、「此畜生々々々」と、叫つたと申す厨婢のやうに、御情緒に向つて「此畜生」を仰せられては如何てムりますな。心から馬が可愛いので、藁に牛酪をつけて喰はせたと申す男は、大方右の女の兄者てムりましたらう。（馬は胥を嫌ふ、故に牛酪をつけて馬に與ふは却て馬を愛せざるの所爲に當る）

グロスター、コーンチール、レガン及び從者大勢を伴ひ登場

リア　ヤア兩人共健勝で。

コー　ようこそ御臨御下されました。

此間にケントは足板より放たるゝ

レガ　父上樣、お嬉しうムります。

リア　おゝさうてあらうレガン、さうあるべき筈ぢや。若しこれが嬉しうないなら、其許は此父の子ではない。死んだ其許が母はいかい不義者、精靈ながら離縁らねばならぬ。――（向ひに）おゝ其方も許されたな。其義については何れ後刻。コレ、いとしのレガン、聞きやれ、汝が姉は不埒者、鷲鷹にも劣らぬ不孝といふ鋭い嘴で、コレ此處を（と胸から指）刺したぞや。はて何というて話してよいやら、彼の親不孝の程合は、訖度其許もよもやと思ふてあらう。おゝコレ、レガン。

レガ　其樣に御立腹遊ばしますな。それには大方、父上樣の御勘違ひもムりませう。姉上の御心得違ひばかりでもムりますまい。

リア　ハテそれはどういふ譯ぢや。

レガ　姉上がいさゝかなりとも、親不孝を遊ばさうとは思はれませぬ。それは大方御扈從の武官の放縱を、御制へなされただけでムりませう。若し左樣ならば、御尤な御計らひ、彼是申上げる缺點はムりますまい。

リア　いや〳〵憎きは彼奴が擧動。

レガ　おゝこれ父上樣、貴君は最早御年の上、人の世の旅路の果を辿る御身。其御身に關はる事は、御自分の御目よりも、もッと目端のきく、若い眼に御任せなされて、差圖を御受けなされたが宜しうムりまする。それ故妾の御願ひ、これから姉上の御許へ御引還し遊ばして、何卒御詫を仰有りませ。

リア　何ぢや詫を致せ、然らば其許は此父に、コレ見よ此樣に致せと申す

かゝいとしの女、此身は老耄致した兎角老人は厄介者ぢやに由て、かう膝を折つて（なと縋づき）御願ひ申す、どうぞ衣服と寢床と、食物を與へて下され。

レガ　およしなされ父上、見ともない御惡戯、姉上の御許へ御還りなされませ。

リア　（起上りながら）いや還らぬぞレガン、予が從者の半數を減じ、予に向て澁面作り、毒蛇のやうな舌を以て、予が胸を刺した彼奴、あの恩知らぬ素頭の上に、降りかゝる天火はないか、あの胎内の子種をば、不具に仕立てる毒氣はないか。

コー　淺ましい其御詞。

リア　あの憎躰な眼をば電の火て潰してくれたい。濕地から立つ蒸發氣の毒て、あの美しい顏を醜くして、高慢ちきが挫いて呉れたい。

レガ　おゝ恐ろしや、御氣に召さぬ事さへあれば、此妾にも其呪文を、仰せられる事てムりませう、

リア　いゝやレガン、其許には此樣な事申しはせぬ、優しい其許の性質、よも姉の樣な不孝は致すまい、彼奴の眼付の恐ろしさに比ぶれば、穩やかな其許が眼は、見るも心の清々しい、父を勞はる手段を惜み、又は從者の數を減し、返し言を申したり、飲食を約めたり、擧句の果に、門前拂を致すなどは、其許にはえう致されまい、其許は自然の人情、親子の愛、式作法、報恩など申す事を、よつく承知致して居る、其許が領國の半分は、此父が與へし事を、よも忘れは致すまい。

レガ　父上、其樣な事は、仰有らずともてムりませう。

リア　フム、然らば予が使者を、足械に懸けたは何者ぢや。

と此時奥にて喇叭の音聞ゆる

コー　あの喇叭は。

レガ　あれは慥かに、姉上が御來臨の喇叭。先刻の御文にも、間もなく御來臨の由御申越てムりました。

オスワルド登場

姉君には御來臨なされたか。

リア　ヤア此奴こそ彼の無禮者。主と頼む婦人奴の機嫌氣褄に氣を揉みながら、虎の威を借る狐男、えゝ目通りを下れ〳〵。

コー　何を仰せられまする、殿下。

リア　コレ、予が家來を足械に懸けたは、何者ぢや。こりや、レガン、さすが其

許は此事に、預り知りは致すまいな――イヤ誰か參つた樣子。

ゴチリル登場

ヤア彼奴ぢや――（向ひレガに）コレ其許は老人を愛しう思ひ、又自ら國を治むるにつけても、從順と申すは嬉しいものと知り。又汝とても、次第に老の阪に近寄る事を思うたなら、此父に味方を致し、此父を扶けて呉りやれ。――（向ひゴチに）ヤア汝は何の面下げて此鬚を見に參つた。――おゝレガン、其許はよもや其奴の手を握らうとは致すまい。

ゴチ　何故此手を握つては惡うムりまする。此妾が何の樣な御無禮を致しました。御老人の癖み心に、無禮々々と仰せらるゝは、餘り當にはならぬもの。

リア　えゝ此胸の裂けぬが不思議、まだこれでも裂けぬか〳〵。えゝ何故

予が家來を足械に懸けおつた。

コー　それは此某が所業でムりまする。乍去彼が亂暴狼籍、これでもまだ分に過ぎる程の待遇でムりまする。

リア　何と、足械に懸けたは其許ぢやと。

レガ　コレ申し父上、老人は老人らしうなさるもの。こゝは一先づ姉上の御許へ御還りなさ、れ、御約束の一月の終まで、御逗留遊ばされ、御供を半分御減しなされ、さて其れから妾方へ、改めて御臨御遊ばしまし。何を申すも此處は出先。御馳走に要用な、品物とてもムりませぬ。

リア　何ぢや姉の許へ還れ。供人を半分減せ。否其樣な事を致すよりは、いかなる屋根の下へも入らず、風雨暑寒に曝されて、狼や梟を朋輩に、野伏となるがまだしもぢや。姉の許へ還れ。えゝそれこそ彼の乙娘を、身

躰ばかり引取つた、執拗者の佛蘭王の前へ膝をつき、何卒御扶持を下されて、此身の短い餘命を續けさせ下されと、頼めといふにも同じ事。何ぢや姉の許へ。寧そ此下司奴（トなぶりして）が、馬の口取にでもなれと勸めるがよい。

ゴネ　それはどうても御好み次第。

リア　コレ女（ゴネに向いふ）何卒予を狂人に致して呉れるな。最早汝の世話にはならぬ。サア是が永の暇、最早二度とは逢ふまいぞ、行きやれッ。とはいふものゝ、それでも予が一身を分けた血肉ぢやな、女ぢやないや予が肉中に潜む病毒ぢや、敗血の中の膿物ぢや、瘡ぢや癰ぢや。此上は汝を叱りは致さぬ、如何なる辱めも來らば來れ、たゞ我からは招かぬ所存。如何なる霹靂の矢も、汝が頭上に落ちよとは願ふまい。又は在天の

ジョブ神に、汝が罪狀を白しも致さぬ。機會があつたら改むるがよい、暇があつたら善人になる工夫を致せ。此父は胸に納めて堪えて居やうぞ。そしてレガンの許に逗留致す、百人の武士共は其儘て。

レガ　そりやなりませぬ父上。まだ御臨御のあらうとは、思ひもかけぬ事てムりますに、然るべき御歡迎の用意もムりませぬ。どうぞ姉上の仰せを御聞なされ。其御一徹な御心を、お揉め申さうと致すには、御年の上をも、斟酌致さねばならぬ筈、それ故――いや〳〵妾の申す迄もなく、姉上には何事も御承知てなさる事。

リア　してそれは本氣て申すか。

レガ　本氣の段ではムりませぬ。五十人の御供人、それて澤山ではムりませぬか、其上に何御用、大勢抱いて置きますれば、費用も多い上、危險い

事てムります。と申すは同一殿中に、二人の主がありながら、雙方の家來が餘り大勢ムりましてはどうして無事に過せませう。覺束ない事てムります、思ひも寄らぬ事てムりませう。

ゴネ　又何故父上には、レガン殿の召使はるゝ家來共、又は此妾の家來共を侍從として、それて御滿足なされぬのてムります。

レガ　ほんに何故てムります父上。其樣に致して置いて、若し家來共に等閑な擧動があつたなら、其時妾共にて、其處分を致しませう。此妾に於ては、只今申した危險い事が、どうやら眼の前に有りさうに思ひますれば、若し父上妾方に御臨御の砌は、五十人を其又半分に、減して戴かう所存てムります。それよりも多くては、どうも御受は致されませぬ。

リア　ヤイ〳〵此父は、あらゆる所領を汝等に讓り――

レガ　ほんに善い時に御譲りなされました。

リア　汝等を以て予が後見とも代人とも致して、一切の政治を托け、此身自身は、百人の武士を召抱ゆべき約束なりしに、何ぞや、二十五人に減さねば、汝の館へは入れぬと申すか。レガン確と左様か。

レガ　幾度申しても其通りてムります。それ以上ては此妾は。

リア　えゝ如何な悪黨ても、夫よりも上手が出れば、少しは見直されるものぢやなア。一枚上がある中は、幾何か頼もしい處がある、（向ひゴネリに）よし〳〵予は其許の許へ參る。其許が五十人は、妹奴が二十五人の丁度二倍。大方父への志も、其通り二倍であらう。

ゴネ　申し父上、乍去二十五人は愚か、十人が五人ても、御從れ遊ばすには及びますまい。何れへ御來臨遊ばさうと、五十人百人の侍士は、御側に侍けて置かぬ事はムりませぬ。

レガ　ほんに左樣てムりますとも。

リア　及ぶ及ばぬの理屈聞きたうない。いかやうな貧乏人ても、夫相應の贅澤はあるものぢや。たゞ必要を充すのみなら、人間の一生も安價いものぢや。汝等婦人の衣裳を見よ、寒さを凌ぐばかりが能ならば、暖かさの足しにはなりもせぬ、華美な粧ひ要らぬ事。あゝさりながら此身にも、眞實必要な物があるわい——おゝ諸天諸神冀くは、忍耐の力を得させ給へ、忍耐の力に入用がムる。積もる齡と哀みに老朽ちた此有樣、おゝ哀れとも見そなはせ諸天諸神。とは申せ、女等の心を惑はして、不孝の子となしたるも、即ち天意神意ならば、願はくば此父をも、只管子に甘き、たわいなしには致して下されな。胸に憤怒の火を點し、婦人

の武器の涙を以て、此兩頬を汚すやうな、不覺を致させて下さるな――否々汝不孝者共、よつく聞け（兩人に向ひ）此返報には世間の者共――如何やうな手段とは未だ思ひ決めねど、世間も戰ひ顫くやうな、辛き酷き目を見せて呉れうず。コレ此父を泣くと思ふか、此父は泣きは致さぬ、泣いても足りぬ悲みはあれど此胸が木葉微塵幾百千の細片となつて裂けるまでは、泣かぬ〳〵。――おゝ坊主予は狂氣致すばかりぢや。

（とリア、グロスター、ケント及び道化退場）

コー　然らば我等も歸館と致さう、一暴風雨ありさうな空合ぢや。

（と暴風雨の遠音聞ゆる）

レガ　此の館は手狹ぢや程に、どうて父上と御供の者の、御待遇は碌々致されまい。

ゴチ　御自分で招いだ災、われから難儀をお求めなさると申すもの、何れ御心得違の、辛い味を御嘗めなさるてあらうわいの。

レガ　父上御一人ならば、喜んで御宿も申しませうが、一人なりとも御供の者は。

ゴチ　妾とても其通り――アノ、グロスター殿は何處にぢや。

コー　グロスターには御老君の御供を致して參つた樣子。いや、其處へ還つて參つた。

（グロスター再登場）

グロ　國王殿下には一方ならぬ御不機嫌。

コー　して何處へ御出なされる。

グロ　御馬を御召しなされましたが、御出の程は何處へやら某も存じませぬ。

コー　其まゝに棄てゝ置くが上分別、何事も御意の儘に爲される事。

ゴチ　決して留立せぬが宜い。

グロ　さて〳〵眞暗にはなつて參る、風はざは〳〵と物凄い彼の響き。これから三四里四方の中には、立寄るべき籔蔭もあるまい。

レガ　おゝさうでもあらうが、彼の樣に我慢強い人々には、其我慢故の難行が結句修業、戸締りをよく爲されませ。向ふ見ずの從者に圍まれて、何事も彼等のいふがまゝに遊ばす父上、どのやうに煽動られ、どのやうな事を爲さらうも知れぬ程に、用心を召さるが宜い。

コー　實に戸締りを致されい。物凄い晩ではある、レガンのいふは尤も尤

もいさ〳〵暴風雨の來ぬ中に、參ると致さう。

と一同退場

第三幕

第一場　荒野

雷鳴電閃の暴風雨、ケント及び一紳士登場、兩人此處にて邂逅したる體

ケン　暴風雨と共に、其處を行くは何者ぢや。

紳　いや此空合同樣、心も亂れむ斗りの者。

ケン　貴方樣てムりましたか、さて國王殿下には、何處に入らせられまするな。

紳　此暴風雨を物ともせず、風よ吹け〳〵、大地を大海へ吹き落とせ、さらずば大浪を吹遣し、此大地を一新せよとの御高言。暴れ狂ふ嵐が、遠

慮容赦もあらけなく、弄り亂す彼の白い御髪を、我と我が手に掻きむしり、御胸の中の天地に、かき亂るゝ想ひの暴風雨を、紛らさうと遊ばされる。仔引の牝熊も恐れ潜み、獅子や飢ゑたる狼も、濕れるを厭ふ此夜蔭に、冠り物も召さず走り狂ひ、どうてもなれとの御擧動。

ケン　して御供の者には。

紳　たつた一人の道化ばかり、かき亂れた御心を、輕口て紛らさうと彼が苦心。

ケン　フム、さて卒爾ながら、僕は貴方樣の御心中を承知致しまする。夫故今一大事を、御打明け申しませう。御聞き下され、まだ雙方巧みに色には顯はさねど、アルバニー、コーンウォール兩公の間には、既に御不和がムりまする。然るに兩公とも、王公の位に備はる果報者の數に漏れず、

家臣の中に、密かに佛蘭西王に通ずる者あり。間者となつて、我國情を内偵し、兩公が御中の一擧一動、如何なる和不和の有りや無しや、老王殿下に對し奉りては、心を協せて非道の御待遇を爲し奉りたる一伍一什、さてはかゝる瑣々たる小事の後ろに、潛み隱れる深き意を、見聞のまゝに内報致せし樣子。さもあらばあれ佛蘭西にては、此地へ軍兵を差し送り、我が國人の怠慢に乘じて、既に我が良港と聞えたる、さる土地に上陸し、今や、威武堂々と軍旗を飜さむ所存の由。さてこゝに御願ひ申したき一事と申すは、此僕の詞を御用ひあつて、急ぎドーバーの港へ御下向下さりませい。然らば必定、其處にてさる御ゝ方に、御邂逅なされませう。さて其御ゝ方に、國王殿下が淺ましき御有樣の、因由因緣を聞え上げうならば、吃度御喜びなさるでムりませう。かく申す某は

決して怪しき者ならず、由緒正しき身分の者。さる方より確かな報道を受けたる上、かやうな御依頼も致しまする。

紳　もう少々精しい話が承りたい。

ケン　いやそれは御無用。此某は、見懸よりは少々高い身分の者、疑はしく思召さば、此なる紙入を御開けなされ、中なる品物（即ち指環）を御持參あれ。さて彼處にて、コルデリア姫に御逢ひなさらば――吃度御逢ひなされまする――此指環を御覽に入れられませ。然らば此某が、何人と申す事は、姫より御說明あるでムりませう。おゝ生憎の此暴風雨、某はこれより、國王殿下を御尋ね申しまする。

紳　然らば御手を、（と握手しながら）して最早何も言はるゝ事は。

ケン　たつた一言。但し何よりも大切な、と申すは外でもない、某は此方の

道を參りまする、御貴殿は其方の道を御出なされ、さて眞先に殿下の御委を認めた者が、聲を懸けて、知らせる事に致さうてはムりませぬか。

と兩人別々に退場

第二場　荒野の別方面

暴風雨未だ止まざる體、リア及道化登場

リア　吹け〳〵風、風袋も裂けるまで、降れ〳〵雨、瀧か川てもぶち撒ける樣な大水に、屋棟の塔も、塔の風信子も漬るまて、巖つん裂く霹靂の前驅と、迅速き電の火も落ちかゝり、此白髮首を燒き焦せ、天地を震ふ鳴る神は、此大地を打ちみしやぎ、萬物を造り成す、造化の鑄型を打碎き、取分け恩義を知らぬ惡人の、あらゆる種子を絕滅して了へ。

道　おゝ賴む御方、野中の雨に濕れるよりも、家の中て涙の雨に呉れるが優てムりませう。申し我君、御還りなされて、姫君達の御世話を御受けなされませ。此眞暗闇は誰彼の差別もなく、遠慮容赦のない因業者てムりまする。

リア　堪能する程唸れ雷霆、閃け電光、注げ雨、風雨雷電は我女てはない汝等に國を與へた覺えはない、我子と呼んだ事もない、何一つ恩を被せた例もなければ如何程此身を苦めうと、不孝者恩知らずと責めは致さぬ。此哀れな、か弱い、はかない、棄てられた老骨を、此處に曝け出して、汝等の弄ぶがまゝに、任せるぞよ。乍去汝等も彼の淺ましい二人の女に力を合せて、其恐ろしい責道具を、此白髮頭に差向くるとは、さて

さて淺はかな事ぢや、卑怯千萬。

道　イヤ、頭を入れる家のある者は、善い兜を有つと申すもの故、如何なる責道具も怖くはない。

胸と踵を穿き違ひ、
胸をか弱く踵を硬く
持てば蹈み出す底まめに
寢られぬ夜半もあると聞く

イヤ女と申すは如何な美女でも、鏡臺の前で澁面苦面、顏付の稽固をせぬ者はムりませぬ

リア　いや予は何事も勘忍する。勘忍の模範となつて、何も云はぬ。

ケントト登場

ケン　何誰ぢや。

道　主從二人、賢愚兩人。

ケン　さて〳〵此處に御在なされましたか。闇を愛する獸類なりとも、此樣な夜は愛しませぬ。夜出て歩く怪物も、此暴風雨に恐れをなし、洞穴深く潜みまする。某も物心附いて以來、此樣な電光、雷霆、此樣な雨風の凄まじい響を、聞いた覺えはムりませぬ。いや人間力には堪へ切れぬ恐ろしさ、物凄さてムりまする。

リア　えゝ彼の天上に、雷霆を轟かす諸〻の神達も、今こそ諸の罪人を懲らしめ給へ。胸に罪業を疊んで、正義の撻を逃るゝ輩は震ひおのゝけ。血に汚れ、神を欺き、惡を善に佯る族は潛み隱れよ。巧みに表面を粧うて、何喰はぬ氣の顏をしながら、人の命を狙ふ奴輩は、戰ひ戰うて戰ひ崩

れよ。其外あらゆる隱れ潛める罪人原、汝が胸の秘密を擲げ出して、風雨雷霆の牛頭馬頭が哀れを乞へ。それにつけても此身には、犯しゝ罪業はあらねども、受けたる罪業は數知れず。

ケン　おゝ御冠物も召させられず。殿下、此近處に一軒の賤が屋がムりまする。此雨風を御凌ぎある爲め、一夜の宿を御借りなされては如何でムります。――暫く此處に御待ちなされませ。僕は其情知らずの家主奴を說伏せて、御宿を承知致させて參りまする。今も今とて御行衛を尋ねながら、立寄りましたに、けんもほろゝの挨拶を致しました、實に其小舍の礎の石よりも冷やかな人心。

リア　どうやら心がぐらつき出した。コレ坊主、其方は如何致した。寒いか予も寒いぞ。して其草の舍は何處ぢや。時と場合は不思議なもの、日來は用もない物が至て貴くなるものぢや。いざ其賤が屋に案內致せ。あゝ其方達に對しては、まだ心苦しう覺ゆる心があるぞよ。

道　唄「心だにあらば雨降れ風も吹け、身に合せてぞ諦らむる、

霽れる日もなく降るとても。

リア　實にさうぢや、さらばいざ其賤が屋へ案內致せ。

（とりあ、ケン退場）

道　イヤ、いたづら者を懲らしめるには、此樣な善い晩はない。どりや參る前に、一つ愚拙が此國の未來記といふものを讀んで置かう。

僧侶說敎實の無い事を喋べる時、酒屋酵母へ水を差す時、仕立屋大名を師匠に取る時、邪宗門炮烙に遇はず、好色の徒身を焦す時、訴訟

事何方も正しい時、武士借金を返し、公卿貧乏を逃れる時、誹謗舌端に上らぬ時、掏兒人込へ這入らぬ時、客嗇者野天で金を數へる時、娼妓女街と寺院建立の時、爾時英吉利の國家大に亂れて混沌とならむ。爾時生れ合せた人は、行くに脚を以てするの時世とならむ。あなかしこ

いや此未來記は後世マーリン（リアの時代以後アーサー王物語時代の豫言者）の口から云はせやう。かく申す愚拙は、マーリンよりも古いぞ〳〵。

と道退場

第三場　グロスター居城内の一室

グロスター、エドマンド登場

グロ　ヤレ〳〵エドマンド、拙者は此樣な不義不孝が大嫌ぢや。國王殿下の御取持は拙者に御任せ下されと申した時、方々には（公爵等）此館を拙者の手から取上げて置いて、最早殿下の御噂もするな。御取なしも致すな、又は何なりと殿下の御爲めを圖るなとの命令、若し背いたら、一生御機嫌を損ねさうな御口うら。

エド　實に不義不孝の御擧動。

グロ　コレサ、何にも云ふな。兩公爵は御仲違ひ。それさへあるに、一大事が出來致したと申すは今夜さる方より密書到來、其赴は口に出すも危嶮。故、ちやんと戸棚へ閉め込んだが、殿下御虐待の報は覿面、今の間にうんと讐を取られうぞ。コレ外の軍勢が既に此地へ乘込んだぞよ。此上は殿下の御味方を致さねばならぬ。拙者はこれから殿下の御行衛

を尋ねて、密かに御介抱を致す故、汝は公爵の御前へ出て、御相手を致し、拙者の此所業を悟られぬやうに致して呉りやれ。若し拙者は如何致したと御尋ねなされたなら、加減が悪うて臥つたと御答へしや。若し露はれたら殺されうも知れぬけれど、故の主君の殿下をば、御助け申さにやおかれぬわ。コリャひよんな事が持上がらうぞ、エドマンド、何卒氣をつけて呉りやれ。

とゲロ退場

エド　いや其殿下への忠義立、これから早速公爵へ知らせて來る。其密書とやらも打明ける。これは善い御奉公、その報酬には此拙者が、老父を逐出して其後式を引受ける上、何ぞ其上に褒美があらう。年寄が引込めば若い者が世に出るわさ、

と退場

第四場　荒野　賤が屋の前

リア、ケント及び道化登場

ケン　殿下、此家てムります。いざ御入りなされませ、野天の夜嵐の酷たらしさ。人間の身に堪へ切れるものてはムりませぬ。

暴風雨未だ止まざる体

リア　構はずに措いて呉りやれ。

ケン　殿下何卒御入りなされ。

リア　此胸が張り裂けさうぢや。

ケン　いや寧そ某の胸て御身代りを致したらムります。いざ御入りなさ

れませ。

リア　其方は此暴風雨が、皮膚の中まで沁みると思ふか。其方の身にはさうもあらう。乍去大きい悲みのある所には、小さい悲みは入らぬものぢや。熊に遇ふたら逃げもせう、行手を大海に塞がれたら、熊の口へ飛付かう。身躰を厭ふは胸に屈托のない時、我が心中の暴風雨に、打つは動悸の波ばかり、其外には何事も感ぜぬ此身ぢや。えゝ不孝者、食物を運ぶ此手を、此口で噛むやうな恩知らず奴。乍去最早泣かぬ。思入復讐を致して遣らすても此樣な夜に父を閉出すとは。降れ〳〵いくらでも、予は辛抱致す。えゝさても此樣な夜におゝレガン、ゴチリル、領國を擧げて讓りたる、大恩の老親は――おゝそれを思へば、心も物狂ほしくなつて參る。えゝ思ふまい〳〵、最早思ふ事ではない。

ケント　殿下、何卒御入りなされませ。

リア　其方こそ勝手に入るがよい。そして安樂に過すがよい。此暴風雨を棄てゝおいて、もつと激しい胸の嵐に、此身をさらしたらも思はぬ。とは申せ這入つて見やう。（と道化に向ひ）汝も這入れ。先づ參れ。おゝ入るに家なき赤貧の徒――いや這入れと申すに。予は先づ祈禱を致して、それから寢むと致さう。

（と道化這入る）

繦ふに衣なき不幸の輩、何處の浦里にて、此の情無き夜嵐に曝されて、素頭に飢ゑたる腹、荒布の如き襤褸衣服、それで此雨風をどう過ごし居る事ぞ。おゝ此身世に在る時、彼等を等閑に致したが今更殘念。驕れる者よ、身の藥と觀念して、此雨風に打たれ曝され、貧者の苦艱を嘗め

て見よ。さて汝等が財寶を、彼等にも施し與へて、天道の正しきを世に示せ

エッヂア（家の中にて）一尋半ぢや、一尋半ぢや。さても哀れの狂人。

と道化小舍の中より走り出づる

道　我君々々、此家へ御入り御無用。怪物が居りまする、お助け〳〵。

ケン　サヽ御手を取りませう。コレ誰ぢや。

道　怪物々々、自分から狂人ぢやと云うて居る。

ケン　（小舍の中に向て）ヤア其處に唸つて居るは何者ぢや。出てうせう。

エッ　往ね〳〵、惡魔が已を尾け廻すわ——棘の原を風が吹く。フヽム冷たい寝所で暖まれ

とエッヂヤー、狂人の寶し委にて出來る

「アヽ」ヤア其方も二人の女に家藏を讓つて了つて
それで其樣になりやつたか」
「エッ」狂人に何ぞ物を下されい」

リア　ヤア、其方も二人の女に、家藏を讓つて了つて、それで其樣になりやつたか。

エッ　狂人に何ぞ物を下されい。惡魔に引かれて火の中、焰の中、淺瀨、渦卷沼越え澤越え苦勞する。枕の下には劍を置き、梁には縊繩を懸け、椀の中へは毒を入れ、暴馬を乘り廻して、丸木橋を渡らせ、自分の影見て狼藉者と追懸ける。是もみんな惡魔の業。いや方々は正氣でお芽出度う。己や寒い、おゝ寒、おゝ寒ぶる〳〵〳〵。星の祟り旋風、惡い毒氣に觸れぬやうに祈ります。申し惡魔に憑かれる物狂に、何なりと御報謝御報謝。ヤア此處へ來た、捕へて遣れ。（惡魔が彼の目には見ゆるこなし）ヤア其處だ、又此處へ來た、それ其處だ。

リア　さて〳〵此奴も女故にかうなつたか、コレ其方は何ぞ殘して置いたか。悉皆遣はして了つたか。

道　ハテ毛布一枚が殘してあるではムりませぬか。あれが無かつたら、ほゝ丸出し〳〵。（毛布一枚を腰の周圍に纏て居る故なり）

リア　えゝ大千世界のあらゆる神罰を、悉皆此奴が女に降して遣りたい。

ケン　此奴に女はムりますまい、

リア　ヤイ〳〵、不孝娘を有つた因果故でなうて、何て此樣な風躰にならうぞい。さて〳〵子に棄てられた父と申すは、みんな斯樣に我が肉躰を、原野に曝して厭はぬものかおゝ此肉躰こそ不孝娘の親なるに、えゝ天罰を降して呉れたい。

道　今夜の此寒さでは、誰も愚人か狂人に、ならずには居られませぬ。

エッ　惡魔を御用心々々。親には從へ、約束は違ふな、誓言は禁物、他人の女房にや手を出すな。華美な衣裳に眼を奪はれな、己れや寒い。

リア　其方は何者の成れの果ぢや。

エッ　元と拙者は侍士で威張つたもの。毛を縮らして、帽子に女の手袋を挿み。（女の手袋は女より愛情の紀念として送るもの）萬事女の氣に入るやうにと氣を揉んで、隨分面白おかしい遊びもし。神樣を遠慮もなう引出しての誓詞呼はり。寢る時は道樂の工夫、起ればそれを試してみる。酒好き、骰子好き、女好きでは土耳其の王樣も其方退け。性惡、移り氣、薄情で、豚のやうに怠け。狐のやうに狡猾く、狼のやうに貪慾で、猛々しさは犬の樣、酷たらしさは獅子のやう。ハテ優しい靴のきしむ音、裳の絹のさやぐ音で、女に心を銷かされぬ用心召され。茶屋小屋へは足を入れぬ事。女の袂へは

手を入れぬがよし。質屋の帳面へは筆をつけぬやう。そして惡魔には憑かれぬ算段。棘の原にはまだ風が吹く。ひゆう〳〵と鳴るわ響くわ。ヘイ、ノンニー。コレ〳〵悴、逃がして遣はせ。

暴風雨尚ほ止まざる林

リア　さて〳〵其方は、其裸體を此吹降に曝して難澁せうより、早う墓の中へ逃げ込んだが幸福であらうに。あゝ人間とはかやうなものか。よく〳〵想ひ廻らすに、其方は蚕の虫の世話にもならず、獸に皮、羊に毛、猫（麝香の意）に麝香の恩惠も受けぬな。然るに我等三人は、かやうな物を纏ひ居るは、是ぞ皆な虚僞。其方こそ露飾り氣なき人間の正體。げに生れながらの人間は、其方同樣、身に一糸をも纏はず、二本の脚で歩む、哀れげの動物であらう。えゝ此樣な借物（己が衣服をいふ）棄てた〳〵。コレ此紐

を解いて呉りやれ。

道化　何卒我君暫く〳〵。水練には不向な今夜でムります。ハテ野中の燈火は浮氣な老人の胸の中といふもので、躰體中は冷めたいに、たつた一つほてる點があるやうなものでムりますな。御覽あれそれ其處へ火影が歩つて參りました。

とグロスター松明を持ち登場

エッ　ヤア〳〵此奴が惡魔ぢや。暮合から一番雞の鳴くまで彷徨いて、人の眼を内障眼にしたり、偏視にしたり、兎缺の唇を拵へたり、麥の穗を枯したり、其外地上の虫に傷害を與ける。

魔王が三度野を過ぎて夢を襲

とリアに己が衣裳を引裂くこなし

ふと聞く鬼女が、九人の子を引き行く所を、ヤレコレ待てと呼留めて、以後惡戯ならぬぞよ、志かと聽いたか失せよ〳〵。

ケン　如何なされました我君。

リア　今參つたは何者ぢや。

ケン　誰ぢや、何用あつて其方は。

グロ　イヤ其處に居らるゝは何人ぢや。名乘りめされ。

エッ　名は物狂、蛙や蟾蜍、蜥蜴や、守宮、蠑螈を取つて食ひ、惡魔が暴れて心の狂ふ時は、牛の糞を寵物にし、古鼠や犬の屍骸も好下物、行潦に生えた青苔を飲みもする。里から里へとたゝき拂はれ、械にも懸けられ、牢

の中へも押籠められ、身を掩ふ衣服はたつた三枚、肌に着る繻袢が六枚。

唄「お馬でしやん〳〵太刀劍
それて御扶持に鼠、小鼠、小獸
七年命をつうないだ。

憑物御用心、えゝ惡魔め靜かにしやれ。

グロ　何と、これは殿下、然るべき御從者も召させられず。

エッ　いやさ惡魔は闇の王でお人柄、そして色々の御名がある。

グロ　血肉を分けた我が子さへ、親をないがしろに致す、僥季の世の中てムりまする。

エッ　おゝ寒、己や寒い。

グロ　先づ〳〵某と共に御出でなされ。姫君方の酷い仰に、從つてばかりは居られぬ某。殿下に向つて門を閉ぢ奉り、此物凄い闇の中へ、御放し申せとの命でムれど、密かに御行先を尋ねまゐらせ、火の氣もあり、進らする物もある處へ、御案内申上げう爲め。わざ〳〵かく罷出ましてムりまする。

リア　いや先づ、此悟道徹底の非人奴と、一問答致してからの事と致さう。さて天雷霆を下す其理由は。

ケン　殿下、何卒グロスター殿の御詞に從ひ、御出なされるが宜しうムりまする。

リア　いや〳〵予は此大學者と少々問答が致したい。コレ其方が心に懸くる學問は何ぢや。

エッ　惡魔を拂ひ惡虫を除く學問ぢや。

リア　ホヽー予は内密にて、一言其方に承りたい事がある。

ケン　モシ其許樣（指すグロを）には最一度御勸め申して下され。どうやら御逆上の氣味でムりまする。

グロ　それに少しも御無理があらうか。姫君達は殿下を亡き者にせうとの御目算（暴風雨尚ほ吹き荒るゝ林）あゝ夫に就けても、あのケントは、かういふ事になるであらうと云はれたが、今は追放の身の上、不憫な事ぢや。ハテ其方は殿下御逆上の氣味と云やるが、コレ聞け、逆上は殿下ばかりか、此身も同樣ぢや、と申すは拙者の悴、今は勘當致したが、遂此程、此父の命を狙ひ居つた。それも又と世に例がない程愛した悴。眞實を申せば、拙者も其の悲嘆で、逆上致して居る。おゝ今夜は何たる夜ぢや。申し殿下、何

卒――

リア　おゝ慈悲ぢや程にコレ大學者、談話が聞きたい。

エッ　おゝ寒、己や寒い。

グロ　ヤイ汝は此小舍の中へ入つて勝手に暖もれヤイ。

リア　いざ、然らば一同入ると致さう。

ケン　から御出なされませい。

リア　いや、予は彼の大學者と一緒に行く。

ケン　其許樣より御なだめ申して、そして其奴をも、お連れ遊ばすやうに申上げて下さりませ。

グロ　然らば其方は、其者を連れて先へ參れ。

ケン　サア來い、汝も一緒に連れて行かう（と伴ひゆく）

リア　コレ大學者。

グロ　申し、御靜かに、しいッ。

エッ　呪「武者修業者が來て見れば
小暗き塔の中よりぞ、ハテ、
けしからぬ英吉利の、人の
血の香がきこゆるは」　と一退場

第五場　グロスター居城内の一室

コーンヲール及エドマンド登場

コー　いや此家を立ち退かぬ中、屹度復讐は致して呉れる。

エド　君への忠義故に、父への孝道を欠く某が擧動を、定めて世間は、彼是申すでムらうと思ひますれば、何か心懸りてムりまする。

コー　今こそ知る其方の兄者が、父の命を狙ひしも、全く兄者が惡いばかりでもなささうな、畢竟父にも惡しき點のあればこそ、左樣な親不孝も致すのぢや。

エド　正道を行ひながら、かやうな悲しい思ひを致すとは、何たる不運の此某。此が即ち父の申した密書でムりまする。取りも直さず佛蘭の犬なる證據。おゝ此樣な叛逆三昧、企むで呉れなんだら――せめて此某が訴人の役を勸めなんだらと、口惜しうムりまする。

コー　一緒に參れ、夫人に此事を話して參る。

エド　イヤ此密書の赴が事實なら、少しも猶豫はならぬ一大事でムりまする。

コー　事實であらうとなからうと、今よりグロスター伯爵の位は其方に遣す。此上は父の在所を尋ね出して申出てよ、此方より召捕らうぞ。

エド　（傍白）うまい〳〵。國王殿下の御側に侍つて居る所を、見つけ出して報知せれば、公爵の嫌疑は深まるばかり。父子の情合、少々心苦しうないでもないが、こゝは一つ何處迄も、公への忠勤を勵むと致さう。

コー　返す〳〵も其方は、予が重く用ひて遣すぞ。及ばずながら此上は、予を父と思うて呉りやれ。

と二人退場

第六場　グロスター居城附近の農家に

於ける一室

ゲロスター、リア、ケント、道化及エッヂャー登場

ゲロ　これでも野天には優てムりませう。何卒力めて御寛ろぎ遊ばしませ。某はこれより參つて、御待遇の品物を、何くれと精々求めて參りまする。乍去間もなく戻つて參りまする。

ケン　御憤激の餘り、何うやら御心も亂れた御樣子。いや其許樣の御親切、嬉しい事てムります。

とゲロス退場

エッ　夜叉が己を呼んで話すには、羅馬のテロー皇帝は、地獄の池の釣師ぢやげな。コレ道化殿、惡魔を御用心〳〵。

道　申し我君、狂人と申すは、公卿か武士か、御存じてムりませうな。

リア　いや狂人は帝王ぢや〳〵。

道　いや公卿を、子に有つ武士てムります。ハテ我子を公卿と見る狂人武士と申す諺があるてはムりませぬか。

リア　えゝ千人の鬼共に、眞赤に燒けた金串を持つて、彼女奴等をさいなませて呉れたいわい。

エッ　惡魔が己の背を嚙むわ。

道　狼の口と馬の蹄、子息の孝行と傾城の誓文を、安心と思ふ者は即ち狂人。

リア　いや致して見やう。早速彼等を召喚せ。(向ひエッヂャに)コレ其方は此處へ坐つて、判官を務めて呉りやれ(向ひ道に)又其方は此處へ坐つて相談役。さて此上は雌狐奴等、罷出ろ。

エッ　彼を見や、惡魔が眼を光らせて立つて居る。コレ夫人達御吟味を見て貰いたいか。

唄「來やれ情人川越えて來やれ——

道　唄「舟が漏るので行きたいけれど
行くにや行かれず、いふにやいはれぬ身の難儀。

エッ　惡魔が鶯の聲をして、此己に憑き纏ふわ、生鯖を二匹呉れいと腹の中で鳴いて居る。コレ〳〵惡魔殿、鳴くな〳〵、汝に遣る食物は一つもない。

ケン　殿下如何なされました、其樣に呆れて御立ちなさらずとも、御腰を下して、此布團に御休みなされませ。

リア　先づ吟味を見てからの事ぢや。さゝ證人を召喚せ。（エッに）御吟味役には先づ御席に着かせられい（道化に）相談役の其方も其御側へ（ケンに）其方も役人の數には漏れぬ、其處へ坐れ。

エッ　間違いのない處分を致さう。

唄「麥畑の中に羊は遊ぶぞや、
寢てか覺めてか羊飼、
小さい口で笛吹いたとて、
羊に障害もあるまいが、

にやん〳〵、猫は灰毛ぢや。

リア　先づゴチリルを吟味致さう。誓言を以て申上げます。それなる婦人は、頼み少ない父王を、足蹴に致した不屈者でムりまする。

道　進みめされい、婦人。其方が名はゴヲリルと申すか。

リア　夫に相違のあらうや。

リア　さて次に後一人、あの意地悪さうな顔を見ても、心の程が察せらるゝ。や、逃げるか、彼女を停めい、それ武器はないか。それ劍、それ鐵砲、ヤアしなしたり。此裁判もこれまて。心の腐つた吟味役、何故彼女を取逃がした。

エッ　いや御心を確かに。

ケント　おゝこれは何たる事。度々御自慢なされました、御堪忍は何處へ御忘れなされました。

エッ　（旁白）御痛はしさに涙が零れて、何うやら化の皮も露れさうな。

リア　大きい小さい犬共が、アレ見や白、黑、赤、斑吠え懸ける。

エッ　そんなら己が此頭を、犬共に投げつけて呉れう。ヤイ犬共失せろ。口は白うても黑うても、嚙む歯には毒がある。大犬小犬赤斑白斑、矮狗、尨狗、飼犬野良犬、唐犬、病犬、何奴も此奴もぎうといふ目に遭はせて呉れる。コレ此頭をかう投げつければ、三尺四尺跳上り、犬共悉皆逃げ失せた。

おゝ寒小寒ぶる〳〵〳〵。申し、さア參りませう、お祭禮へ參りませう、市神へ參りませう。ヤヽ水筒の水がなくなつた、誰ぞ飲料を下されい。

リア　此上はレガンの胸を割いて見て、心臟の狀態を調べやう。彼の樣な硬い冷たい心臟の出來るは、何ぞ理由がなうてはならぬ（にッ）おゝ其方は予が百人の侍從の中に加へて遣す。乍去其服裝ては困却致す。ハテ其方は波斯風の美服にも、劣らぬと申すてあらうが、ともかくも着

換へて呉りやれ。

ケン　ハテ、殿下、何卒此床へお臥せりなされて、暫く御休息なされませ。

リア　コレ默つて〳〵。そして帷帳を引いて呉りやれ、左樣ぢや〳〵、何れ晩餐は明朝の事ぢや。左樣ぢや〳〵、

道　そして僕は、明日日中に寢むと致しませう。

グロスター再登場

グロ　コレ〳〵、國王殿下は何處に在すぞ。

ケン　此處に〳〵、去りながらお起し申さぬやう御亂心の體でムります。

グロ　アイヤ、其方は殿下を御抱き申して呉りやれ。コレ、身共はな、殿下を亡き者にせうとの、陰謀を立聞致して參つた。彼處に輿がある、彼輿へ

御移し申して、ドーバーの港迄御供致せ。然らば彼處には、屹度殿下を御迎へ申して御庇ひ申す者があらう。さゝ少しも早う、半時なりとも猶豫したら、殿下の御生命は申す迄もない、其方共や吾々一同、御供の者の生命は風前の燈ぢや。さゝ早う御昇き申して、身共に從いて參るがよい。旅の準備を致して進ぜる。

ケン　疲れ果てゝ、折角御眠みなされた處、十分に御眠みなされたなら、御癒りなさらうも知れぬけれど、差迫る御難儀に、それさへ叶はぬとあつては、御快氣の程も覺束ない。（道化に向ひ）コレ汝も手傳つて、殿下を御連れ申して呉りやれ、汝も後へは置いて行かれぬ。

グロ　サア〳〵此方へ〳〵。

とケン、グロ及び道、王を昇きて退場

エッ　一段身分の高い者が、同じ悲みに沈むを見れば、我が身の嘆は物の數とも思はれず、己れ一人の憂目と思へば、此世の樂みも消え失せて、味氣なくのみ思はるれど、我に等しき悲みの友、嘆きの同伴者ある時は、さばかりの身の難儀も、心はさ程に思はぬもの。彼程に國王殿下、御くつをれの體を見れば、何うやら忍び易くもなる我が身の上。此身は父故、殿下は子故の同じ苦艱。此上は是非もなし、世の成行に心を留め、此身を苦しむるあらぬ汚名の、自つと洗はれ去んぬるを俟ち、其時今日の假面をかなぐり棄て、我と名乘出ると致さう。イヤ此上何事のあらうとも、何卒國王殿下をば、御無事に御落し申したい。先づ〳〵此身は潜み居らむ。

と退場

第七場　グロスター居城内の一室

コーンヂール、レガン、ゴチリル、エドマンド及侍僕等登場

コー　（ゴチ）緣姉君には、御良人ブルガンデイ公の御許へ、早馬を御立てなされて、此書面を御屆け下されい。佛蘭西の軍勢は、既に上陸致せしとの事でムる――誰かある叛逆人のグロスターを尋ね出せ。

と從僕の中二三退場

レガ　そして縊殺して仕舞やい喃。

ゴチ　眼を抉つて棄てたがよい。

コー　イヤそれは、某が料簡にお任せ下され。エドマンド、其方は緣姉君の御供を致して參れ。其方が父の處分は、其方に見せたうない。さて公爵

に拜謁の上は、急ぎ戰爭の準備を致さるゝやう申上げい。予も同樣の準備を致すであらう。此後とても早馬を以て、迅速に相互の消息を通じたい願ひ。おさらばでムる緣姉君。さらばぞグロスター伯。（エドを指す）

オスリルド登場

どうぢや、國王の在家は。

オス　グロスターの伯爵が、お逃がし申ましてムりまする。凡そ三十五六人の武官、共、御行衛を尋ね罷り在りしが、御門の邊りで邂逅ひ、それに伯爵の御家來も加はり、一同殿下の御供を致し、ドーバーの港を指して、急ぎましてムりまする。彼處には賴もしき味方もあるとか、廣言を吐き居りましてムりまする。

コー　然らば其方は、夫人の御馬を用意致せ。

ゴチ　さらばこれにて公爵殿、妹。

コー　エドマンド、さらば

とゴチ、エド、及オス退場

其方共も謀叛人のグロスターを尋ねて參れ。盜賊同樣本繩を打ち、予が面前へ引いて參れ。

と他の從僕等退場

一應吟味の上ならでは、一命は取られぬ掟ながら、惡しゝと知りつゝ抑へ難なき憤怒の情には、暴力をも用ふる習ひ。それへ參つたは誰ぢや、ヤア叛逆人を連れて參つたか。

從僕等グロスターを擒にして登場

レガ　恩知らずの狸爺。

コー　其萎び腕を引縛れ。

グロ　何を仰せられまする。よう御思案なされませ。方々には此某が館の賓客。滅多な事を遊ばしますな。

コー　ヤイ縛れと申すに。

と從僕グロを縛る

レガ　手硬く〳〵、おゝ汚はしい謀叛人。

グロ　無慈悲の夫人。某は左樣な者ではムりませぬ。

コー　其椅子へ引縛れ、逆賊奴、目に物見せて——

とレガン、グロの下髭を引むしる

グロ　髯を引きむしるとは、御卑怯ななされ方。

レガ　此樣な白髮をかづいて、叛逆人とは大それた。

グロ　酷たらしい夫人。今此頤から御引むしりなされた、其鬚の一本毎に、魂が這入つて夫人をお恨み申しませう。某は夫人を御宿め申した宿主でムりまするに、其宿主の顏面に、箇樣な辱めを加へるとは、盜賊同然の成され方。申し何をなされまする。

コー　コリヤ、其方は先刻佛蘭西より、如何なる密書を手に入れた。

レガ　明白に返答しや、樣子は殘らず知れてあるぞい。

コー　して又、此度上陸致した逆賊奴等と、如何なる陰謀を変せしぞ。

レガ　狂亂の國王殿下は、何者の手に送り屆けた、眞直に白狀しや。

グロ　如何にも、推量半分の書面をば、落手致してムりまするが、發送人と申すは、歟てもない味方でもない。何方に何の關係もない者でムりまする。

コー　えゝ口賢い。

レガ　不忠者。

コー　して何處へ國王は送り屆けた、

ゲロ　即ちドーバーの港へ。

レガ　何故ドーバーへは送り屆けたあれほど堅い、豫ての申付けを忘れたか。

コー　何故ドーバーへ送り屆けた。其返答を致せ〳〵。

ゲロ　柱に繫がれた熊同然、入替り立替り犬を嗾しかけられ、嘶さいなまるゝ事てムらう。

レガ　コレ、何故にドーバーへ、

ゲロ　其故と申すはな、夫人の恐ろしい爪故に、父王殿下の御眼をば、抉り

取らせまいの意故、又は御妹君の猪の樣な牙先に、十善の玉躰を、懸けさせたうもムらぬ故てムります。冠り物も召させられず、玉躰を御曝しなされた、冥府にも紛ふ彼の闇夜の暴風雨には、跳り狂ふ潮の波に、天上の星の火さへ消え失すべきを、御父王の御胸の火は、却つて空に一層の雨風を添へられました。彼の樣な物凄い夜に、門に來つて哀を乞ふ者は、縱令狼なりとも、「今夜ばかりは日頃の害毒を大目に見て、一夜の宿を貸して遣せ」と仰せられても然るべきを。いや某は斯樣な不孝者に、やがて天罰の來るをば、此目て見たうムります。

コー　其願ひは叶はぬ〳〵。それ物共、其倚子を抑へて居よ、其眼を此足て蹈んで呉れう。

ゲロ　コレ老人を、何時かは我が身の上と思ふ者は、早う來て助けて呉り

やれ、おゝ殘忍無慈悲、おゝ神々。

レガ　後に一眼殘して置くも可笑からう。其方の眼も潰して了へ。

コー　これで天罰の來るのが見えたら――

從僕甲　お控へめされ我君、幼少より御奉公致した僕、只今から御留め申すは、何寄の忠勤と存じまする。

レガ　何をいやる、此犬が。

從甲　イヤ、夫人樣の御頤に御鬚があつたら、それを引むしつても、お爭ひ申さねばなりませぬ。（コーに向ひ）申し何となされまする。

コー　ヤイ主に向つて不屆奴。

とコー、拔劍從甲同じく拔劍にて戰ふ事

從甲　サア御出なされ、御癇癖の冷めぬ中、どうなりとなされませ。

レビ　えゝ其劍を此方へ――百姓でもこれ程には。

と從甲コーに傷を負はせる

從甲　おゝ殺された。我君、殘る隻眼（グロスターの）に御行末を見られぬやうになされませい、おゝ。

と劍を取り後より從甲に斬かける

と從甲死する

コー　おゝいかにも見られぬ樣に致して呉れる。（譯者曰く此間にコー、グロスターの殘る隻眼を潰すと知るべし）それ瞳が飛び出た、どうぢや、これでも見えるか。

グロ　えゝ眞暗闇ぢや。ヤイ悴エドマンドは何處へうせた。こりやエドマンド、父が耻辱を無念に思はゞ、此復讐を致して呉りやれ。

レガ　愚や逆賊、汝は汝に仇なす悴を呼びやるか。汝が叛逆の一伍一什を、密告致したは彼ぢやわいの。其忠義者のエドマンドが、何て汝を可哀

相とも思はうぞい。

ゲロ　おゝさては此身の不明。エッヂャーこそあらぬ濡衣を着たるよな。ゑゝ神々も此身の罪を御宥恕あつて、彼が身の上を護つて下され。

レガ　誰ぞ此奴を門外へ追つ拂ひ、鼻て道を嗅ぎ分けて、ドーバー三界へ往なして遣れ。

従僕一人ゲロを伴ひ退場

ハテ、如何なされました我夫、どうやら御容子が。

コー　少々怪我を致した。從いて參れ夫人。彼の俄盲目を追拂つたら、此奴（徒甲の屍を指す）は糞溜へ棄てゝ遣れ。いやレガン、未だに止まぬ此出血、惡い時に怪我を致したなア。手を引いてたもれ。

とコー、レガンに引かれて退場

従僕乙　此樣事をしても善いならば、己やもう何んな惡い事でも構はず爲る。

従僕丙　彼の夫人が無事に生存へて、疊の上て死ねるなら、女といふ者はみんな夜叉になるだらう。

従乙　此方共はこれから伯爵の御供をして、彼の物狂の乞食に、何處へても好な處へ案内させうてはないか。狂人だからどんな事ても厭とは云はぬ。

従丙　そんなら汝先へ行け。己や御顔の創へつける樣に、麻と雞卵の白味を持つて後から行く。（當時金創の手當には必要の物なりしなり）おゝどうぞ神樣も、御慈悲を垂れさせて下さりませ。

と二人別々に退場

第四幕

第一場　荒野

エッヂヤー登場

エッ　此樣に輕侮られても、輕侮られると知りつゝ日を送るは、諂らはれながらも、輕侮られるには優る身の上、其上不運の谿底に沈む上は、登る望こそあれ、最早落ちる憂はない。安樂の身の上には、悲みを見る恐れもあれど、苦艱の身にはどう轉んでも只だ身の幸を增すばかり。お、然らば風も吹け〳〵風故に、不運の谿底に吹き落されし身は、吹き上げらるゝも又風故、風に恨みも恩もない。ヤ、其處へ參つた者は。

グロスター、一老翁に導かれて登場

ヤ、、父上が、みすぼらしげな御有樣で、お、浮世や浮世、浮世に不思議の變有つて、吾人浮世を厭ふ心の生ぜずもあらば、老人にはなりたうない。

老翁　申し殿樣、私は此八十年、御家重代の百姓でムります。

グロ　往きやれ、棄てゝ置け、折角の其方が親切、此身には何の役にも立たぬ、其方迄却て酷い目に遇ふであらう。

翁　ぢやと申して殿樣には、行くべき路も御見えなさらず。

グロ　いや此身には、行くべき路もなければ、眼も要らぬ。眼ありし時にこそ、躓きもしたれ。滿つれば兎角心驕り、缺くれば却て愼み深し。あゝいとしの悴やエッヂヤー、騙された父が癡癖の贄となつたか。命冥加に生存へて、も一度此手で抱いて見たなら、此眼が又開いた程嬉しから

う。

霜　ヤア〳〵其處に居るは誰ぢや。

エッ　（旁白）おゝ悲しや、此上落ちやうもない、不運の谿底などとは云はれぬもの。今は又先刻よりも、一層辛い悲しい思ひ。

霜　物狂の乞食ぢやな。

エッ　（旁白）此上にも之に增す悲しい思ひをせぬとも限らぬ。谿底と思ふ間に、其又底が見えて來る。

霜　こりや奴、何處へ行く。

グロ　何ぢや乞食か。

霜　乞食て、そして狂人てムりまする。

グロ　乞食を致す所を見れば、幾らか正氣もあると見えるな。昨夜の彼の

暴風雨の中に、拙者も其樣な者を見たが、それを見て今更ながら、人間は虫ぢやと思ひ知つた。そして忽ち想浮べたは悴のエッヂヤー。乍去其時は、まだエッヂヤーが憎い最中。後から知つて悔めど詮もない。えゝさて腕白小僧が、蜻蛉を弄るやうに、人間も神樣の翫弄物ぢやな。慰みに人間を殺すとは、神樣も恨めしい。

エッ　（旁白）ハテ、こりやどうした事であらう。それにつけても、自ら身を苦ませ、併せて他を苦ませながら、此樣に身を窶して、悲嘆を暗まさねばならぬとは何たる身の上。申しお旦那樣。

グロ　其奴は裸躰ぢやな。

霜　御意の通りてムりまする。

グロ　然らば其方は何卒これて往んて呉りやれ。乍去舊恩を思ふ心あら

ば、身共はドーバー指して行く程に、後から此裸躰男に、何ぞ着せる物を用意して、一二里先の處迄、持參して呉りやれ。拙者は此男に案内を頼む積りぢや。

霧　飛んだ事を、此男は物狂ひてムります。

ケロ　どうて狂つた此の世の中、狂人が盲人の手を引くに不思議はない。身共の云ふ通りに致せ。夫がいやなら其方隨意に致せ。兎も角も早う往んて呉りやれ。

霧　そんなら私の一番美い着物を持參致しませう、まゝよどうなるものか。

と霧退場

ケロ　コリヤ裸躰男——

エッ　おゝ寒己や寒い（旁）えゝもう辛抱が爲切れぬわい。

ケロ　此方へ來い、奴。

エッ　（旁）いやも少し辛抱せねばならぬ。アレ〳〵、御眼から血が流れる。

ケロ　汝やドーバー街道を存じて居るか。

エッ　街道でも裏道でも、馬道でも樵徑でも御手のもの。此物狂ひは正氣を失したが、貴君樣は富人の子、どうぞ惡魔に憑かれぬやう。コレ聞かしやれ、此己には一時に、五匹の魔が憑いて居る。邪淫の魔には無言の魔、竊盜魔には殺生魔、それに澁面苦面の魔。但し當世は、御殿女中や侍女に、此澁面の魔が憑いて、鏡の前で顏付の稽固がムりますげな、イヤ申し、お旦那樣。

ケロ　サア此財布を取つて置け。汝や狂人になつたお蔭で、何のやうな難

儀でも笑つて通す。それに身共のやうな仲間が出來ては、幾らか諦らめがつけ易からう。實に天道はかうありたい、飽食暖衣の輩は、汝等が天運を嘲笑ひ、我が身に覺えねばとて見て見ぬ振り。左樣な者共を、一日も早う零落させ、身につまさせて呉れたいな。さすれば人間平等、貴賤貧富の差別もなく、萬人が萬人、何不足もなくならう。汝やドーバーを存じて居るな。

エッ　存じて居ります。

グロ　彼處には懸崖がある。削り立てた樣な其頂は、危なげに大海を覗いて居るが、其崖端まで案内して呉りやれ。さすれば身共の身に着いた、金目なものを褒美に遣す。それから先は、もう案内は要らぬ此身ぢや。

エッ　そんなら御手を取りませう。狂人が御案内を致しませう。

と二人退場

第二場　アルバニー公爵邸前

ゴチリル、エドマンド登場

ゴチ　これ迄の御見送り御大儀々々。夫につけても途中まで、妾か夫公爵殿が、出迎はれぬとは不思議な事。

オスワルド登場

おゝ其許か。御前樣は何處に。

オス　御殿に御在遊ばします。乍去御前樣には甚う御變りなされました。敵軍上陸の儀を申上げましたる處、たゞ御微笑みなされたばかり。夫人御歸館の由を申上ぐれば、けしからぬとの御挨拶。グロスター殿の

叛逆、御子息が忠義の一條を申上ぐれば、某を馬鹿者呼はり。見樣が惡いとの御ゝ詞。とかく從來、御嫌ひ遊ばす物が御好になり、御好遊ばすものが、御癪に障る御樣子てムりまする。

ゴチ　（エドに向ひ）そんなら卿は、これて還つてたもれい哺。とかく事なかれと願ふ、我夫の內氣な心故、其樣な事も云はれるのぢや。身に逼る一大事を、可成見ぬ顏に過さるゝ氣の弱さ。して途上話し合うた彼の事は、いつか願ひの屆く事もあらうわいな。そんならエドマンド殿。卿はこれから歸つて、急ぎ軍兵を徵し集め、一方の旗太將。此身もこれから女性を止め、夫に成り替らう心組。又これなるオスワルドは、心置なき親切者。以後は二人が中の文使卿さへ身に向いた運に後込せずば、遠からず善い耳を聞かせうぞへ。夫迄の印には、サア、此品を着けて居や。あゝ

コレ何にも云ふまい。

そして、コレ、かうして（吻しながら）（と戀の紀念物（リボン類）を與ふる事）ほんに此接吻に籠もる心の丈、口に出して云はうなら、卿が魂は動顛せう。推量してたもれい哺。さらば。

エド　死すとも御情愛は忘れませぬ。

ゴチ　いとしい、いとしのグロスター殿。

（とエドマンド退場）

おゝ同じ男と男でも、此樣に違ふものか。あの樣な殿御こそ、女性の情は受くべきなれ。今迄の阿房殿が、妾を女房呼はりは、其身にもなき潛

上沙汰。

オス　モシ、夫人、我君の御出てムりまする。

アルバニー登場

ゴネ　さて〳〵、我夫の御出迎も受けぬとは、飽かれ果てた此妾。

アル　おゝゴネリル、暴い風が吹きつける、汝が面上の塵程も、愛しげのないは汝の心、恐ろしい性質。生みの父御を等閑にする心根は、よもや何事にも、尋常にしては居られまい。養分のある親木から、我と身を裂く若枝は、枯れ朽つる日も瞬く間。

ゴネ　其樣な事、最早聞きたうもムりませぬ。阿房らしい御經文。

アル　聖賢の訓戒も、惡人には惡しく聞え、鄙しき者は鄙しき臭氣の他を嗅がぬ。コレ汝等の所業は何たる所業、人の娘ではなうて虎狼、コリヤ何事を致した。現在の父御なり、結構な老人を如何致した。怒り狂ふ熊

とオス云捨て退場

てさへ、御年寄られた彼の御顏は、甜め廻しも致すべきに、殘忍卑劣な擧動は、氣が狂うたか逆上せたか。深い御恩に預つた、コーンヲールは只だ默つて見て居たか。其樣な事を致して、天罰立ろに至らずもあらば、人間界は大亂脈、互に肉を食ひ合ふこと、渡つ海の底に住むてふ、怪物にも變りはあるまい。

ゴネ　臆病者とは我夫の事、其御頰は打たれう爲め、其御頭は擲られう爲めに、附けて置くと見えまする。其御目は身の面目と、身の難儀の見別さへ附かぬると見えまするな。大惡を仕遂げぬ中に、罰を受けた惡者を、憫れがるは愚人の所爲と、其處に御氣が附かれぬか。モシ、陣鐘陣太鼓は、何處へお置きなされまする。佛蘭西王は既に軍旗を靡し、無人の地を行くやうに、兜の羽を靡かせて、是見よがしの陣構へ。それに好人

物の我夫は、ぢつと坐つて善惡の御講義。ハテ心得ぬ佛蘭西王が擧動
などゝ仰せられても詮ない事。

アル　コレ惡魔、自分の姿を見やれ。夜叉の夜叉面も、女の夜叉面程は怖う
ないわ。

ゴ子　おゝ阿房らしや。

アル　鬼になつたか蛇になつたか、變り果てた汝の心に、まだ耻辱といふ
事を知るならば、せめて顏貌までは、異形のものとなさぬがよいぞ。え
ゝ此兩腕を、此胸に烹ゆる、血潮の爲すがまゝに任せたなら、汝が肉も
骨も引裂いて、ずた〳〵にせにやア措かぬ。正しく惡魔の汝ながら、女
の皮を蒙る故、思ふ樣にもならぬが殘念。

ゴ子　ハテ其御勇氣が——

使者登場

アル　何事ぢや。

使　おゝ御前樣、コーンヲールの公爵には、御逝去なされまして厶りま
する。グロスター殿の殘る片眼を、潰さうと致した時、御家來に斬られ
ました其創で。

アル　何、グロスターの片眼ぢや。

使　御家來の一人が、見るに見兼ねて、其御擧動を御留め申さう爲め、遂
御主君に劍を向けし處、憎い奴と御立腹にて、夫人と御兩人にて御手
討になされましたが、其時御自分も御受けなされた負傷にて、遂に御
落命に及びまして厶りまする。

アル　あゝ其一事は天上に、神明の在す確かな證據。此地上の罪の報いが、

左ばかり速かであらうとは。それにつけても、不憫なはグロスター、其片眼は失ひしか。

使　兩眼共に失ひまして厶りまする。さて夫人、此書面は至急の御返事をとの事で厶りまする、即ちコーンウォルの夫人より。

と書狀をゴ子に呈する

ゴ子　（旁白）滿更惡くもない此音信。乍去妹も今は寡婦、そして可愛いエドマンドを側に置いたら、此身が折角の願ひも仇となり、あぢきない身の上となりはせまいか。其れさへなくば厭てもない此の消息、兎も角も讀んで返事をせうか。

とゴ子退場

アルし　して兩眼を拔かれし時、グロスターが悴は何處に居りしぞ。

使　夫人の御供をなされ、御館へ參りました。

アル　いや館へは參らぬが。

使　いや參りまして厶ります。某は只今途中で、彼が引還し行くに、出合ましてム厶りまする。

アル　して彼は、其騷動を存じて居るか。

使　存じて居りまする段ではム厶りませぬ。父の陰謀を密告致したも彼が業。夫人の御供を致して、其場を外しましたも、父の處刑を、存分に致させう爲めで厶りまする。

アル　さて〳〵不憫なグロスター、國王殿下への卿が忠義、予は嬉しく思ふぞ。此上は失ひし兩眼の、仇は予が報いて遣す。コリヤ、其方は此方へ來やれ。もつと委しい樣子が聞きたい。

と二人退場

第三場　ドーバー附近なる佛軍の陣營

ケント及び一紳士登場

ケント　佛蘭王には、何故俄かに歸國致されたか、其理由は御存じてムりませうな。

紳　何事か、中途に棄てゝ出師せられたを、後になつて思ひ出し、それて歸國せられたと見えるが、何れ國王親ら歸國致す程な、國家の大事と相見える。

ケント　して御名代の總大將には、誰人を殘し置かれました。

紳　即ち佛蘭國の元帥ラ、フヲー將軍。

ケント　貴殿御持參の御書面を御一覽あつた時、皇后には何ぞ愁嘆の御樣子を御漏しなされましたか。

紳　いかにも皇后には書面を取り、某の面前で御一覽なされたが、折々涙をはら〳〵と、美しい御頰の上に御落しなされました。其御有樣、せぐり來る胸の悲嘆を、ぐつと御制へなさるやうでムりました。

ケント　おゝ、然らば彼の書面が、御心を動かしたと見える。

紳　乍去御憤激と申す風ではなく、せき來る悲みと、其悲みを耐へやうとの御心が、御顏の上に解けつ縺れつ、何れが美しいかと婀娜競べ。日光は射しながら雨降ることは間々あれど、微笑と涙の皇后の御顏に比べては及びもない、丹花の唇に含める微笑は、眼に湛へたる涙をば、素知らぬげに見えながら、其玉のやうな御眼よりは、眞珠のやうな涙

の零れ落つる風情、悲みといふものも、映り合せが好い時は此上なう美しいものでムるわい。

ケント　して皇后には、何とか仰せられましたか。

紳　げに一二度喘ぎながら、「父上父上」と、さも胸苦しさうに、つぶやかれた上、情ない姉君達、女の耻辱、姉君達、彼のケントが、父君が、彼の暴風雨に、彼の闇夜に、慈悲も情もないことか、などゝ御泣きなされ、神々しい御眼の中から、涙の露を御拭ひなされ、咽びながらも人なき室にて、御悲みを鎮めやうとの御心か、其まゝ御立ちなされました。

ケント　實に人間の心の善惡は、天上の星の廻り合せ、さもなくば一つ種一つ腹から、左樣に違つた、子供の生れう道理がムらぬ。して貴殿には、それから後皇后に、御拜謁を致されましたか。

紳　否致し申さぬ。

ケント　して又夫れは佛蘭王歸國前でムりましたか。

紳　否、後でムる。

ケント　さて國王殿下には、此市へ御着なされましたが、御氣分の鎮つた時は、御潛幸の理由も思ひ出さるゝ御樣子、但し姫君に御對面の儀は、迚も御承知なさりますまい。

紳　それは又何故で。

ケント　慚愧の念に、御身を責めらるゝ故でムる、御配分を奪ひ取り、あらぬ他國へ何うともなれと追拂ひ、當然御讓與あるべき筈の、大切の御領國を、さもしい心の姉姫達に御讓りなされた、それやこれやに御心を惱まされ、我が御子ながら愧かしさに、コルデリア姫には、御顏が合せ

たうもないのでムりまする。

紳　おゝ御可哀しい事ではある。

ケン　アルバニー、コーンヲール兩公の軍勢に就きましては、何ぞ御聞き込みなされましたか。

紳　只今進軍中との事でムる。

ケン　左樣でムりますか、然らば貴殿を、リア殿下の御側へ御案内申します故、御介抱申上げて下さりませ。某は深き仔細有つて、今暫く素性を隱して居りまするが、やがて何者なるか、正躰を現す時が參らば、恐らく貴殿とても、かう某を御信用なされた事を、御後悔はなされますまい、いざ何卒御同道下さりませい。

と二人退場

第四場　同前　天幕の中

コルデリア、醫官、及兵士大勢旗鼓を携へて登場

コル　あゝほんに父上ぢや。ハテたつた今の先、荒海の樣に暴れ廻る、御狂亂の御姿で、薊蒲公英、蕁麻、菁、其外種々、麥畠の中に咲いて居る、名もない草花を御頭に挿し、高らかな御鼻唄で、彼處を御通行なされたに。此上は一隊の軍兵を繰出だし、生茂れる麥畠の中を、隈なく尋ねて、早う此處へ御連れ申しや。

と命を含みて一人の役人退場

あの亂れた御心を如故には、名醫の匕でもならぬかいなら、御治し申す者があつたなら、此妾が身に附く者は、何なりと遣らさうもの。

醫　いや御療治の道はムりまする。御睡眠こそ、自然の療法てムりまするが、其御睡眠が御不足なされまする。然るに御睡眠を促す藥艸がムりまする。此藥艸には、疲れた眼を閉ぢしむる、不思議の力がムりまする。

コルヌ　おゝ此地上に、ありとある不思議の藥、秘密の草を、此涙て生したい、そして御病氣を治したい。それにつけても、御狂亂の餘り、御生命に若しもの事がない中に、早う御尋ね申してや。正氣といふ、取る舵のない今の御身、氣遣はしい事てはある。

使者登場

使　御注進てムりまする、英國の軍勢此方を指して寄せまする。

コルヌ　夫は前以て知れた事、此方にはちやんと準備があるわいなう。おゝいとしの父上、妾が此度の出陣は、たゞ父上に、逢ひたい爲め、夫故にこそ我夫佛蘭王も、此身が嘆きを不憫と見て、此樣な軍をも起されましたさら〳〵戰爭に勝たう、國を取らうなどゝいふ、大望故てはムりませぬ。たゞ父上愛しさ故、父上の御難儀を御助け申さう爲めばかり。おゝ早う御聲が聞きたい、御顏が見たうてならぬわいなア。

と一同退場

第五場　グロスター居城内の一室

レガン、オスワルド登場

レガ　乍去緣兄君の軍勢も、最早勢揃を致したか。

オス　致しましてムりまする。

レガ　して御自身が大將で。

ヤス　樣々に御勸め申し、漸う御出馬なされましたが、夫人の方が、却つて武勇に入らせられまする。

レガ　さて此方のエドマンドは、其許の御主君と、彼の節御館で御對面致さぬとか。

オス　致されませぬ。

レガ　でも姉より彼への書面は、何事を申し越したのであらう。

オス　某も存じませぬ。

レガ　生憎やエドマンドは、大切なる用向にて、折しも他行致した所。グロスターの眼を抉りながら、生かしておいたは甚い粗漏。行く先々で、人の心を動かして、我等の敵を作らぬとも申されぬ。たしかエドマンドの行きやつたは、父の難儀を見るに見兼ね、寧そ盲目の闇の命を、なきものにせう心組、又敵軍の樣子をも、探らう爲めであらうわいの。

オス　然らば某は、此御書面を携へ、御後を追駈けずばなりませぬ。

レガ　當方の軍勢も、明日は出發の手筈。其許も同道して行きやいのう。一人路は危嶮わいの。

オス　それは成りませぬ、此儀については、夫人よりの堅い命令でムりました。

レガ　姉上にはエドマンドへ、何御用あつて其御書面。其許が口づからの傳言では屆かぬか。定めてそれは――いやどうも解せぬわいの。コレ其許は善い者ぢや、そつと妾に封を切らせては給もらぬか。

オス　そればかりは、縱令何のやうな事が――

レガ　いやさ姉上が、縁兄君を御嫌ひ遊ざすことはちやんと承知。それに此程御出の節、それは〳〵、彼のエドマンド殿へ横眼色眼。ハテ其許は姉上の腹心ぢやな。

オス　何此某が。

レガ　何事も承知の上でいふのぢやぞや。それに相違のない其許。よういふて聞かせうぞ、妾が夫公爵には御遠逝。エドマンド殿と妾とは、少々話し合うた事もある程に、姉上の御手よりも此手の方が早いぞや。それで大略は推量しや。さて彼君に逢うたなら、委細話して見るがよい。又姉君にも御話申し、叶はぬ願ひは棄てる樣、よう御思案遊ばせと申上ぎや。そんならこれでおさらばぞや。序ながら、あの謀叛人の、グロスターが在家を聞き出し、殺した者には、褒美は望み次第といふ事を覺えて居や。

オス　其儀は何卒某が、是非功名致したい。然らば某が心根を、御覽に入れる事も出來ませう。

レガ　そんならこれで。

と二人退場

第六場　ドーバー附近の片田舎

グロスター及び百姓の扮裝したるエッヂヤー登場

グロ　彼の山の頂上へは、何時着く事であらうなう。

エッ　ハテ今其山を登る所、さて〳〵坂路は骨が折れる。

グロ　いや道は至つて平な樣ぢやが。

エッ　イヤ恐ろしい險阻な事ぢや。アレ浪の音が聞えませうが。

グロ　いやちつとも聞えぬ。

エッ　そんなら御眼が暗くなつたので、御耳も遠くなつたと見える。

グロ　實にさうかも知れぬ、イヤ汝の聲は少々變つたな。そして前の樣ではなく、整然とした詞で物云ふ樣になつたは不思議。

エッ　それは間違ひ、變つたのは衣服ばかり。

グロ　どうも口のきゝ振が上がつたやうぢや。

エッ　サア〳〵此處ぢや〳〵、立留まつた。何と下を瞰ると恐ろしや、目が廻る。途中を飛んで居る鳥共が、漸と甲虫程に小さう見える。や、丁度眞ン中頃で岩菜を採つてる者がある。危い商賣もあつたものぢや。五躰が頭程の大きさにも見えぬ位。渚を歩いて居る漁師の姿は、鼷鼠程もあらうか、向ふに泊つて居る大船は艀舟のやう、艀舟は全て浮標のやうで見落す程ぢや。濱の眞砂子に碎けかゝる大浪の音も、餘り高い響きはせぬ。いやもう見ぬ〳〵、頭がぐらついて目が廻つて、眞逆さに落ちさうぢや。

グロ　コレ汝の立つて居る所へ、身共を立たせて呉りやれ。

エッ　そんなら兩手を出した。それもう其處から艇端まで一尺もない。己や何を貰つても、此處で跳ねるのは眞平ぢや。

グロ　手を放して呉りやれ。ソレ、も一つ財布を遣す。此中には、貧乏人には有り難い程の寶がある。どうぞそれで繁昌致すやうに。サア彼方へ行け、還つて呉れ、歸る足音を聞かせて呉りやれ。

エッ　そんならこれで、御機嫌よう、

ゲロ　汝も達者で。

エッ　（旁白）かく父上を欺き、自暴自棄の御心を弄ぶやう致すのも、畢竟其御心を、御治し申したい爲めばかり。

ゲロ　（跪づきて）諸天諸神もみそなはせ、某は只今此世を辞し、身に纏ふ苦難を、御覽の如く心静かに振り棄てまする。いつまでも此の如き苦難を受け、大御心の爲すが儘に、ひたぶる從ひまつるとても、某が生命は、只だ蠟盡きたる蠟燭の心の如く、ふす〳〵と燃え落つるばかりてムりませう。又若し悴エッヂャー此世に生存らへ居らば、何卒彼が身の上を護らせ給はんやう祈りまする。イザ奴、これで早う還つて呉りやれ。

エッ　還ります〳〵、さらば

とこれにてすア、身を投ぐる科ありて倒れ臥し、一時氣絶の體。

とはいふものゝ、彼の樣に御生命が、棄てたい〳〵と思ふ矢先、墜ちたつもりて、眞實に御生命を失さうも知れぬ。若しこれが父上の、思つて居らせらるゝやうな場處ならば、今の一跳て御落命なされた所——（此度は別人の聲音にて）コレ、申し〳〵旅の人、如何なされた、聞えましたか、何とか一言仰せられい。—實に此まゝ御果てなさらうも知れぬ。いや御氣がついた樣子、申し如何なされました。

ゲロ　えゝ往きやれ、死なして呉りやれ。

エッ　糸遊か、鳥の羽か、蒸氣でゝもないならば、あの樣な高い處から跳下りれば、鷄卵のやうに、粉微塵に碎けうもの。それに貴所は、息は通ふ、五躰はそつくり、血も出ず、口もきかれて達者なもの。眞逆まに落ちて來

たあの長町塲は、帆檣を十本二十本維いても達きはせぬに、さりとは不思議な御生命ぢや。もう一言仰有つて御覽じませ。

ゲロ　乍去身共は眞實墜ちたに相違ないか。

エッ　此の懸崖の頂上から、眞逆まに落ちました。先づ彼處を見上げなされ。上に鳴いて居る道がの雲雀も、聲も聞えず姿も見えませぬ。マヽ、一寸見上げて御覽じませ。

ゲロ　口惜しい事に身共は眼がない。さて〳〵死んで苦艱を逃がるゝといふ事もならぬとは。いかに薄命の者なりとも、自害を致せば、いかなる暴主の怒りをも逭れ、いかなる暴威をも摧いてこそ、世の中には幾分の慰藉ありと申すものぢやに。

エッ　サア御手を取ります、御立ちなされ。どうなされた、御脚に感覺がムりますか。それ御立ちなされた。

ゲロ　あり過る程感覺がある。

エッ　不思議とも何共申樣がない。彼の懸崖の上まで、貴所に從いて參つた者がムりましたが、彼は何者てムりますな。

ゲロ　彼は見るも氣の毒な乞食ぢや。

エッ　此私が下から見ますれば、兩眼は滿月を懸けたやう、鼻は幾百千とも知れぬやうに數多く、角と角とはもつれあひ、絡みあひて、荒海のやうにうねつて居りましたが、彼は何でも魔てムりませう。貴所は餘ッ程な幸福者、人間業に叶はぬ事を遊ばされた。神樣に、御生命を拾はれたのてムりませう。

ゲロ　あゝ今こそ想出した。これからは身の苦艱を、何時迄も堪へ忍んて、

これて宜いといふ迄生きて居やう汝が云はるゝ其惡魔を、身共は人間とばかり思つて居たが、實に其者は「惡魔々々々」と口癖に申して居た。彼處へ拙者が參つたも彼奴が案内。

エッ　御氣を鎮めて心を安らかに御持ちなされ、いや何人か此處へ御來なされた。

（リア野花を以て身を掩ひたる奇なる扮裝にて登場）

ヤア此樣な御扮裝を遊ばすからには、何れ正氣の御沙汰ではあるまい。

リア　いや〳〵予が貨幣を鑄いたとて、彼奴等が何うするもので、予は國王ぢや。

エッ　おゝお痛はしい御ン有樣。

リア　其儀に就きては、人力よりも天力ぢや、それ給料を遣す。其奴は弓矢の達人、案山子程の弓を引く、どうぢや今一寸三尺斗りの矢を射ては見せぬか。アレ〳〵其處へ鼠が〳〵、コレ靜かに〳〵、此牛酪を餌にして捕つて遣らう。サア甲手を投げた、いかなる勇士でも相手を致す。戟を執れ物共、おゝよう飛ぶぞ隼、中つた〳〵、的中ぢや。シューッ、いざ合言葉は。

エッ　「匂へる花」（合言葉は「匂はれ」、即ち合言葉の振にて出鱈目を云ひしなり）

リア　通れ。

グロ　聞き覺えのある御聲ぢや。

リア　何ぢや、其方はゴチリルか、白い鬚が生えて居ても。イヤ犬のやうに予に媚び諂つた奴原が、まだ黑いのも生えぬ時から、白い鬚が生えて

居ると申し居つた。予が「唯」と云へば「唯」と申し、「否」と云へば「否」と申すとは不敬な奴原。一度び身を知る雨に此身を濕ほし、吹く風に齒ぎしりを噛み、留れと命じても留らぬ雷を見た時に、初めて悟つた彼奴等の胸の中。初めて正躰を嗅ぎ別けた。ヤイ〳〵彼奴等は虚言家ぢや、予は何者にも犯さるゝことなき、一天萬乘の君ぢやと申し居つたが、悉皆虚言ぢや、予とても鶴には犯される、

グロ　其御聲癖にちやんと記臆がある。國王殿下では在さぬか。

リア　左樣ぢや、寸分國王に相違ない。見やれ一度眼を見開けば、臣民悉く恐れおのゝく。其者の命は宥して遣す、犯罪の筋は何事ぢや、私通ぢや、然らば命は取るに及ばぬ。私通は死罪でない、鷸鶏もそれを致す、あの小さい銀蠅も、予が面前を憚らぬ。色事結構、グロスターの隱し子は、予が嫡出の女等よりも遙かに孝心に富んで居る。予は兵士の不足に苦み居る。幾らでも子を拵へるがよい。見やれ、彼の向ふから來る笑顔の女房を、あの顏を見れば、定めて貞女と思ふてあらうが、あれは贋貞女、表面ばかりは猥らな話にも首を振る。去りながら淫樂好の牝でも、飼料のよい馬駒でも、實は彼の樣に烈しうない。首の方は女ぢやが、腰から下は畜生ぢや。帶から上は神のもの、帶から下は魔のもので、地獄がある、闇がある、硫礦の燃ゆる穴がある、燒ける、爛れる、臭ふ、腐る、え、厭らしや。コレ藥屋、麝香を呉りやれ。胸持を治したい。ソレ代物を遣す。

グロ　其御手に接吻を御許し下され。

リア　先づ此手を拭うてからに致さう、地獄臭い。

グロ　（リアの手を接吻しながら）おゝ藥拔のからの御ん玉躰。此大千世界とても、いつか

は此樣になるてあらう。申し某を御存じなされまするか。

リア　おゝ汝の眼におぼえがある。どうぢや予を睨んで見やれ。いやさ眼のない戀の神、汝が秘術を盡すとても、予は戀にはかゝらぬわ。此決闘狀を讀んて見やれ、せめて書振りを見るがよい。

グロ　其文字が日輪のやうに光るとても、某には一字もえ讀めませぬ。

エッ　（旁白）現在此目て見ぬならば、眞實とは思はれぬ御ご有樣。げに鵞も千切るゝ樣ぢや。

リア　サア讀んて見やれ。

グロ　何と、眼の皮て讀めと仰せられまするか。

リア　おゝ其處ぢや。眼には玉なし、財布には錢なしか。眼は重體財布は輕し。乍去世間の有樣は見ゆるてあらうな。

グロ　それは勘て見えまする。

リア　何と汝は氣が狂うたか、眼はなくとも、世間の有樣は見えるもの、ハテ耳て見やれさ、アレ見よ吟味役が小盜人を拷問致して居る。コレ聞け、彼等兩人が居場處を替へたなら、何方が吟味役て、何方が盜人か判るまい。汝は乞食が百姓の飼犬に、吠えられる所を見た事があるか、どうぢや。

グロ　ムりまする。

リア　そして其乞食は逃げたであらうな、即ち其處に役人の俤が見える。犬と雖も上に立てば、權威を笠に人間を逐ふ。えゝこゝな村役人、其非道な鞭を措いた〳〵。何故其賣女をなぐりやるぞ。打ちたくば自分の背を打ちやれ。汝は其女の罪を責むるやうぢやが、其所業こそ却つて

罪ぢやわ。小盗人を刑に處する役人こそ、國財を奪ふ大盗賊、纏縷を着れば、小さい罪咎も顯れるが、役人の立派な禮服には、いかなる大罪も隱れて見えぬ。金を着せれば、何の樣な惡事でも、吟味の槍は手もなく折れる。纏縷で包めば、小人島の藁藁でも直ぐ透る。夫故世の中に罪人はない、役人の責める罪人は罪人ではない。予が保證ふぞ。役人共の嘴に、封を付ける力のある、予の詞に滿足致せ。さて汝は玉眼を入れて世を欺き、見える振して過ごすが宜い。サア〳〵〳〵、予が靴を脱いて呉りやれ、もつと强く引いた〳〵、さうぢや。

エッ　（旁白）おゝ滿更御譫言ばかりでもない、狂氣に交る正氣の御言葉。

リア　汝や予が身の上を泣きたいなら、予が眼を取つて泣け。予はよつく汝を承知致す。汝が名はグロスター。何事も忍べ〳〵。人間は泣いて此世へ來るものぢや。初めて娑婆の臭氣をかいた時、皆なおぎやア〳〵と泣くてはないか。汝に少々云うて聞かす事がある。コレ聽問致せ。

グロ　あゝ何たる御ン有樣。

リア　抑も人間生るゝ時の初聲は、此愚かしき大舞臺へ、登りしことを泣くのぢやぞや。イヤ此れはよい帽子ぢや、此帽子を作る毛氈を以て、馬の蹄を包むはよい思ひ附。予は試して見やう。さて彼の婿共の側へ忍び寄り、彼奴等を思ふさま、斬つて〳〵斬りまくれ。

（一紳士從者を伴ひ登場）

紳　おゝ此處に御在なされた。御抑へ申せ。申し殿下、いとしの御姫君に

リア　は——コレ誰ぞ助けて呉れぬか。何ぢや生擒に致すとな。予は運命の玩弄

物と生れた身ぢや、酷い事を致して呉りやるな。贖回金を遣さう。ヤア〳〵醫師を呼べ。予は腦天迄打破られた

紳　何事でも御望次第でムりまする。

リア　誰も助けて呉れぬか、棄てゝ置くか、又此眼に泣かせうとか、此眼を如露の代りにして、秋の塵を濕させうとか。

紳　申し殿下――

リア　イヤ予は惡びれず死ぬるであらう、花郎のやうに潔よく。何ぢや、最早めそ〳〵泣きはせぬ、コレ〳〵、予は國王ぢや、汝達は承知の上か。

紳　いかにも國王殿下、某等一同は殿下の臣民でムりまする。

リア　それでこそ頼もしい、いやさ捕へるなら驅けて來い。サア〳〵〳〵。

と走りながら退場、從者等後追懸つ

〳〵退場

紳　縱令下司下郎の身にしても、痛ましかるべき御有樣。況して一天萬乘の御身、申樣もムらぬ。乍去彼處に在す一人の姫君、二人の姉姫故に、不運の御身とならせられながら、御心優しいのを御有ちなされまする。

エッ　申し御待ち下され。

紳　何用なるか急いて呉りやれ。

エッ　戰爭があるとの取沙汰に就き、御聞き込みなされた事はムりませぬか。

紳　いかにも、其取沙汰は、眞實の事ぢや、苟も耳あるものは、それ聞かぬ者はあるまい。

エッ　乍去敵軍は、何處迄寄せましたか、何卒御話し下さりませ。

紳　最早や手近迄差迫り、速かに推寄せ參る樣子、敵の本陣の顯れるは、今か〳〵と相待つ所ぢや。

エッ　忝うムります、それだけ承れば滿足でムりまする。

紳　皇后には、去る仔細有つて、此處に御逗留あれど、御軍勢は既に出立に及びし次第。

エッ　有り難うムりまする。

と紳退場

グロ　神々、何卒此身が息の根を御留め下され、又々間違つた心を起し、御許可をも待たず自害などゝ、思ひ立たせて下さりますな。

エッ　御老人、よく御祈りなされませ。

グロ　さて、汝は一體何者ぢやな。

エッ　打續く不運に鍛へられ、我が身の難儀に敎へられて、人の難儀を身に泌みて見る哀れの者でムります、サア御手を御出しなされ、何處ぞへ御案内致しませう。

グロ　忝ない、上天の御惠みも、何卒汝の身に振り懸るやう、祈り居るぞよ。

オスワルド登場

オス　ヤア懸賞のついた白髮首、此樣な幸な事はない、汝が其盲目首は、拙者が立身出世の手掛り、コレサ、まわり合せの惡い叛逆人、早う懺悔を致すがよい、汝の一命を申受くる、劒は鞘を出て居るぞよ。

グロ　それこそ却つて望む所、何卒しつかりと斬つて呉りやれ。

とエッヂャー中に入り差留むる

オス　ヤア大膽な土百姓、折紙附の逆賊を、疵ひ立て致すか。退れ〳〵、聽かずば汝も、同樣の災難に逢はせて呉れうず。サア其手を離せ。

エッ　いんにや、そねいな事で此手は離されねい（百姓の言葉を摸れていふ）

オス　コレ離せ、離さにやア命を取るぞ。

エッ　コレサ御役人、御前樣は御前樣の道を行くが宜い。人に搆ふ事があるものか。そねいな嚇文句で、此命が取れるものか。コレ此老人の側へ寄るてねい、退いた〳〵、それが厭なら、御前樣の頭と俺が棒手切と、何が強いか、試めして呉れべい。ドリャ、さつさと埒を明けやうか。

オス　默れ土百姓。

エッ　えゝ此奴曇んで呉れる。サア來い、打つて來い、怖くもねい。

と二人斬合ひエッザヤー遂にオスを倒す

オス　ちえゝ拙者を殺し居つたな。コレ奴、かうなつては恨みも恩もない、此財布を取つて置け、そして末長く繁昌て暮したくば、拙者の屍骸を埋めて呉りやれ。又拙者の懷中にある書面をば、グロスターの伯爵、エドマンド殿に屆けて呉りやれ。英吉利方へ往つて、尋ぬれば判るであらう。おゝ悲命の最期て死ぬるとは、おゝ。

とオス息絶ゆる

エッ　此奴は兼ねて見知れる奴、主と頼む夫人の機嫌氣褄を取り、惡事とあらば、何事に寄らず御扶助を致す不屆者。

グロ　何ぢや、死にやつたか。

エッ　モシ御老人、貴方は其處て御休息なされませ。私は此奴の懷を探して見ませう、今申した書面といふは、何ぞ役に立つかも知れぬ。おゝ全

く息が絶えたな、處刑に懸けて殺さなんだが殘念だ。ドリヤ一讀致さう。許せ封を切るぞ、安りに開封の罪は、見逆がして呉りやれ、敵の心を知らう爲めには、其胸をも裂く習ひ、書面の封を裂くはまだしもの事ぢや。（と書面を取出して讀む）

さ候へば契り交はしゝ言の葉の末忘れ給ふな、彼の人を亡き者にせむ機會は澤にあらむを、御心だに固くば、思ひを遂ぐべき、時も處もなくてやは、彼の人若し軍に勝ちて歸り來ば、何事もたゞ空となり侍らむ。此身は檻禁の身となりて、我が帳臺の中は、即て我が獄屋ともなるべくや。早う厭はしの人の側より、此身を救ひ給へ、さてそが報いに、御身早う其席に直り給へかし、かしく。

懷かしの君が行末の妻

ゴチリル

おゝ測り難きは女心。明主の聞え高き夫の君の、生命を取らむ陰謀。さて其代りに舍弟を。さては左樣な不義者の文使であつたるか。えゝ此砂の中に埋めてやれ。此上は折を見て、此書面をば、命を狙はるゝ公爵殿の、一見に備へやう。此奴が最期の有樣と、使命の趣を言上致し置くは、公爵殿の御爲めであらう。

ケロ　國王殿下は御狂亂、それに此身は確乎として、身に餘る悲みを、何時迄も感えるとは、さても頑固な胸ぢやなア。寧そ狂亂致したい。然らば此心中の悲みも消え、胸に餘る嘆きも、亂るゝ思故に、何時しか忘れ果てられうに。

エッ　サア御手を引きませう。どうやら遠く太鼓の音が聞ゆる樣子、御老人、某が知己の家へ、御案内申しませう。

と二人退場

第七場　佛蘭軍陣營の天幕内

コルデリア、ケント、醫官、及一紳士登場

コル　おゝ懐かしのケント殿、此大恩はどうして酬いたら宜からう唯、短かい妾の一生では、酬い切れる望もなし、どの樣な事をせうとても物足りない心地がする。

ケン　某が心中の誠を御認め下さればそれこそ何寄の御恩賞、さて只今某が申上げましたは、露詐りのなき有のまゝ、一分一厘の懸引もムりませぬ。

コル　先づ〳〵其服裝を改めてたもれや、それを見るにつけても、今迄の難儀が想ひ遣られて心苦しい。何卒それを着替へてたもれ。

ケン　イヤ御免あれ、某が只今正體を現しましては、折角の目的が外れまする。夫れ故時節到來、某がもう宜いと思ふ時迄、何卒某がケント奴ぢやとは、御存じない體に御心得下さらば、忝なう存じまするてムりませう。

コル　そんなら其樣に致して置かう。（醫官に）して國王殿下の御容態は。

醫　靜かに御眠みなされまする。

コル　どうぞ神々の御力にて、攪亂れた御心の、破綻を早う治したいもの、子故に狂つた御胸の絃の、調子外れを合せたいもの。

醫　最早御目を御覺まし申しては如何でムりませう、十分に御眠みなされました。

コル　卿の思案に任せる程に、卿が宜いと思ふ樣に致すがよい。して御召物の召換は。

（リア眠れるまゝ輦に乘り從僕共にかゝがれて登場）

醫　御熟睡中を見計らひ、新しい御召物に、召換へ進らせまして厶りまする。

ケン　姫君、只今御起し申しますに、もつと御側に近う〳〵。必ず御正氣に御還りなされたに相違厶りませぬ。

コル　嬉しいわいの。

（と、音樂の聲起る）

醫　どうぞもつと御側へ、そして音樂をもつと賑やかに。

コル　おゝいとしの父上、どうぞ妾の唇へ、不思議の靈藥を塗りつけて、そして二人の姉君故に、御受けなされた創痕を、此の接吻で直して上げたい。

ケン　げにお優しい姫君の御心。

コル　たとひ生みの父御でないとても、此白い御頭を、哀れとは見なんだか。これがまア、暴風雨に曝される御顏かいなら、雷の鳴渡る、電の閃めき渡る、凄い恐ろしい眞夜中に、野中に立たれる御身かいなら、軍の斥候に出ればとて、頭に兜は被らうもの。此身を咬んだ、憎い〳〵狗なりとも、其樣な時には、一夜は軒下に明かさせるが人情。それに父上は、棄てられた乞食と、むさくるしい豚小舍の中に、藁屑を被いて御凌ぎな

されたげな、御正氣と一緒に御命迄、御失しなされなんだが事そ不思議。おゝお目覺遊ばした、何とか申上げて見や。

醫　先づ〳〵御妃からが、御順當でムりまする。

コル　申し父上樣、如何遊ばしました、如何でムりますな父上。

リア　コレ〳〵、予を墓の中から、引張り出すとは酷いぞや。其方は幸福な魂魄ぢやが、予は火の車に繫がれて、鉛を鎔かした樣な涙故、我から身を焦す身の上ぢや。

コル　申し妾の顏に御見覺えは。

リア　其方は魂魄ぢや、何時死にやつた。

コル　まだ〳〵容易に御正氣には——

醫　まだよう御目が覺めませぬ故、暫く此儘にして、御置き申すが宜しうムりませう。

リア　予は今迄何處に居た、さて又此處は何處であらう、此の朗かな日の光は。薩張り仔細がわからぬわい。生存へて又此樣な日の目を見るならば、悲しうて死ぬるであらう。イヤ何というて宜いやら少しもわからぬ。此れは予が手であらうか、どれ試して見やう。かう留針を摩れば、矢張りえら〳〵とこたへる。さても今の我身の有樣が確と知りたいものぢや。

コル　おゝ妾の顏を御覽遊ばしませ。そして其御手を、かう翳して此身の祝福を御祈り下され。パテ其樣に御膝をおつきなされますな。

リア　何卒此身を弄つて呉りやるな。予は愚かなる一老翁ぢや、當年取つて八十歳、そして正直に申せばどうやら心が正氣でない。卿の顏にも、

これなる男の顔にも、見覺えのある心地が致せど、それとても當てにはならぬ。先づ此處は何處なるかも判らぬに、どう考へても、此服裝に記臆がない、昨夜は何處て過ごしたか、それさへも思ひ出せぬ。コレ笑つて呉りやるな、何うやら此婦人は女のコルデリアの樣に思はれてならぬ。

コルデリア　おゝ〳〵そのコルデリアてムります。

リア　何ぢや涙を流し居る。コレ泣くな〳〵、毒を持參致したなら飲んて遣らす。汝が予を愛せぬは承知の上ぢや。汝が姉達は恨もないに、此父を散々の目に逢はせた。まして汝は少々恨がある筈。

コルデリア　何の御恨がムりませう。

リア　して此處は佛蘭西國か。

「リア　コレ笑つて呉りやるな何うやら此婦人が女の
コルデリアの樣に思はれてならぬ」

ケン　いや御本國てムりまする。

リア　虚言を申すな。

醫　御安心遊ばしませ。御覽の通り御狂氣は御鎭まり遊ばされました。なれども從來の經過を、餘り精しく申上げるは、御爲めてムりませぬ。彼方へ御連れ申して、もつと御沈着き遊ばす迄、御心を騷がせぬやうになされませ。

コル　父上樣、彼方へ御出て遊ばしませぬか。

リア　コレ勘忍して呉りやれ、昔の事は忘れて呉りやれ、予は老ぼれて、たわいもない痴者ぢや。

とリア、コルデリア、醫官及び從者等退場

紳　さてコーンヲール公殺害の風說は眞實てムらうか。

ケン　眞實でムりまする。

紳　然らば公に代つて、臣民統御の任に當る者は何人でムるな。

ケン　風說によれば、グロスター殿が妾腹の子と申す事でムる。

紳　某が承りましたには、グロスター殿の嫡子エッヂヤーには、追放の身となつて以來、ケントの伯爵と共に、日耳曼國に滯在致すとの事でムる。

ケン　風說は變り易いもの、餘り當にはなりませぬ。イヤかうしては居られませぬ、英國方の軍勢、次第に近寄り參りまする。

紳　定めて大激戰があるでムらう、然らばこれにて。

と紳退場

ケン　今日の戰爭こそ、拙者が胸中の計略の、成敗を定むる運試し。ハテ氣

遺はしい事ではある。

と退場

第五幕

第一場　ドーバー附近なる英軍の陣營

エドマンド、レガン、役人兵士等旗鼓を携へ登場

エド　其方は公爵の御陣へ參り、此程の御計略を、彼の儘御用ひあるか、或は何ぞ仔細有つて、御取替なされるか、其儀確と承つて參れ。隨分と御心の變り易い、御氣の定まらぬ御ン方故、確と致した所を承はつて參れ。

と此命を受けたる役人退場

レガ　さて姉君ようの御使者（オスワルド）はどうやら殺されてもした樣子。

エド　げに其樣な事かと思はれまする。

レガ　イヤ喃ゆかしの人妾が胸の中は承知の筈。なりや隱し立てを致さず、あからさまに云うて聞かしや。卿はアノ姉君を、心に思うては居やらぬか。

エド　たゞ夫人の御姉君と、敬ひ奉るばかりてムりまする。

レガ　でもあらうが、公爵の目襟を忍ぶ、禁制の闘の中まで、足踏入れはせぬかいな。

エド　其樣な御邪推は、御人品に拘はります。

レガ　どうも姉上の腹心て、何から何迄、打明け合ふ仲てはないか、疑はしうてならぬわいの。

エド　誓つて其樣な事はムりませぬ。

レガ　ゑゝ見るも厭な彼の姉上、決して親しうしてたもるなや。

エド　御疑ひ遊ばしますな。ヤア御覽あれ、噂の主が御ン夫の君公爵と、御同

道にて御來臨なされました。

アルバニー、ゴネリル及び兵士等旗鼓を携へ登場

ゴネ　（旁白）たとひ戰爭に負ければとて、妹風情に彼人を、横取せられてよいものか。

アル　レガン殿、御機嫌克うて祝着〳〵。エドマンド殿、承れば國王には、末姫君の御陣に赴かれ、我等が政道に、兼て不滿の者共が、御供を致し參りしとの事。かく申す拙者は、義我に在らざれば、戰に勇なること能はず、此度の出陣とても、外寇の侵入を防がむ爲め、滿更無名の師とも思はれぬ、國王殿下の御勢に、弓を引く譯てはさら〳〵ない。

エド　げに天晴れなる御言の葉

レガ　其樣な御講釋、伺ひたうもムりませぬ。

ゴネ　イヤ〳〵、何は兎もあれ、力を協せて敵に當るが專一、内輪喧嘩今茲で、彼是云はぬがよいわいの。

アル　されば、差迫る戰の手配り、老功の古强者共と協議致さむ。

エド　然らば某は、早速御陣營に伺候致すでムりませう。

レガ　姉上樣、御一緒に參らうではムりませぬか。

ゴネ　いやそれは。

レガ　それが宜しうムります、サア〳〵何卒御一緒に。

ゴネ　（旁白）オホ〳〵、其謎は承知ぢやわいの――そんなら一緒に參らうか。

（アルの側と一同行きかゝる時エッヂヤー變服して登場）

エッ　（へゆき）下賤の身をも厭はず、恐多い事ではムりまするが、一言申上げたい事がムりまする。

アル　（一同に向て）拙者は後から參る程に、先づ〳〵御出やれ。（エッに向ひ）申して見やれ。

とエドマンド、レガン、ゴチリル、役人、兵士從者等退場

エッ　戰場へ御出馬ある前、何卒此書面を御披見下され。若し御勝利となりましたらば、此書面の持參人を、喇叭を以て御呼び出し下さりませ。かく申す私は、見る影もない男ではムりますれど、書中の赴の詐りならぬを證明さむ爲めには、何時にても罷り出て、何人の御相手をも辭みませぬ。若し又萬一御敗北とある時は、君には此世の御運も既やそれまで。自然君への陰謀も、立消えとなりまする。さらば何卒御運めてたく。

アル　コリャ、披見致す迄待つて居やれ。

エッ　そればかりはなりませぬ。若し其時が參りし上は、軍令使を以て御呼出し下され。然らは早速罷り出ますで。ムりませう。

アル　然らば參れ。此書面は目を通して置く。

とエッヂヤー退場

エドマンド登場

エド　早や敵軍が見えまする、御軍勢を御集めなされませ。これなる書付は、敵軍の眞相を、間者を以て探り集めしものでムりまする。何はしかれ、急ぎ御仕度の程、偏に願上げまする。

アル　ぬかりなく手筈を致すてあらう。

とアルバニー退場

エド　ハテ、契りをこめた姉妹二人、互に嫉妬の角を生し、蛇蝎のやうに惡み合ふ。さて何れを取つたものであらう。いつそ雙方諸共にか、但しは一人を撰取らうか、それとも雙方を棄てやうか。とはいへ雙方生存へ居ては、何れに親むことも成らぬ。未亡人殿に近しうすれば、姉のゴネリルは狂亂と參る。それかというて、歷とした夫があつては、此の方は何うも成らぬ。イヤそれよ〳〵、眼の當りなる此度の戰爭、彼の公爵を煮出汁に使ひ、使へるだけ使つた上、凱旋の後は、日頃公爵を邪魔者にする、ゴネリルに殺させう。兎角リアとコルデリアを庇ひ立てする不屆者、戰が濟んで彼奴等が手出しもならずなつたなら、何れ容赦は致さぬ奴、イヤ口先の理屈はさて置き、腕づくて圖らねばならぬ此の身の行末。

第二場　兩軍の中間なる原野

奥にて敵襲の喇叭　リア、コルデリア及び兵士大勢登場舞臺を過ぎて退場

りて其まゝ退場、續いてエッヂヤー及びグロスター登場

エッ　コレ御老人、此樹蔭を假の宿と御賴みなされ、そして善人の榮えむことを、よつく御祈念あらせられい。私が再び還つて參る時には、嬉しい御土産を持參致しまする。

グロ　どうぞ無事に往つて來られい。

とエッヂヤー退場

敵襲の喇叭の響聞え、間もなく退軍の喇叭聞ゆる、エッヂヤー再登場

エッ　サア〳〵御老人、御手を取りませう、かうしては居られぬ、リア王には御敗北、末姫君諸共生檜の御身となられました。サア御手を取りませう、御出なされ。

ケロ　イヤ、これで澤山、のたれ死は此處でも出來る。

エッ　ハテ、又其樣な間違つた御心を。人間と申すものが、此世へ來るも往ぬるも天命なりや、天命に背いてはなりませぬ。たゞ何時にても死ぬる覺悟が、肝要でムりまする、サア御出あれ。

ケロ　げに〳〵、さういやればそれもさうか。

と二人退場

第三場　ドーバー附近　英軍の陣營

旗鼓を携へ勝誇りたる躰にてエドマンド、捕虜としてリア、コルデリアを伴ひ、隊長兵士等と共に登場

エド　役人共、其囚人を引立てい、追つつけ處分法に就き、大命の下る迄、よつく番を致して置け。

コル　幸を求めて禍を招ぐは、間々ある習ひとは云ひながら、おいたはしい父上の御身の上どうも悲しうてなりませぬ。妾一人の上ならば、如何なる不運も、不運とも思ひませぬどして父上、父上には御女、妾には姉君達、今は敵軍の御二方に、御對面を願ひませうか。

リア　否々々、此足て牢屋へ參ると致さう。其許と二人水入らずて、籠の鳥と歌ひ暮さう。父の祝福が受けたいと云ふならば、此父は膝をついて、却て其許が宥恕を乞ふぞや、祈禱も一緒、讃美歌も一緒、昔語を致した

り、蝶々の樣な大宮人を笑つたり、小人共の話しあふ、殿中の消息を立聞いたり、又は直接にも言葉を交はし、君寵の移り替り、權門の盛衰何やかやと、神の探偵でもあるやうに、此の世の中の、隱れた秘密を搜るも一興。さて我等は牢屋の中から、月の出入で差引する、潮の樣な君臣達が、離合集散を、高見の見物と致さうか。

エド　其囚人を引つ立てい。

リア　此樣な犧牲（自分等云ふ）の供物には、神々も御手つから香をふりかけて、よも疎略にはすまじきに。えゝ乍去コルデリア、其許とから、一旦一緒になりし上は、神業ならばいざ知らず、人間力で二人の仲は裂かせまい。先づ其眼を拭ふがよい。サア〳〵來やれ。

（リア、コルデリア護送せられて退場）

エド　コレ隊長、此處へ〳〵、此書附を受納あれ（と書附を渡す）そして只今の囚人の、後から牢屋へ參られよ。足下の爲めに昇進の途を開いた某、ハテ、此書附通りに致されたなら、立身出世は瞬く間コレ聞かれよ、須らく時世に合はすべきは男兒の本分。めゝしき心は武人に似合しからぬものでムる。足下が此度の大役に就きては、彼是の問答は無益たゞ承諾致さるゝか、それとも外に、出世の方法があるや如何に、それだけが承りたい。

隊長　慥かに御受を致しまする。

エド　出來された。首尾克く成し遂げて、樂しく此世を送られい。して又此儀は、一刻も早く、書中に示せし通りに計らはれよ。

隊長　不省ながら、殼麥を食つて、車を曳く牛馬ではムりませぬ。苟くも一

男兒に似合はしき役目とあらば、屹度致すてムりませう。

と隊長退場

賑やかなる喇叭の音の中にアルバニー、ゴネリル、レガン、役人及び從者等登場

アル　エドマンド殿、今日の功勞天晴々々。加之武運飽迄強く、此度の戰爭の目指す敵を、生擒られしは見上げた働き。此上は件の捕虜を、一つには彼等の身分所業を考へ、又一つには我等が後日の安全を慮り、さて其上にて、相當の取扱を致すやう賴み入る。

エド　某は又、件の老王には、御齡が御齡なり、まして御身分が御身分なり、其御愍然なる御身の上に、稍もすれば俗民の憫憐を惹き、我が部下の士卒をして、其戈を逆にせしむる如き、不思議の力もあらむと思ひ、密

室に押籠めまゐらせて、警固の者を附け置きました又同一の慮りより。皇后をも諸共に、押籠めまゐらせましてムりまする。此上は明日にても、或は後日にても、何分の御處分に就き、御詮義あらせられう節、御召出あらば、早速御連れ申すてムりませう。乍去只今は、まだ汗も血も乾きませず、戰友を失ひし悲み去りもやらず。總じて如何なる義戰とても、身戰場の難を經たる者は、心熱して冷めざる中は、想ひ遣るだに苦患てムりまするされば。コルデリア姫、幷に父王御處分の義は、更に後日を期して、然るべきことゝ存じまする。

アル　コレ氣に障へて呉れるな、乍去此度の戰爭に於ては、足下を以て、只だ一人の武將と思へど、共に萬機を統ぶる、予が同盟の君とは思はぬぞよ。

レガ　イヤそれは、此妾の心次第で何うてもなること。其樣な事は、一先づ妾に御問合せなされた上、仰せられたが宜しうムりませう。此妾に成り代り、妾が職權を身に帶して、三軍を率ゐたエドマンド其一事で十分に、公爵殿が同盟の君主とも、謂はれぬ事はムりますまい。

ゴチ　其樣に勃然になることはないわいの。縱令其許が職權とやらを讓らずとも、エドマンド殿には其身の力で、如何なる功績をも立てうわいな。

レガ　イヽヤ此身に成り代り、此身の職權を帶してこそ、王公とも肩を並べると申すもの。

アル　いかうエドマンド殿の庇立をせられるが縱令エドマンド殿が、夫の君であらうとも、夫より上によも力は入れられまい。

レガ　冗談が事實になるは、往々あることぢやと申しますぞへ。

ゴチ　ハテ、其樣な事を申した者は、大方戀て氣もそゞろ、眼も歪んだ籔睨みであらうわいの。

レガ　姉上、妾は少々氣分がすぐれませぬ。さもなくば、おもいれ御返答を致す所でムりますが、只今は申しませぬ。コレ大將（エドマンドを指す）妾が軍勢も、捕虜も國も、みんな卿に預くる程に、卿の心一つで計らへや。妾の身の上とても其通り、殘りなく卿に引渡しましたぞ。此上は卿を以て我が夫、我が主君と仰ぐ由を、世間一統に知らせたい。

ゴチ　そんなら其許は、エドマンド殿を、我がものにせう意ぢやな。

アル　それを留むるは、汝の力には及ばぬ事ぢや。

エド　又は公爵の御力とても。

アル　ヤイ生れ損ひ、予には其力があるぞよ。

レガ　（エドに向ひ）早う太鼓を打たせて、妾の職權は卿に讓る赴を、三軍に知らせたが宜いわいな

アル　アイヤ暫く、申聞ける事がムる。コリヤ、エドマンド、予は大逆の罪を以て、汝を只今逮捕致す。又汝と諸共に、此の婦人の皮を被つた、毒蛇めを逮捕致す（とゴチリル指しながら）。まつたレガン殿、卿がエドマンドを後夫にとの其願ひは、ゴチリルに代つて、某より差留めますぞ。ハテ此殿御には ゴチリルの先約がムる。依つて夫たる某が、妻の爲めに此緣談に故障を申入れる。それ程後夫が欲しいなら、寧そ某へ申込まれい、ハヽア某の女房は、最早他に先約がムる。

ゴチ　これは何とした狂言ぢや。

アル　こりやグロスター、身仕度はそれてよいな、然らば喇叭を吹いて、軍中を尋ね見よ。人も知つたる、汝が惡むべき數々の大逆を、刀にかけて證さむ爲め、汝の相手を致さむと、現れ出づる勇士があらう若しさる勇士も現れずば、即ち予が相手を致す。

（と手袋を投げる（挑戰の儀式））

いやかく予が申すことに、寸分の誤謬なきことは、汝の胸を割いて證して見せうず。

レガ　えゝ胸苦しや、おゝ胸苦しや。

ゴチ　（傍白）それでこそ、毒藥の効能は、爭はれぬ（先刻よりレガンの氣分すぐれぬはゴチの毒を飲みし故と知るべし）

エド　其返禮には、某もかくの通り。

と同じく手袋を投げ出す

何ぢや某を以て大逆人とは、跡形もない卑怯な仰せ。先づ〳〵公爵の喇叭を以て御尋ねあれ。召に應じて出て來る者なりとも、さては公爵御自身なりとも、何奴此奴の用捨はない。打ちみしやいて某が潔白を證かし、某が面目を立てゝ見せう。

アル　誰かある、軍令使を呼出せ。

エド　罷り出てよ軍令使、軍令使々々々々

アル　いや汝が頼む所は、只だ汝の一身ばかり汝が率ゐし軍兵は、悉く予が名を以て徴し出したるもの、然るに今や予が名を以て、既に暇を遣せしぞ。

レガ　漸々苦しうなつて參る。

アル　レガン殿には不快の樣子、予が陣屋へお連れ申せ。

とレガン扶けられて退場

軍令使登場

コリヤ、軍令使近う――喇叭を吹け――そして之を陣中に讀み聞かせよ。

役人　いざ〳〵、喇叭を。

と奥にて喇叭を吹く

軍令使「陣中の將士聽聞せよ、其身素性正しく、門地賤しからざる將卒にて、我こそは今グロスターの伯爵エドマンド殿を、數の大逆を犯せる罪人なりと、一命にかけても云ひ張らむと思ふ者は、三聲の喇叭を合圖に名乘り出てよ。右エドマンド殿にはさる汚名を雪がむ爲め、屹度相

手を致さるべきものなり」

エド　それ喇叭を　と喇叭の第一聲を吹く

軍　最一度　と第二聲を吹く

軍　最一度

と第三聲を吹く、引續き奥にて返答の喇叭聞ゆる、エッヂヤー武裝し喇叭手を先立てゝ登場

アル　喇叭に應じて罷り出てたは、如何なる存じ寄りか尋ねて見よ。

軍　其方は何者ぢや、名は何と申すぞ、身分はいかに。して又召に應じてかく速かに罷り出てたは、如何なる存じ寄か申して見よ。

エッ　いや某が名字は、大逆の牙に嚙まれ、虫の喰つたやうに消え失せ申してムる。なれども某が門地素性は、相手の敵同然てムりまする。

アル　相手の敵とは誰を申すぞ。

エッ　ハテ、グロスターの伯爵、エドマンド殿に代つて、相手をせらるゝは何誰てムりまするな。

エド　誰あらうエドマンド自身ぢやゝして汝が拙者への申分は。

エッ　先づ〳〵刀の鞘を拂ひめされい。某の申すことが、若し御氣に障つたなら、早速突いて來らるゝが宜い。某も此通り、見られよ大逆賊を滅ぼさむと、かけたる誓、身の大役、身の面目を護らむ爲めの此一刀、無禮の擧動とばし思はるゝな。さてエドマンド、汝若年ながら、位高く權盛んに、武功著るく、新たに顯要の職に上り、勇氣膽略見るに足るとは申せども、神には不敬、兄には不悌、父には不孝の大逆人、まつたこれなる明德の公爵に對して善からぬ企て。腦天の頂より足蹠の塵に至る迄、

汚れ果てた大逆人とは汝が事ぢや。ハテ此言葉が違うと申すか、然らば此腕此劍に、某が勇を盡して、汝の言葉に詐りあるかあらざるか、汝が胸に試して見む。

エド　誠を申せば、汝の名字を云はせ置くべき筈ながら、汝が器量骨格天晴なるに、詞付さへ賤しからぬ者と見たるが故、我身萬一の爲を思へば、武士道の掟に依り、相手は致されぬ所を、特別を以て致し遣はすさて汝が只今の大逆呼はり、其詞は其まゝ汝に返却致す。忌々しき虚言を申すの條不屈千萬、去りながら、かく云はれた丈では身に泌むまい。此劍を以て、未來永劫しかと思ひ知らせて呉れうず。それ喇叭を吹け。

と合圖の喇叭を吹き兩人斬合ふ事、とゞエドマンド倒れる

アル　それ助けて遣はせ。

ゴチ　おゝコレ、グロスター殿、これこそ正しく、兼ねて企んだ陷穽、武士道の掟に依り、名乘りも擧げぬ相手には、相手を致すにも及ばぬもの。コレ卿は勝負に負けはせぬ。欺し討に遇うたのぢや

アル　默れゴチリル。默らずば此書面（ゴチリエドへの艷書、ケントがオスワルドの懷中より奪ひたるもの）て默らせて遣はす。コリヤ言語同斷の惡人エドマンド、是見て我身の非を悟れ、コレ破るな女、ハテ記臆があるてあらうが

と書面をエドに與へる

ゴチ　縱令記臆があればとて、國の法律は妾の自由、我夫の自由にはなりませぬぞへ、ハテ誰が妾を何うするものて。

とゴチ退場

アル　奇ッ怪千萬、ヤイ此書面を存じ居るか。

エド　問はるゝ迄もない事ぢや。

アル　誰ぞゴチリルに從て參れ、何を致すやも計られぬ、よう氣をつけて遣はせ。

と役人一人退場

エド　（エッヂヤーに向ひ）汝が申せし程の事は、如何にも某致した覺えがある。イヤサ、もつと上手を致して居るいづれ顯れる時節があらう乍去、それは最早過ぎ去りし事、某が一身とても其通りして某を斯樣な目に合はせたる、汝は抑も何者ぢや。素性正しき名門の子とあらば、恨みは殘さぬ、罪は恕す。

エッ　いかにも、今は互に恨みを晴さう。コレ、エドマンド、素性に於ては、此

身は決して汝に劣る者ならず。若し優りたらば、汝が我への罪は增すばかり。コレ聞け我が名はエッヂヤーと申し、汝が父の嫡子なるわ、實に神々に偏頗なし、不義の快樂に耽らむとすれば、其快樂を道具に使つて、不義者を罰せらるゝ。乍恐父上とても、暗い處て汝といふ子を設けられた、其報いで御兩眼を失はれた。

エド　實に道理、因果の車はこれて丁度一廻り、某ははや覺悟致した。

アル　されば、こそ其許（エッヂヤーを指す）の素振に、何うやら高貴い點があると見た。コレ近う參られよ、予は其許をも、又其許の父親をも、惡き者に思ひし事はなかりしぞや。

エッ　某とても、それは承知でムりまする。

アル　して今迄は何處に潜み、父親遭難の始末をば、如何して承知致され

しぞ。

エッ　父の難儀を承りしは、父の介抱を致せし故てムりまする。いや御聞下され、搔摘んて申しませう、此胸も張り裂けるばかりの悲しい話てムりまする。殺せ斬れと、手嚴しき父の命、何卒して遁れたいとの心から――おゝ命と申すは棄て難いもの、一思ひに殺されうより、嬲り殺しに殺されても、少しも長う生きて居たい人心――身を狂人に窶して纏縷にくるまり、犬も厭ふ乞食委て忍び居しに、圖らずも兩眼を抉出かれ、血みどろになつた父に邂逅ひ、手引を致して處々方々を渡り歩き、父に代つて乞食を致し、又は父の生害を、思ひ留まらせしも幾そ度、なれども某と云へる事は、遂先刻試合の場に上る時迄、遂に申聞けませなんだは、想へば誤り。さて試合の場にては、素より必勝は逆め期

し難き事故、初めて父子の名乗を致し、某が身を窶して以來の、一伍一什を語り聞けましたに、さらてだに衰へ果てた胸の中、感慨に堪へやらて、喜びと悲しみの中央に、微笑を湛へて、其まゝ永眠致しました。

エド　身に泌みて心苦しい其物語、本心に立還るべき善知識。乍去其後を御話しあれ、まだ云ひたい事がある樣子。

アル　いやもつと悲しい話ならば、暫く控へられい。予はこれだけて、既に泣き出したい斗りぢやに。

エッ　悲しい物語が御厭なら、是だけてもう澤山とは御尤、乍去此上にも又々悲しい物語を申上げねばなりませぬ。某がかく悲嘆に暮れ居る處へ、さる一人の男參り、嘗ては見る影もなき某の乞食委に、側へ寄るさへ厭はれしに、此時初めて某と知り、猿臂を伸して某が襟頸に掛け、

天も破れよとばかりに泣出だし、又父が屍の上に身を投げ懸けさてリア王殿下、並に彼自らが、古今無類のいと哀れなる經歷を物語り、其物語の中に、悲しさいとゞまさりしか、彼が命の玉の緒も、弛み初めしと思はれて、氣を取失ひ倒れし時、折しも響く二度目の喇叭。某は其まゝ此方へ馳付けました。

アルし　して其男と申すは。

エヲ　御追放のケント殿でムりまする、委を窶して恨みもあるべき、國王殿下の御供を致し、我身を賣つた奴隷でも、出來ぬ程の御奉公を致されました。

紳　と紳士血の付いたる小さ刀を携へ登場

御救助々々。

エヲ　助けてとは何を助けて。

アル　早やう申せ〳〵。

エヲ　其血刀は如何なる仔細。

紳　まだ暖りて烟の立つ、コレ此血は御胸から——おゝ最早御死亡なされました。

アル　死んだとはそりや誰が、早う申せ。

紳　夫人でムりまする、アルバニーの公爵夫人でムりまする。さて又御妹君も、夫人の御手にて、御毒害と只今御懺悔遊ばしました。

エド　ヤア某は、姉妹二人に夫婦の契を籠め置きしが、さては三人諸共に、祝言を致すぢやまで。

エヲ　ヤ、ケント殿の御出でムる。

アル　たとひ生あるも、生なきも、兩人を茲へ引出せ。

と紳士退場

これぞ我人に懲誡の天罰なれば、憫然とも思ふに及ばぬ。

ケント登場

おゝケントであつたか。折が折とて式作法も相成らぬ、失禮はお互に許すと致さう。

ケン　某は國王殿下に、御告別の爲め參りし者。殿下には此の處に、御在てはムりませぬか。

アル　いや一大事を忘れて居た。エドマンド、國王には何處に在すぞ、コルデリアは何處に居るぞ。イヤ、ケント、此有樣を一見致せ。

と役者等コヂリル、レガンの屍骸を引出す

ケン　さて〳〵、これは何として。

エド　何はしかれ、此エドマンドはあやかり者、某故に姉は妹を毒害し、さて其上て自害を致した。

アル　誰かある兩人の顏を掩うて置け。

エド　あゝ今暫しの命が欲しや、此通りの惡人ながら、致して置きたい善事がムる。ハテ少しも早う城中へ人を遣し、リア王コルデリア姫を御助けあれ。亡きものに爲奉れとの書付を、某より遣してムりまする。ハテ手遲れとならぬやうに。

アル　さらば早う馳せ付けよ、エッヂヤー頼む。

エッ　して其書付の所持人は何者、書中の趣を見合すべき由、汝の手形が欲しい。

エド　實に〳〵、然らば某が劍を御持參なされて、隊長に御遣しなされ。

アル　命限り根限り急ぐがよい。

とエッヂヤー退場

エド　其書付と申しまするは、公爵夫人並に某よりの差圖を以て、コルデリア姫を獄中にて縊殺し、表面は姫御苦腦の餘り、御自害ありしやうに見せ懸けむとの、計略でムりまする。

アル　此上は神の擁護を頼むばかりぢや、者共暫く彼方へ連れて參れ。

とエドマンド擔ぎ去らるゝ

リア、死せるコルデリアを抱き、エッヂヤー、役人等と共に登場

リア　無念ぢや〳〵口惜しい、おゝ人情知らずの其方共よつく聞け、其方共の口やら眼やらが此身にあらば、泣いて叫んで、青天の圓天井も、落

さずには置くまいもの。娘は死んだ、死んだぞや、生きた死んだの鑑定、は予にも成る、娘は死んで石のやうぢや、コリヤ鏡を貸せ、娘の呼吸で鏡が曇るか濕れうなら、ハテ其時は生ある證據。

ケン　聞及ぶ世界の滅亡が來つたか。

エド　其日の俘を目に見る心地。

アル　さては萬事休せるか。

リア　ヤ、此羽毛が呼吸で搖らぐ、娘はまだ生きて居る、コリヤ今迄の嘆きも悲みも、消えて了う時が來た。

ケン　（跪き）おゝ殿下お懷かしうムりまする。

リア　イヤ彼方へ往んで呉りやれ。

エ　これは忠義無雙の、ケント殿でムりまする。

リア　いや何奴も此奴も逆賊共、何うして臭れう、後一息て蘇生る處を、其方共の妨故、今は早や還らぬ旅。コレ、コルデリア喃、暫く待ちや、何ぢや最早其上に物云う事も叶はぬか。ほんにいつも優しい從順しい、低い聲てあつたがなう、女の鑑とは其許が事、ア汝を縊つた下郎奴は、此父が手に懸け殺したぞや。

役　いかにも方々、其通り御手に懸けられまして厶りまする。

リア　てあらうがな役人、切味の善い劍を以て、手當り次第に切り捲くつたは昔の事。今は老耄れた其上に、數の災厄て力も拔けた。いや其方は誰ぢや、予が眼は餘り眼性が宜しうないが、今直ぐに當てゝ見せう。

ケン　世の中には、幸運の骨頂と不運の骨頂と厶りまするが、不運の骨頂は、則ち某て厶りまする

リア　イヤ老眼朧朦として判然致さぬ、汝はケントてはないか。

ケン　左樣て厶りまする、殿下の微臣ケントて厶りまする、バテ殿下の從僕カイアスは。

リア　彼奴こそは天晴男、又劍道の天晴達人、去りながら今は死して朽ちて居る。

ケン　いや殿下、其カイアスこそ、則ちかく申す某て厶りまする——

リア　フフム、やがて判明致すてあらう。

ケン　殿下御災厄の初めより、悲しい御成行の御供を致した此某——

リア　よう此處へ參つて呉れた。

ケン　いや誰とても此處へ參つて、よう參つたとは申されませぬ、殺氣紛々とは此處の事、二人の姉姫達は、我から御手を下して、無慘の最期を

遂げてムる。

リア　おゝさうてあらう〳〵。

アル　殿下には、浮の空て物を仰せらるゝ。されば御詞を懸くるも無益てあらう。

エッ　いかにも詮なき事てムりまする。

一人の役人登場

役　エドマンド殿には只今死亡致されました。

アル　それは今、齒牙に懸くるにも足らぬ事ぢや。コレ〳〵列座の人々、拙者の意中を申聞けたい、外てもないが、國内瓦解の此の狀勢、此儘棄て置くべきにあらざれば、苟も善しと思ふ手段は、悉く之を用ふべく、先づ拙者は老王殿下御存生中、國家統御の權を悉く、御返納申すてムらう。

（エッゲヤー及びケントに向ひ）又其許等には、舊領に安堵の上、各其功績に應じて、相當の昇進をせらるゝが宜い。其外凡て勤王の誠を抽んてたる者は、應分の褒賞に預り、不忠不義の徒は、又應分の所罰を受くるてあらう。おゝアレ見られよ、あの御有樣。

リア　えゝ娘は殺された、生命がない。犬さへ馬さへ、さて鼠さへ生命があるに、其許には何故に息がない、最早其許は還つて來ぬ、盡未來際還つて來ぬ。えゝ何卒胸の扣鈕を外して呉りやれ、忝ないぞ、これを見たか、娘を見い、彼の唇を見やれ、それ其處を〳〵。

（リア倒れ死する）

エッ　それ御氣絶、申し殿下々々。

ケン　あゝ悲しや、此胸が裂くる斗りぢや。

エッ　申し殿下、御眼を御開きなされ。

ケン　いや却て御靈を妨げぬが宜い、御心安らかに、死出の旅路に御立たせ申すがよい。此世の荒い波風に、長く御引留め申上ぐるは、却て御本意に背くてムらう。

エッ　實に既や御冥目なされました。

ケン　想へば是迄御存生ありしが却つて不思議、謂はゞ疾くにも死ぬる御生命を、死ぬにも死なれず、今迄御持堪へなされしものと察します。

アル　御兩人の御亡骸を彼方へ御移し申せ、さて差當り我等はたゞ、此深き悲みにくるゝばかり。（ケントヤーに向ひ及エッヂ）我が心友たる御兩所は、何卒國政を司り、此の亂れた國家を統一の任に當らせ候へ。

ケン　いや、某は何れ遠からぬ中、還らぬ旅路に上らねばならぬ老人。御主君が彼方より召しまする、否とはどうも申されませぬ。

エッ　留めて留まらぬ今日の悲み、たゞ此胸に湧いた想ひを、語り合ふが關の山。理に落ちた談話は思ひも寄らず、それにつけても彼程の御齡で、彼程の御難儀、吾等若輩がこれから如何に生きればとて、彼の樣な難儀には逢ひもすまい、又彼の樣な齡迄、生きたうもないものぢなア。

と葬式の曲の裡に一同退場

リア王の悲劇　終

明治三十九年十一月廿七日印刷
明治三十九年十一月三十日發行
明治三十九年十二月二十日再版
明治四十年二月一日三版

リアル王
定價金八拾五錢

沙翁全集

著作者　戸澤正保
　　淺野和三郎

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
　　大日本圖書株式會社
　　代表者　專務取締役　宮川保全

發賣元　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
　　大日本圖書株式會社
　　大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
　　大日本圖書株式會社支社

大日本圖書株式會社特約販賣所

北海道 村上商店。川南。軒文舍。一二堂。富貴堂。東京 地球堂。森江。森江分店。寶文館。杉本。文林堂。水野。東京堂。林平。丸善。青野。中西屋。杉村。有隣堂。中央堂。松邑。大倉。金刺。北隆館。三友。播磨屋。內田。東海堂。文會堂。池田。良明堂。二松堂。富山房。山岸。神川 弘集堂。田沼。丸屋。正心堂。新潟縣 高桑。高橋。覺張。野島。西村。中山。萬松堂支店。北光社。目黒。山本。柿村。越佐同盟書館。埼玉縣 水野。いろは堂。會古堂。群馬縣 煥乎堂。淨觀堂。木田。千葉縣 多田屋。茨城縣 伊沼。明文堂。川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。栃木縣 內山。永樂屋。平石。青木。愛知縣 川瀨。永東。靜岡縣 吉見。谷嶋屋。古澤。三原屋。大石。山梨縣 柳正堂。岐阜縣 伽文堂。郁文堂支店。住。長野縣 日新堂。水琴堂。小林。朝陽館。西澤。西澤支店。盛文堂。丸山。宮城縣 庚屋。能文堂。上野屋。秋田縣 文港堂。佐藤。近藤。文明堂。青森縣 青霞堂。今泉。今泉支店。伊吉。山形縣 盛文堂。日向。牧野。相原。八文字屋。福島縣 曙堂。東海林。藤嶋。大澤。富山縣 中田。學海堂。愛媛縣 若林。文港堂。松田。南波。大阪府 中村。岡島。金川。中川。柳原。小谷。松村。開盛館。寶文館。前川。丸善。田中。三宅。石田。北村。木田。中井。竹內。木村。臺師寺。四村。中井。長崎縣 虎與號。集英堂。三重縣 安屋。奈良縣 文進堂。文進堂支店。畝傍館。和歌山縣 岩橋。今井。久松堂。安達。岩手縣 大島。川岡。板垣。福井縣 品川。中村。石川縣 字都宮。近田。島取縣 益田。今井。向井。土肥。足立。高知縣 富士越。高山縣 武內。鳳鳥縣 未來館。雲香堂。原田。山口縣 含英堂。梅龍堂。日新堂。超世館。秋田縣 平安堂。愛媛縣 靜齋堂。香川縣 開會堂。開文舍。龜友堂。佐賀縣 牧川。汲古堂。熊本縣 元野木。積善館。博文社。金文堂。大分縣 甲斐。野依。林洋。中園。佐野。長崎。宮崎縣 修進堂。谷。鹿兒島縣 吉田。金光堂。沖縄縣 ～見張。小神。臺灣 新高堂。

明治三十九年六月調

沙翁全集は抄譯に非ず 便宜に非ず 忠實と親切とを旨としたる完全譯なり 文壇の至寶として永く後世に傳ふべきものは即是なり

文學士 淺野馮虛 戸澤姑射共譯

沙翁全集

全部三十七卷 毎卷菊判約四百頁 數ヶ月毎に一卷宛刊行の豫定なり

總目次

▲第壹卷 ハムレット 姑射譯 定價金八拾五錢 郵稅拾錢
▲第貳卷 ロメオ・ヂュリエット 姑射譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢
▲第三卷 ヴェニスの商人 馮虛譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢
▲第四卷 オセロ 姑射譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢
▲第五卷 リア王 姑射譯 定價金八拾五錢 郵稅拾錢
▲第六卷 御意のまゝ 馮虛譯 四十年二月下旬發行の豫定

○ダイタス、アンドロニカス
○顯理六世上篇
○全 中篇
○全 下篇
○戀の無駄骨折
○間違の喜劇
○ヴェロナの二貴人
○リチャルド三世
○夏の夜の夢
○リチャルド二世
○ジョン王
○悍婦ならし
○顯理四世上篇
○全 下篇
○面白きウインザアの女房達
○から騷ぎ
○顯理五世
○十二夜
○シーザー
○終よき皆よし
○しつぺい返し
○トロイラス、クレシダ
○マクベス
○アントニー、クレヲパトラ
○アゼンスのタイモン
○コリヲレーナス
○ペリクリイズ
○シムベリン
○あらし
○冬物語
○顯理八世

大日本圖書株式會社

定期刊行

帝國文學 毎月十日發行 定價金拾五錢 郵稅壹錢

丁酉倫理會 倫理講演集 毎月末日發行 定價金拾貳錢 郵稅壹錢

教育研究 毎月一日發行 定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

土井晚翠著 好評 **東海游子吟** 定價壹圓 極美裝 全一册

中村不折畫 再版 郵稅八錢

帝國文學會編纂

明治三十七年 **百號紀念** 全一册 定價金參拾錢 郵稅金貳錢五厘

臨時第一 **懸賞小說と講演** 全一册 定價金貳拾五錢 郵稅金貳錢

新年號 全一册 定價金參拾五錢 郵稅金貳錢五厘

文豪小泉八雲 全一册 定價金貳拾五錢 郵稅金貳錢

創刊十週年紀念號 全一册 定價金拾五錢 郵稅金壹錢五厘

臨時第二 **シルレル紀念號** 全一册 定價金四拾五錢 郵稅金參錢

好評五版

文學士 片山正雄著 **男女と天才** 美裝一册 定價六拾五錢 郵稅拾錢

大日本圖書株式會社

終